

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第549集

むかい

向Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業関連遺跡発掘調査

2010

国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所
(財)岩手県文化振興事業団

向Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業に関連して平成20年度に発掘調査された遠野市向Ⅱ遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、縄文時代早期～前期の土器が出土したことから、近在する綾織新田遺跡よりもやや古い時期の人々の活動があったことを示すものと思われます。また、古代の堅穴住居が見つかったことから、当時における集落の一部であったことが明らかになりました。古代以降では、調査区内に近世の屋敷と思われる建物、墓、水田域が見られたことで、江戸時代の生活域であったことも明らかになりました。近世墓からは様々な副葬品が出土し、この地域における江戸時代の葬送風習に関する基礎資料となるものと考えられます。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、遠野市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成22年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田 牧 雄

例 言

- 1 本書は、平成20年度に行われた東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業に伴う向Ⅱ遺跡の緊急発掘調査成果を収録したものである。
- 2 向Ⅱ遺跡は、岩手県遠野市綾織町下綾織第35地割123ほかに所在し、岩手県遺跡登録台帳による遺跡番号はMF53-1203、遺跡略号はMKⅡ-08である。
- 3 発掘調査および整理作業は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の調整を経て、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受けた(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査および整理作業は、福島正と高橋静歩が担当した。
- 5 発掘調査を行った面積は8,000㎡である。発掘調査は平成20年4月14日～7月31日、整理作業は平成20年11月1日～平成21年3月31日の期間実施した。
- 6 本書の執筆は福島と高橋が分担して行い、編集作業は福島が行った。
- 7 発掘調査に際する基準点測量は株式会社協進測量設計に、航空写真撮影は東邦航空株式会社にそれぞれ業務委託した。
- 8 発掘調査においては、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、遠野市教育委員会、近隣住民の方々のご理解とご協力をいただいた。
- 9 発掘調査および整理作業にあたり、以下の方々のご教示をいただいた。(敬称略・順不同)
小向裕明・佐藤浩彦・黒田篤史(岩手県遠野市教育委員会)、山田原三。
- 10 本書では、国土地理院発行「遠野」・「人首」・「土淵」・「大迫」1:50,000地図を使用した。また、遺構の土層注記における土色および土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』2002年度版に準拠した。
- 11 発掘調査で作成した各種記録、出土した遺物および実測図、写真等の一切は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 12 本書発刊以前に現地説明会や当センターのホームページ(<http://www.echna.ne.jp/~imaibun/>)等で調査成果および調査経過の一部を公表したが、公表内容と本書記載事実との不一致、相違に関しては整理作業を経ている本書をもって正とする。

目 次

I 調査に至る経過

1 調査経緯	1
2 調査経過	1

II 位置と環境

1 遺跡の位置	2
2 地理的環境	2
3 歴史的環境	4

III 調査方法

1 発掘調査の方法	8
2 整理作業の方法	8
3 記載方法と凡例	9

IV 調査成果

1 調査概要と基本層序	11
2 検出遺構と出土遺物	11

V 総 括

1 縄文時代	65
2 古 代	65
3 近 世	66
4 最 後 に	68
報告書抄録	111

図版目次

第1図 遺跡の位置	3	第12図 S B01掘立柱建物断面(2)	20
第2図 遺跡の立地	4	第13図 S B01掘立柱建物断面(3)	21
第3図 周辺の地形	5	第14図 S B01掘立柱建物断面(4)	22
第4図 周辺の遺跡	6	第15図 S E01井戸跡	23
第5図 グリッド配置	9	第16図 S K01~04土坑	24
第6図 遺構配置・基本層序	10	第17図 S K07・08土坑、S D07溝	25
第7図 S I 01竪穴住居	13	第18図 S D01・02溝	26
第8図 S I 02竪穴住居、S X04落ち込み状遺構	14	第19図 S D07溝	27
第9図 S B01掘立柱建物を含む柱穴群	17	第20図 S D09溝	28
第10図 S B01掘立柱建物	18	第21図 検出墓壙群	29
第11図 S B01掘立柱建物断面(1)	19	第22図 S Z01墓壙	30

第23図	S Z 02墓壙	32	第35図	S Z 14墓壙	47
第24図	S Z 03墓壙	33	第36図	S Z 15墓壙	49
第25図	S Z 04墓壙	34	第37図	S Z 17墓壙	49
第26図	S Z 05墓壙	35	第38図	出土遺物(縄文土器)	51
第27図	S Z 06墓壙	36	第39図	出土遺物(剥片石器1)	52
第28図	S Z 07墓壙	37	第40図	出土遺物(剥片石器2・石製品・土製品)	53
第29図	S Z 08墓壙	38	第41図	出土遺物(土師器)	53
第30図	S Z 09墓壙	40	第42図	出土遺物(陶磁器)	54
第31図	S Z 10墓壙	41	第43図	出土遺物(金属製品)	55
第32図	S Z 11・16墓壙	43	第44図	出土遺物(銭貨1)	56
第33図	S Z 12墓壙	44	第44図	出土遺物(銭貨2)	57
第34図	S Z 13・18墓壙	44	第44図	出土遺物(銭貨3)	58

表 目 次

第1表	掲載遺物一覧(土器)	60	第5表	掲載遺物一覧(銭貨1)	63
第2表	掲載遺物一覧(石器・石製品・土製品)	61	第6表	掲載遺物一覧(銭貨2)	64
第3表	掲載遺物一覧(陶磁器)	62	第7表	掲載遺物一覧(その他)	64
第4表	掲載遺物一覧(金属製品)	62			

写真図版目次

写真図版1	航空写真	71	写真図版21	S Z 06墓壙	91
写真図版2	調査前現況、基本層序(1)	72	写真図版22	S Z 08墓壙	92
写真図版3	基本層序(2)、岩塊流	73	写真図版23	S Z 09墓壙	93
写真図版4	遺物包含層	74	写真図版24	S Z 10墓壙	94
写真図版5	S I 01竪穴住居(1)	75	写真図版25	S Z 11~13墓壙	95
写真図版6	S I 01竪穴住居(2)	76	写真図版26	S Z 14墓壙	96
写真図版7	S I 02竪穴住居、S X 04落ち込み状遺構	77	写真図版27	S Z 15墓壙	97
写真図版8	S X 01~03焼土遺構	78	写真図版28	S Z 17墓壙	98
写真図版9	S B 01掘立柱建物(1)	79	写真図版29	S Z 18墓壙・S X 06暗きよ	99
写真図版10	S B 01掘立柱建物(2)	80	写真図版30	出土遺物(縄文土器1)	100
写真図版11	S K 01~05土坑	81	写真図版31	出土遺物(縄文土器2)	101
写真図版12	S K 07土坑・S E 01井戸跡	82	写真図版32	出土遺物(石器1)	102
写真図版13	S D 01~04溝	83	写真図版33	出土遺物(石器2・石製品・土製品・土師器)	103
写真図版14	S D 07~10溝、作業風景	84	写真図版34	出土遺物(陶磁器1・金属製品1)	104
写真図版15	墓域	85	写真図版35	出土遺物(金属製品2)	105
写真図版16	S Z 01墓壙	86	写真図版36	出土遺物(金属製品3、陶磁器2、漆器)	106
写真図版17	S Z 02墓壙	87	写真図版37	出土遺物(銭貨1)	107
写真図版18	S Z 03墓壙	88	写真図版38	出土遺物(銭貨2・その他)	108
写真図版19	S Z 04・05墓壙	89	写真図版39	出土遺物(棺材1)	109
写真図版20	S Z 06~08墓壙	90	写真図版40	出土遺物(棺材2)	110

I 調査に至る経過

1 調査経緯

向Ⅱ遺跡は、東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）の施工に伴って、その事業区域内に遺跡が存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

東北横断自動車道は、東北縦貫自動車道（東北道）に合流、さらに北上市にて分岐し、西和賀町・横手市・大仙市を經由して秋田市に至る総延長212km（内岩手県内113kmで供用区間は45km）の高規格道路である。

本路線は、釜石港・大船渡港といった重要港湾や観光資源豊富な陸中海岸国立公園を有する三陸地方拠点都市地域と、先端技術産業の集積が著しい北上中部地方拠点都市地域や花巻空港等の岩手県内と秋田県とを結び、周辺地域のみならず岩手・秋田両県全域の産業・経済発展を担うことを目的に策定された。遠野～東和間については、平成10年度に遠野～宮守間で整備計画が、宮守～東和間では施行命令がそれぞれ出されている。また、平成16年度には新直轄方式による整備が決定している。

向Ⅱ遺跡については、過年度において遠野市教育委員会による試掘調査の結果、当路線事業地内に埋蔵文化財包蔵地の存在が確認され、その結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所は協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団に委託することとした。

この協議を受け、平成20年4月10日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で向Ⅱ遺跡の発掘調査に関する委託契約を締結し、発掘調査が行われることとなった。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

2 調査経過

向Ⅱ遺跡の発掘調査は、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所との委託契約に基づき平成20年4月14日より（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

同年4月14日午後、現地へ必要資材を搬入し翌日より本格的な調査に着手した。調査に際しては基準点測量や航空写真の撮影業務を外部へ委託した。また、調査区内およびその周辺、作業従事者の安全を保つための安全対策も適宜施した。

7月19日には現地説明会を開き、広く一般への公開を行った。この現地説明会では周辺住民を中心に約90名の参加があった。

7月23日には国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と岩手県教育委員会生涯学習文化課による終了確認が現地にて行われた。

7月末には航空写真の撮影、撤収準備作業や終了確認時に依頼された調査区内の埋め戻し作業を行い、当初の予定通り7月31日にすべての作業を終え調査現場を撤収し、調査区を岩手河川国道事務所に引き渡した。

整理作業は平成20年11月1日より埋蔵文化財センター内で行い、平成21年3月31日にすべての作業を終えた。また、この間に本書の執筆作業も行っている。

Ⅱ 位置と環境

1 遺跡の位置

向Ⅱ遺跡は、岩手県遠野市綾織町下綾織35地割123に所在する。遺跡の所在する遠野市は、岩手県の中央部よりやや南東に位置する。ここは早池峰山を中心とする北上山地の山塊が連なり、西へ猿ヶ石川が流れる。遠野市の人口は平成20年10月現在、市域面積825.62km²、人口31,151人である。これは平成17年10月1日に行われた宮守村との合併後のデータである。この合併により誕生した新しい遠野市は北の下閉伊郡川井村、西の花巻市(東和町・大迫町)、東の釜石市や上閉伊郡大槌町、南の気仙郡住田町・奥州市江刺区等の市区町村と境界を接することとなった。遠野市中心部は遠野盆地の中であり、四方を険しい峠によって他地域と連絡される。しかしながら、古くから陸上交通の要衝であり、内陸部と沿岸部を結ぶ東西ルートの重要拠点であることは近世において宿場町として栄えたことから想像できる。また、遠野南部家一万三千石の城下町であり、今もその地割りを多く残している。現在、遠野市の主要な産業は農業、畜産、林業からなり、近年では農作物としてホップ生産、馬産などが特に盛んで、全国的にも名の知れるところである。また、観光資源として、柳田国男の「遠野物語」の舞台として注目されており、この「民話のふるさと」を求めて全国各地から観光客が多く訪れている。

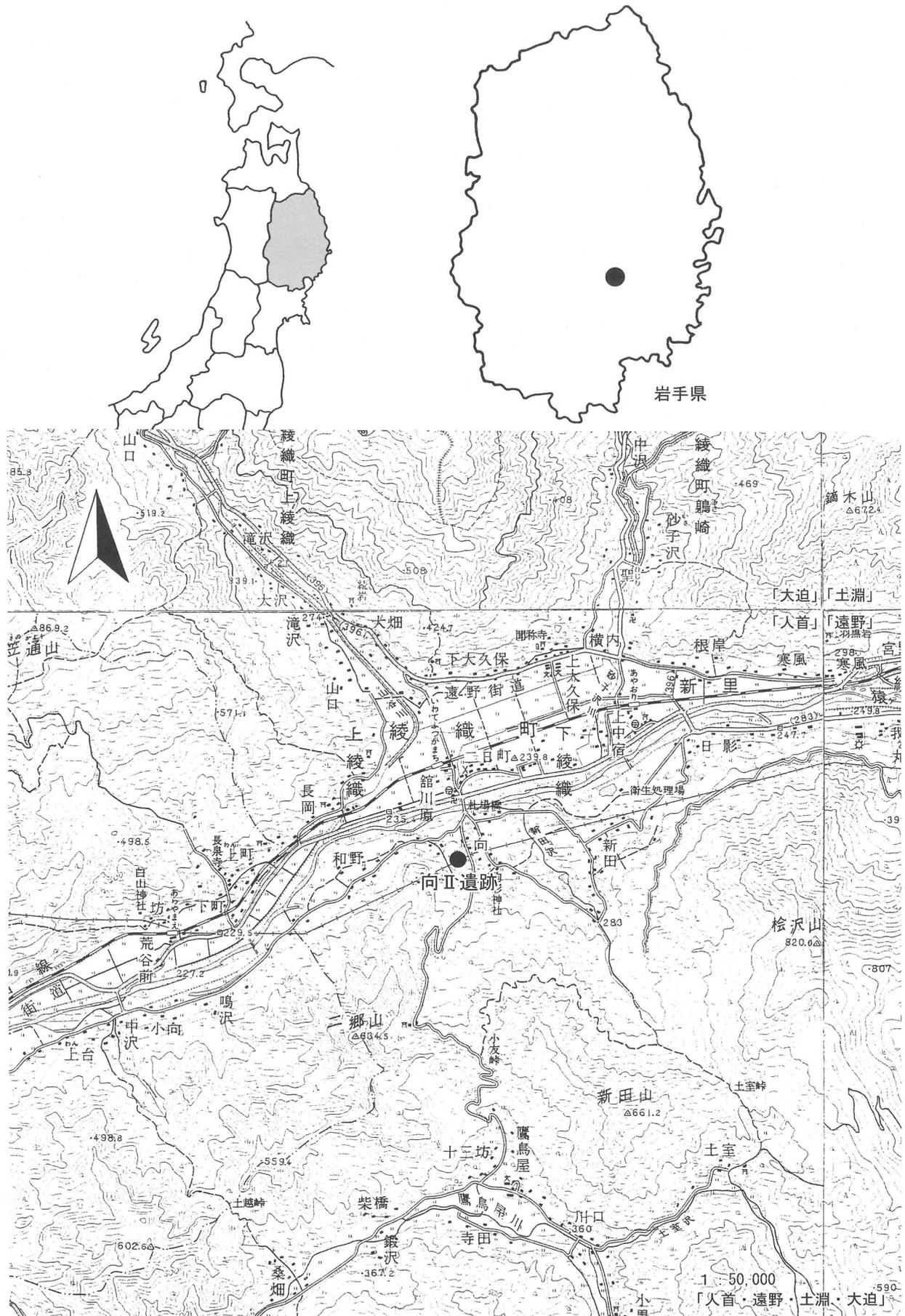
本書で報告する向Ⅱ遺跡は、現在JR釜石線遠野駅が所在する遠野市街地より約6km西、JR釜石線いわて二日町駅より猿ヶ石川を挟んで約1.5km南に位置する。猿ヶ石川の両岸に広がる田園風景とそれに迫り来るかのような山々などが明瞭なコントラストをなしている地域である。今回の調査地は、調査前には畑、水田、山林として利用されており、遺跡周辺も同様である。

2 地理的環境

岩手県は大きく分けて西側の奥羽山脈、東側の北上高地、これらに挟まれた盆地や平野地からなっている。遠野市は先述したとおり、北上高地のほぼ中央に位置する遠野盆地にある。北上高地は紡錘形の山地帯を形成し、南北に広がっている。山系最高峰の早池峰山は、標高1,917mで、東西に1,400～1,800m級の山々を従えるように連峰を形作っている。早池峰山の南には1,645mの薬師岳が位置し、非常に険しい大起伏地がみられる。しかし、遠野盆地はこの薬師岳に源を持つ猿ヶ石川や早瀬川などによって開析された広大な谷底平野である。この地帯は北上山系の花崗岩分布域となっており、特に遠野・土淵花崗岩帯は北上山系では最大の規模を有する花崗岩帯である。

向Ⅱ遺跡の立地する綾織地区は、猿ヶ石川両岸の狭小な谷底平野とそれを取り囲む中起伏山地からなる。これに加え、綾織地区北部では大起伏地がみられる。綾織町の下綾織にある向地区は猿ヶ石川南岸に位置し、北岸に位置する上綾織地域よりも平野部は狭く、洪積段丘の張り出しが顕著である。

向Ⅱ遺跡周辺は谷底平野からやや高位にある猿ヶ石川の南岸の洪積段丘の突端に立地している。周辺は南側に位置する丘陵地を源とする小規模な沢地形が形成されており、背面丘陵地より供給される土砂堆積物を含んでいるものとみられる。調査区内にも沢が認められ、調査区の大半を占める段丘面と微地形において様相を異にしている。



第1図 遺跡の位置



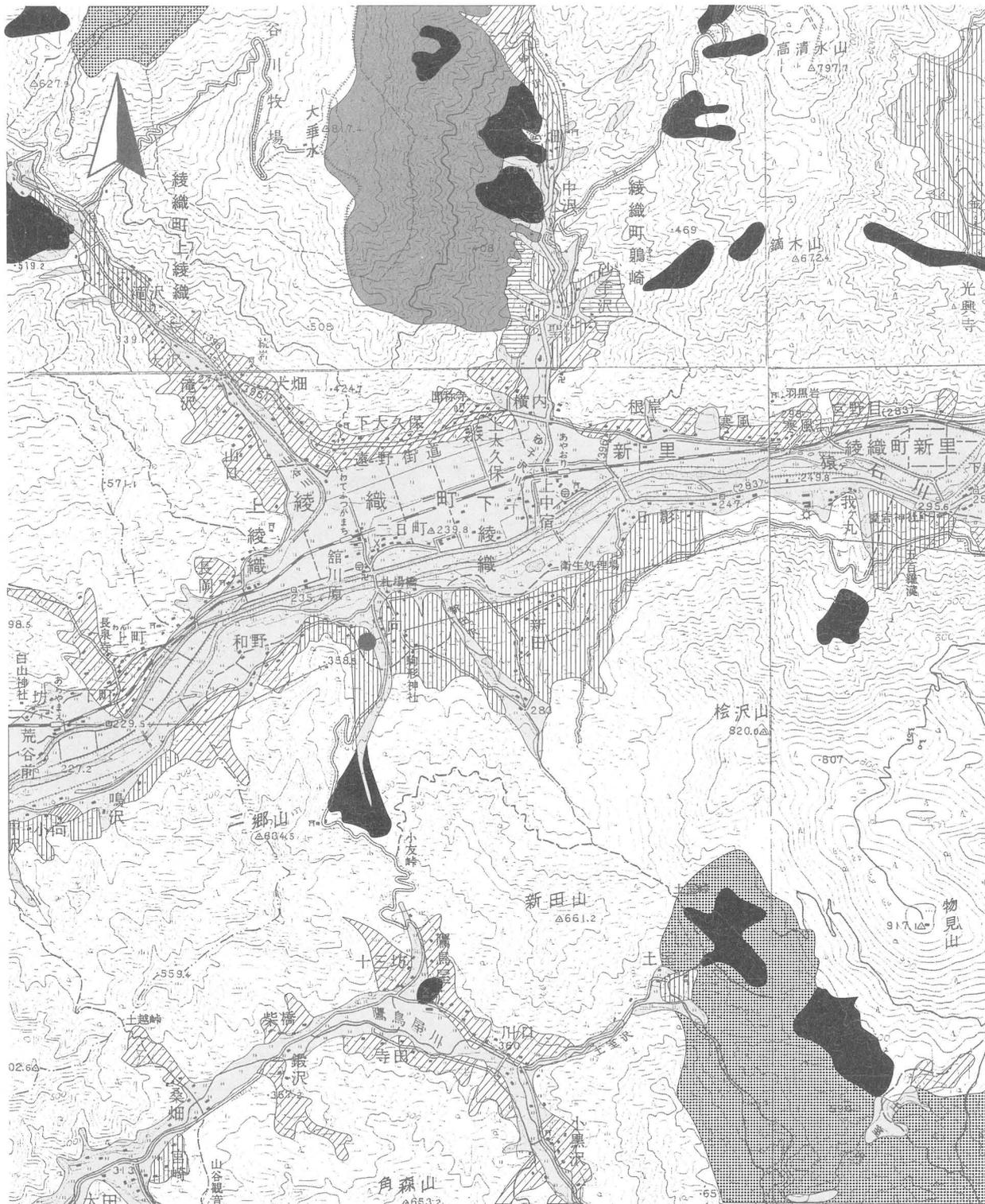
第2図 遺跡の立地

3 歴史的環境

向Ⅱ遺跡の所在する遠野市には、多くの遺跡が確認されている。本節では、旧遠野市域を中心に確認されている遺跡の分布状況を示し、考古学的観点により向Ⅱ遺跡周辺における歴史的環境について時代順に述べることとする。

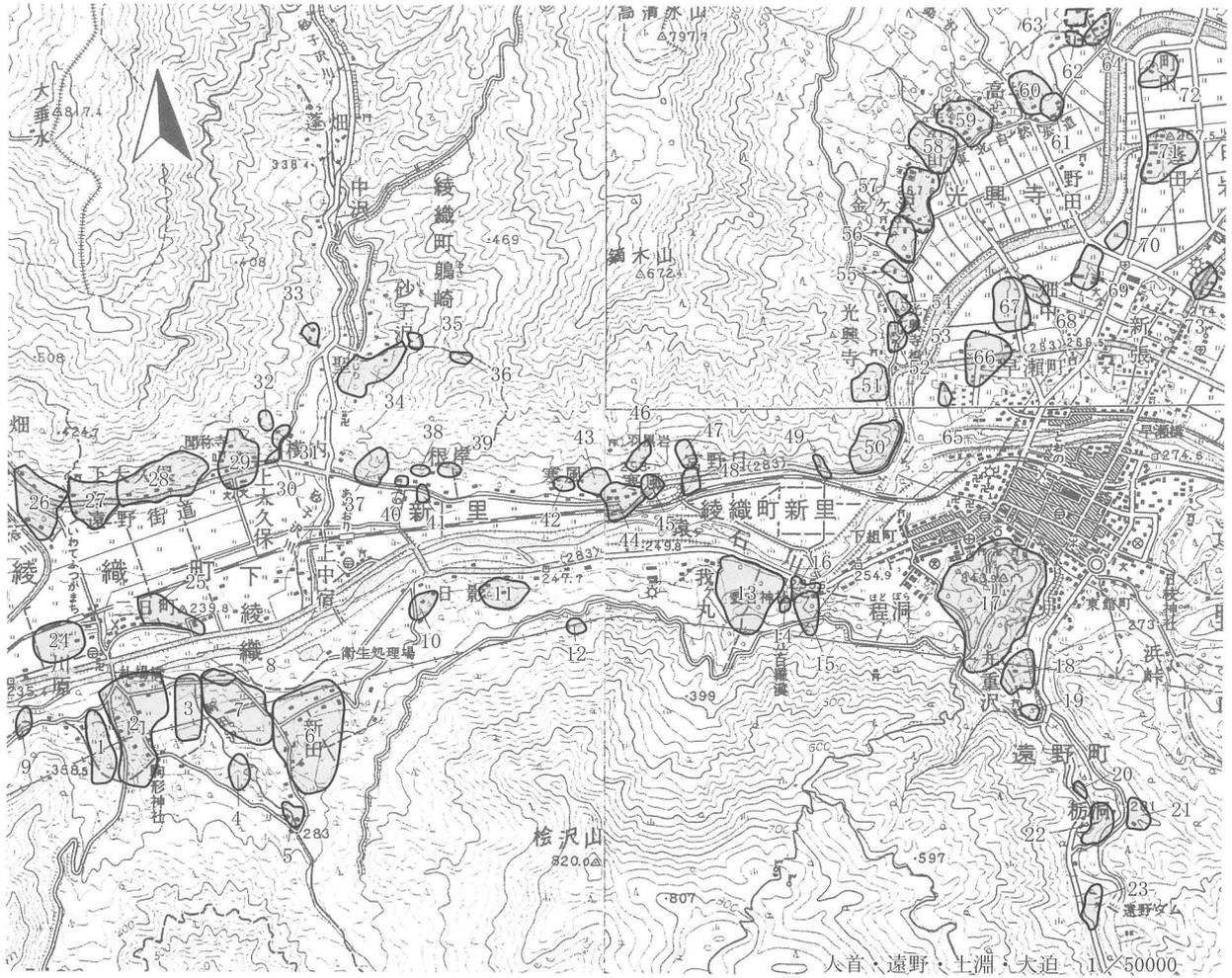
縄文・弥生時代

旧遠野市域では、縄文時代早期～前期の遺跡がいくつか確認されている。早期の代表的な遺跡は九重沢遺跡が挙げられる。この遺跡では、早期前葉～前期前葉にかけての遺構、遺物が発掘調査によって確認されている。特に、縄文時代早期に属する尖底土器、貝殻沈線文土器、表裏縄文土器などが出土している。また、寒風Ⅰ遺跡でも縄文時代早期・前期の遺構、遺物が確認されている。この縄文時代早期が、当地域における人々の活動を考古学的に確認できる最古の例である。その他にも縄文時代早期の土器が確認されている遺跡や散布地は存在するが、総じて詳細な様相が把握できる状況ではない。しかし、縄文時代前期に入ると、確認されている遺跡および遺構・遺物の数は増加する。向Ⅱ遺跡の東約2kmに所在する綾織新田遺跡では、縄文時代前期前葉～中葉を中心とした拠点的な集落遺跡であることが発掘調査によって明らかになっている。この綾織新田遺跡の集落は大形の竪穴住居群が規則的に配された状況が認められ、現在は国指定史跡（平成14年12月19日指定）として保存されてい



- | | | | | | |
|--|------------|--|-------------------|--|-------------------|
| | 大起伏山地 | | 中起伏山地 | | 小起伏山地 |
| | 山麓地及び他の緩斜面 | | 砂礫段丘 | | 谷底平野 |
| | 扇状地 | | 崖錐性扇状地
及び山麓緩斜面 | | 崖錐及び麓肩部
他の緩斜面部 |
| | 向II遺跡 | | | | |

第3図 周辺の地形



周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	種別	時代
1	向II	散布地	縄文・古代・近世
2	向III	散布地	
3	深沢野I	集落跡	縄文
4	深沢野III	散布地	
5	深沢野II	散布地	
6	新田	散布地	縄文
7	新田II	散布地	縄文・平安
8	胡四王元屋敷	集落跡	平安
9	向	散布地	縄文
10	熊野沢	散布地	
11	日影	散布地	
12	西風館	城館跡	中世
13	新里間木野	散布地	縄文・古代
14	新里新滝	散布地	縄文
15	新里愛宕裏	集落跡	縄文
16	新里五器洗場	散布地	縄文
17	鍋倉城	城館跡	中世～近世
18	九重沢II	散布地	
19	九重沢	散布地	縄文
20	栃洞II	散布地	縄文
21	栃洞	散布地	縄文
22	夫婦石袖高野	集落跡	縄文
23	ノ田	散布地	縄文
24	谷内(上野)館	城館跡	中世
25	巫子塚	散布地	縄文

No	遺跡名	種別	時代
26	田中	散布地	縄文
27	大久保III	散布地	古代
28	大久保II	散布地	古代
29	大久保	散布地	縄文・平安
30	横内III	散布地	縄文・古代
31	横内II	散布地	縄文
32	横内I	散布地	縄文
33	砂子沢I	散布地	縄文
34	砂子沢II	散布地	縄文
35	聖	散布地	古代・中世
36	ミサザギ蝦夷岩	洞穴	縄文
37	西門館(ミサザギ館)	城館	中世
38	来迎前I	散布地	古代
39	来迎前II	散布地	古代
40	来迎前III	散布地	古代
41	来迎前IV	散布地	古代
42	寒風II	散布地	縄文
43	寒風III	散布地	縄文
44	寒風I	散布地	縄文
45	寒風IV	散布地	縄文
46	寒風V	散布地	縄文
47	宮野目I	散布地	縄文
48	宮野目II	散布地	縄文
49	上宮野目	散布地・窯跡	古代・近世
50	角鼻館	城館	中世

No	遺跡名	種別	時代
51	光興寺館	城館跡	中世
52	天神III	散布地	縄文
53	天神II	散布地	縄文
54	天神IV	散布地	縄文
55	天神I	散布地	縄文
56	金ヶ沢II	集落跡	縄文
57	金ヶ沢I	集落跡	縄文
58	横田城(護摩堂館)	城館跡	中世
59	上ノ山	散布地	縄文・古代
60	高場	散布地	古代
61	東館	城館跡	
62	宮代I	散布地	縄文
63	宮代II	散布地	縄文
64	宮代III	散布地	縄文
65	下柳II	散布地	縄文
66	下柳I	散布地	
67	大柳	集落跡	縄文・古代
68	畑中	散布地	古代
69	葉研洲II	散布地	古代
70	葉研洲I	散布地	古代
71	蓬田	集落跡	縄文・奈良・中世
72	町田	散布地	
73	蟻ヶ崎	集落跡	縄文・古代

第4図 周辺の遺跡

る。また、縄文時代中期の集落として張山遺跡が著名である。複式炉を有する竪穴住居が検出されている。次に縄文時代後期の遺跡としては、甲子遺跡が挙げられる。ここでは、竪穴住居や掘立柱建物など集落の構成要素である遺構が検出されている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡では、高瀬Ⅰ遺跡・高瀬Ⅱ遺跡や蓬田遺跡などが挙げられる。高瀬Ⅰ遺跡・高瀬Ⅱ遺跡では、竪穴住居のほか掘立柱建物などが検出されており、地域の拠点的な集落が形成されていたと考えられる。竪穴住居からは多くの墨書土器が出土しており、その中には、「物部」や「地子不得」と解釈される文字が墨書されたものも含まれる。また、集落に近接して円形の周溝を伴う墳墓も確認されている。

中世・近世

中世では、篠館跡で大小様々な曲輪や切岸、土塁、竪堀など山城の縄張りを構成する遺構が検出されている。出土遺物の中には、中国産陶磁器や武器・武具類が出土している。中心となる時期は16世紀頃であると想定されており、当時の内陸と沿岸を結ぶ要衝であったこの地を治める武将が築いたものとみられる。近世は、甲子遺跡で近世墓が12基まとまってみつかり、これら近世墓からは様々な副葬品を伴って人骨も出土している。

引用・参考文献

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発掘調査報告書

- 1982 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第43集『寒風遺跡発掘調査報告書』
- 1991 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第155集『高瀬Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
- 2000 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第353集『篠館跡発掘調査報告書』
- 2004 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第435集『九重沢遺跡発掘調査報告書』

遠野市教育委員会発掘調査報告書

- 1991 遠野市埋蔵文化財調査報告書第3集『蓬田遺跡』
- 1991 遠野市埋蔵文化財調査報告書第3集『高瀬Ⅱ遺跡』
- 1997 遠野市埋蔵文化財調査報告書第10集『寒風Ⅰ遺跡』
- 1998 遠野市埋蔵文化財調査報告書第11集『甲子遺跡』
- 2001 遠野市埋蔵文化財調査報告書第12集『向Ⅱ・向Ⅲ・深沢野・新田Ⅱ・間木野遺跡』
—遠野都市計画道路埋蔵文化財試掘調査委託事業報告—
- 2002 遠野市埋蔵文化財調査報告書第13集『新田Ⅱ遺跡』

Ⅲ 調査方法

1 発掘調査の方法

人力でのトレンチ掘削により表土の層厚や遺物包含層の広がり等を確認後、表土除去作業を重機によって行った。現況が山林部分にあたる地点においては、必要に応じて抜根および根回りの表土除去を人力作業で補った。

表土除去の後、人力による遺構検出作業を行った。遺構検出作業で平面的な検出が困難な地点および遺構については、適宜人力によってトレンチを掘削し、断面による土層の把握を行いながら進めた。検出した遺構の掘削は、堅穴住居については4分法、その他の遺構については規模・形状に則して4分法、2分法など適宜選択して行った。また、遺構埋土の掘削に際しては層位毎に遺物を取り上げるよう努めた。

調査中は遺跡名を略号（MK II-08）によって記録し、遺構名も略号を用いた（略号に関しては3節を参照）。

遺構平面図および断面図は、おもに遣り方測量によって実測および作図を行った。また、必要に応じて部分的に0.5～1 mの単位を基本とする等高線を入れた地形測量や平板を用いた実測も合わせて行った。

遺構の写真撮影は、35mmモノクロ・35mmカラーリバーサル・6×7 cm判モノクロによる撮影を基本とし、補助的にデジタルカメラによる撮影も行った。撮影に際しては、当センター所定撮影カードの記入および写し込みを行い、撮影写真の整理に活用した。

2 整理作業の方法

発掘調査終了後の整理作業は、当センターの室内にて行った。発掘調査時に作成し、点検を経た遺構の実測図は浄書し、図版として体裁を整えた。また、遺構等発掘調査時に撮影した写真はそれぞれアルバムにより整理を行った。本書に掲載する遺構写真は選択した後、紙焼きし写真図版用に版下を作成した。

洗浄および注記を行った遺物は、接合作業を行った。これらのうち、本書に掲載する遺物を選択し、実測と写真撮影を行った。選択基準は、実測可能な残存状況のものを原則とし、土器類の破片については特徴から時期や土器型式を特定できるもの、口縁部の残存するものを中心とした。遺物の実測作業は、原寸での実測を基本とした。実測を行った遺物は、浄書し図版用の版下を作成した。また、縄文土器器表面や銭貨等は湿拓により採拓した。遺物の写真撮影は外部へ委託し、デジタルカメラを用いて当センター内で行った。これら撮影した遺物は、圧縮したデータを編集し写真図版として掲載した。なお、これら遺物写真データはJPEG形式にて保管している。すべての処理が終了した遺物は、本書掲載遺物と不掲載遺物とに分けて所定の場所へ収納した。

本書の原稿執筆は各担当者が分担して行い、表現方法や名称などは担当者間で協議を行い、統一事項を定め全体の中で可能な限り統一を図った。統一事項の詳細については次節で述べることとする。

3 記載方法と凡例

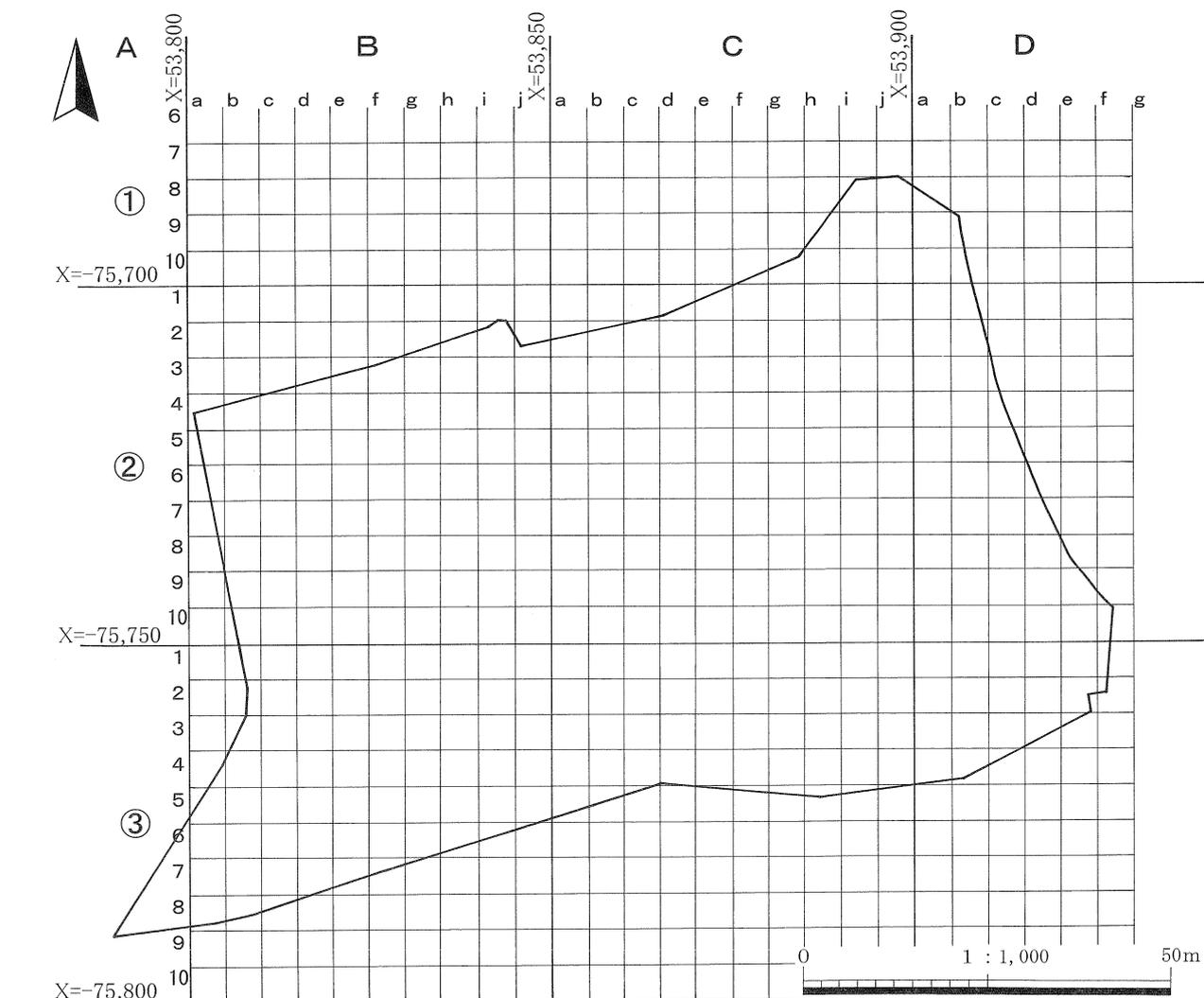
(1) 遺 構

遺構名および遺構番号は、略号を用いて表現した。遺構略号は遺構種別によって分け、煩雑にならないよう努めた。遺構略号は各地区共通とし、以下の通りである。S I……竪穴住居、S B……掘立柱建物、S K……土坑、S P……ピット（柱穴）、S Z……墓壇、S X……その他。遺構番号は遺構種別毎、検出した順に通し番号を付与した。遺構に関する記述は、以下の通り統一して行った。平面規模は「m」単位で、深さは「cm」単位で表現した。遺構平面図における平面位置を示す方法として、グリッドを設け、これによる表記を行った。遺構断面図に示した基準高は、すべて海拔標高値とした。

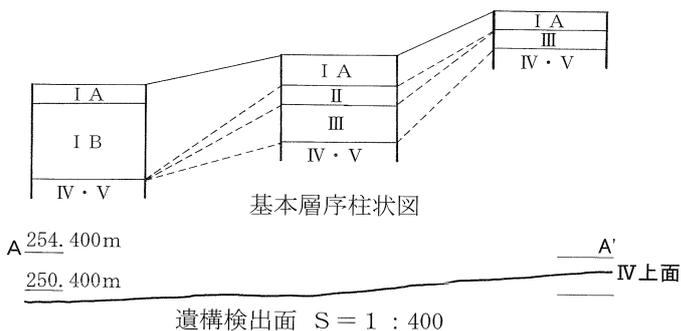
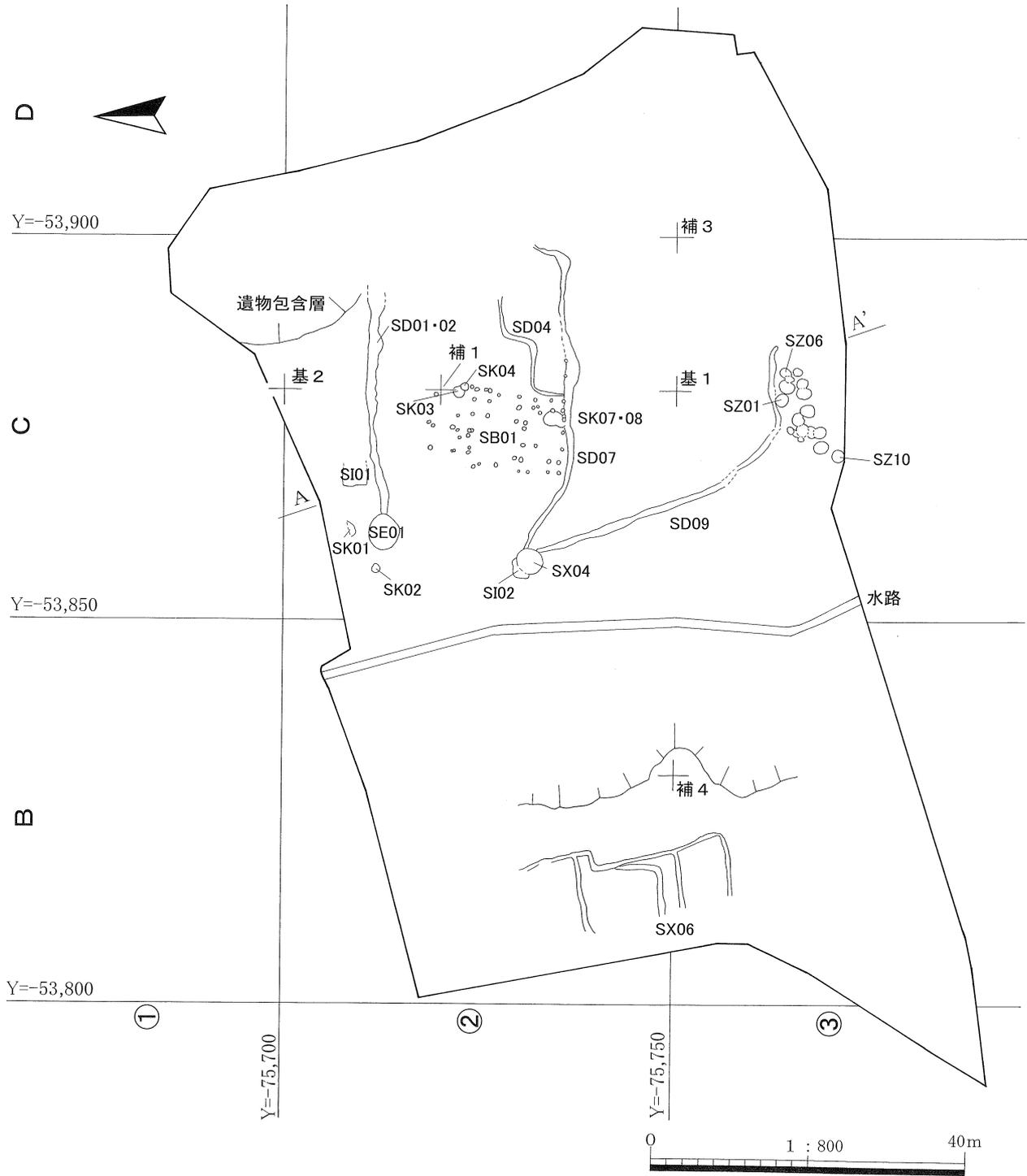
(2) 遺 物

遺物の掲載番号は通し番号を付与し、本文・観察表・実測図・写真図版にそれぞれ同一の番号を表記した。

遺物実測図は、土器を3分の1、陶磁器類・石器・石製品・鉄製品を2分の1でそれぞれ統一し掲載した。なお、銭貨の銭文拓影は原寸で掲載した。本書に掲載した遺物は、掲載遺物一覧に一覧表として掲げた。この表中で示される遺物固有の番号は、先述した種別毎の番号である。遺物写真図版に掲載した遺物の縮尺は不定としたが、遺物種類毎の縮尺はおおむね統一した。



第5図 グリッド配置



- I A層……表土層
- I B層……耕作土層
- II層……黑色土層
- III層……漸移層
- IV層……黄褐色土層
- V層……礫層

第6図 遺構配置・基本層序

IV 調査成果

1 調査概要と基本層序

調査区は、南から北へ舌状に張り出す段丘上に位置する。標高は約250mである。調査区中央に一筋の谷があり、ここを沢が流れている。この沢を境に西側は遺構・遺物ともに希薄であるが、東側では縄文時代～近世にかけての遺構・遺物が確認された。

検出した遺構は、縄文時代の遺物包含層、古代の竪穴住居、焼土遺構、近世の掘立柱建物・溝・墓壙・暗きよなどである。遺構の分布は調査区を南北に貫く沢を境に、東側で集中をみせており、西側は暗きよを伴う近世の耕作域のみの検出であった。出土遺物は、縄文土器・土師器・陶磁器類のほか、近世墓より出土した様々な副葬品が主である。

基本層序は、大別するとⅠ層が表土、Ⅱ層が黒色土層、Ⅲ層が漸移層、Ⅳ層が黄褐色ローム層、Ⅴ層が礫層である。Ⅰ層は近現代の造成、耕作に伴うもの（ⅠB層）も含め、層厚10～20cmであり、暗褐色を呈するシルトを基調とする。おもに近現代に畑等の耕作が行われていた調査区東側の北半はⅣ層のブロック土が多く認められ、同時にⅠ層直下にⅡ層あるいはⅢ層は残存していない。Ⅱ層は谷に向けて下る比較的低位面においてのみ確認される。Ⅲ層以下は無遺物の自然堆積層である。なお、調査区西側では、現代の水田耕作土直下でⅤ層より古いと考えられる粘土層がみられ、この一帯の水田は大規模な造成により形成されており、この改変によってほぼ全体で旧地形を留めていないことが判明した。特に、より低い段に造られている水田においても、このような状態であったため適宜トレンチを設定して削平されていることを確認するに留めた。

2 検出遺構と出土遺物

(1) 検出遺構

遺物包含層（写真図版4）

調査区東端に位置する。比高差約3m、斜度約45度の斜面に東西5m、南北3mの範囲で確認された。この東向きの斜面には、表土直下で黒色～暗褐色シルトが概ね3層に亘って堆積している。遺物包含層における堆積の厚みはもっとも厚い場所で60cmを測り、斜面上端部と法面および斜面下端はそれぞれ近現代の造成による改変が認められる。堆積時期を特定する火山灰は確認されなかった。また、岩塊流の影響による砂礫の混入は認められなかった。この堆積土中より縄文時代早期後半～前期初頭にかけての土器、縄文時代晩期の土器が出土した。土器以外では石器・石製品・土製品なども出土した。

岩塊流（写真図版3）

調査区中央を流れる沢の東側で検出した。この沢に並行するように広い範囲で岩が密にみられ、特に傾斜から推測される下流側では、1m以上の大きさを有する岩も少なからず認められ、この下流側においては岩塊の密度も高く隙間がない状態である。層位はⅠ層の直下で概ね岩塊表面が見え始め、岩塊はⅡ層中に認められる。ただし、場所によって岩塊はそれより下層にも抉り込んでいる。形成時期を特定する遺物や火山灰は確認されていないが、南側背後に存在する丘陵を発生源とする自然災害の痕跡として考えられる。また、平安時代の土師器を伴う焼土が、岩塊流直上の黒色土層で検出でき

ることから少なくとも平安時代より大きく遡る時代に形成されたものであると考えられる。

S I 01 竪穴住居（第7図、写真図版5・6）

調査区東側の北端に位置する竪穴住居である。削平のため東半は残存せず、壁および床面は失われている。また、東西方向を指向するS D01溝によって南側の一部を切られている。

カマドが確認できなかったため主軸方向は不明であるが、四方の壁は概ね正方位に沿う。後述する通り礫が西壁に列状に張り付くためこれを奥壁と捉えれば、西向きの竪穴住居と言うこともできる。

平面形態は方形を呈し、規模は南北3.19m、東西3.16mを測る。深さはもともと残存する部分で24cmを測る。

埋土は暗〜黒褐色シルトを基調とし、いずれも大きな地山ブロックを含む。また、下層は炭化物を多く含み、地山ブロックの大きさや割合が上層に比べ減じる。

壁は残存していない東側壁を除き、約45度の傾きを持つ。南側壁上端部はS D01溝によって若干切られている。

床面は、平坦で堅く締まる。意図的に張床が施されている状況は確認できなかったが、床面ではわずかに様々な土が混ざった状態が認められる。床面直上では、西壁を中心に「コ」の字形に大きな礫が並べ置かれた状態でみられる。西側は2段積みになっている箇所も認められるが、概ね1段をもって構成されている。いずれの礫も岩塊流でみられる礫と大差ない。これらは大半が長方形や長楕円形を呈し、長辺が壁に沿っている。礫の下端と床面と間には埋土がほとんど介在せず、礫を外すと床面と柱穴プランが確認できる。このような状況を勘案するとこれらの礫は、この住居廃絶後あまり時間を置かず、なおかつ柱は失われている状態で壁を意識して意図的に並べ置かれたものと考えられる。この意図については不明であるが、廃絶後が前提となっていることから、竪穴住居の2次的な利用や廃絶に伴う祭祀などが考えられる。

柱穴は、西壁に沿って3個、中央に1個、想定される東壁に沿って3個存在する。

出土遺物はなく、時期判定の材料を欠くが、中世〜近世の溝に切られることから少なくとも中世以前の遺構であると考えられる。現段階では、カマドがないが遺構のプランや柱穴が存在することから古代の竪穴住居であると考えられる。

S I 02 竪穴住居（第8図、写真図版7）

調査区東側の西端に位置する竪穴住居である。S X04落ち込み状遺構によって切られている。遺構の西側は沢に向けて下る斜面に近接する。

カマドが確認できなかったため主軸方向は不明であるが、四方の壁は概ね正方位に沿う。平面形態は南北方向がやや短い長方形を呈する。規模は東西1.25m、南北08.20m、深さ15cmを測る。

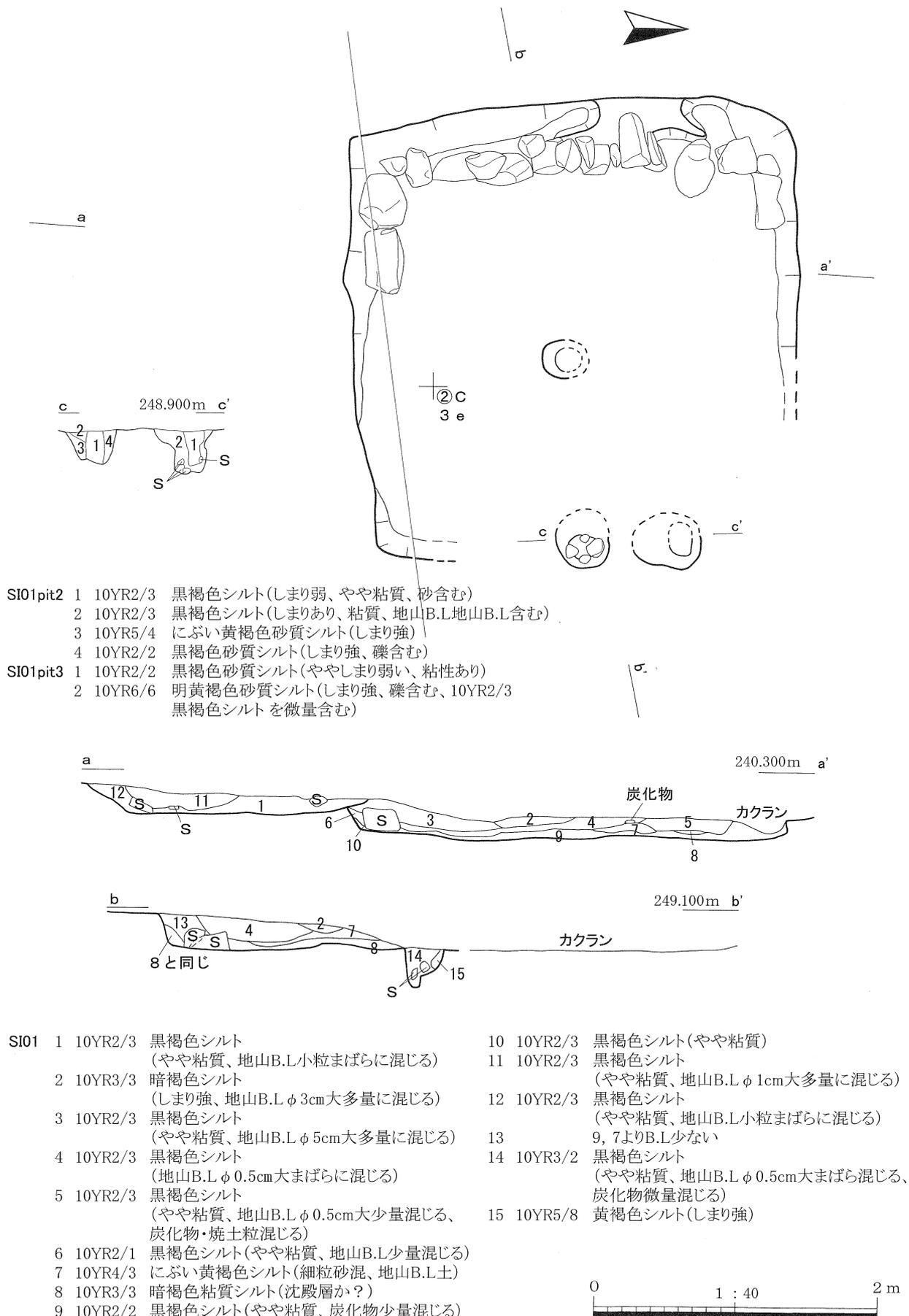
埋土は黒褐色シルトを基調とし、おおむね3層の自然堆積からなる。いずれもやや粘性があり、床面と想定される底面とは明瞭に区分できる。

壁は欠損する南東側の一部を除いて約45度の角度で立ち上がる。これも底面同様、壁と埋土の区分は明瞭である。

底面は固く締まるが、明瞭な張り床は認められなかった。この床面は平滑であり、ほぼ水平を保っているが、柱穴などは認められない。

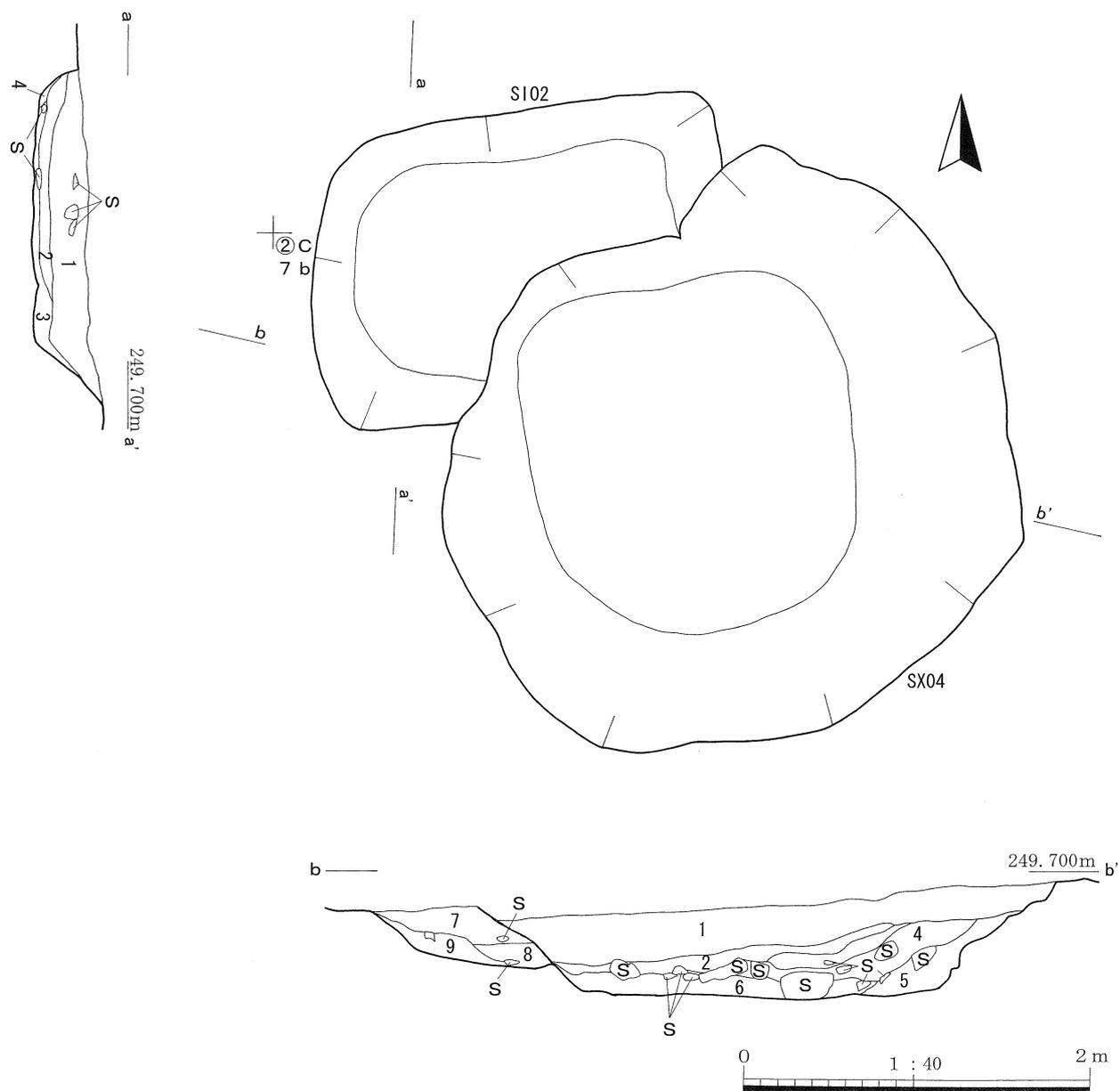
出土遺物はなかったが、これを切るS X04落ち込み状遺構からは鉄滓や焼土が出土している。これがこの遺構と関連する遺物かどうかは不明である。

平面形態や床面の状況から竪穴住居としたが、規模が小さくカマドや柱穴など竪穴住居とする要件も少ないことは事実であり、土坑など他の種類の遺構である可能性も考えられる。



第7図 SI01竪穴住居

2 検出遺構と出土遺物



- SI02
- 1 10YR2/3 黒褐色シルト(やや粘質、ややしまり弱)
 - 2 10YR2/2 黒褐色シルト(粘質、地山B.L φ 0.5cm大微量含む)
 - 3 10YR2/2 黒褐色シルト(粘質、ややしまりあり、10YR5/8黄褐色シルトわずかに含む)
 - 4 10YR3/3 暗褐色シルト(やや粘質、しまり強、10YR5/8黄褐色シルトを含む)

- SI02・SX04
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト(やや粘質)
 - 2 10YR2/3 黒褐色シルト(やや粘質、焼土粒を微量含む)
 - 3 10YR2/3 黒褐色シルト(やや粘質、ややしまりあり、焼土を多量に含む)
 - 4 10YR2/2 黒褐色シルト(粘質、礫を多く含む)
 - 5 10YR2/3 黒褐色シルト(やや粘質、しまり強、地山質土を含む)
 - 6 10YR2/3 黒褐色シルト(粘質、ややしまりあり、地山B.L φ 1cmをわずかに含む)
 - 7 10YR2/3 黒褐色シルト(やや粘質、ややしまり弱)
 - 8 10YR2/2 黒褐色シルト(粘質、ややしまりあり、地山B.Lわずかに含む)
 - 9 10YR2/3 黒褐色シルト(ややしまりあり、地山質土をわずかに含む)

第8図 SI02竪穴住居、SX04落ち込み状遺構

S X01～03焼土遺構（写真図版8）

調査区東側の北西にまとまって位置する3つの焼土遺構である。この地点は岩塊流の及ぶ地点であり、これらS X01～03焼土遺構はいずれも岩塊流直上に堆積する黒色土上面で検出した。焼土範囲輪郭は不明瞭であるが、おおむね10～15cmの不整な円形である。焼土直上では、それぞれ平安時代の土師器がまとまって出土しており、平安時代の遺構である可能性が高い。ただし、焼土が形成される要因については不明である。

S X04落ち込み状遺構（第8図、写真図版7）

調査区東側の西端に位置する大形の落ち込み状の遺構である。S D02・03溝と連結しており、S I02竪穴住居を切る。

平面形態はやや不整な円形を呈し、規模は直径1.63m、深さ32cmを測る。また、底面の直径は、約1mである。

埋土は黒褐色シルトを主体とし、中位から下位にかけて礫や焼土が多く認められる。埋土には地山ブロックや焼土ブロックがあり、人為堆積の可能性が考えられるが、周辺で形成された人為的なものが、自然に流入し堆積した可能性も考えられる。また、埋土に含まれる礫は、遺構周辺でみられる岩塊流の一部と思われ、これも周辺から流れ込んだ可能性が考えられる。

底面は平坦で、壁も約45度の角度で立ち上がる。埋土中にみられる焼土が底面で形成された様子はなく、この遺構の性格を推測する材料にはならないと思われる。

時期は、埋土中から出土した遺物が鉄滓のみで判断材料に欠けるが、近世のものと考えられる2本の溝がこの遺構に続いていることから近世の遺構である可能性が高い。

S B01掘立柱建物（第9～14図、写真図版9・10）

調査区東側北半に位置する掘立柱建物である。表土直下のⅢ層あるいはⅣ層上面である平坦な面で柱穴群を検出し、これらのうち柱筋が通る38個の柱穴をこの建物を構成する柱穴と想定した。平坦面は、掘立柱建物の南に位置する東西方向のS D07溝を境に北へ向けて連続する。南から北へ向かって緩やかに下ると想定される旧地形から考えるとこれは著しく不自然であり、この掘立柱建物建築時に造成された可能性が考えられる。当初、この周辺の現況が畑等耕作域を牧草地に転用した土地であったことから、この畑地造成に伴うものである可能性も考えたが、掘立柱建物の大半は山林部分であったことから、平坦面は掘立柱建物建築に伴って造成されたものとみられる。

建物主軸は長軸方向がおおむね南北方向となり、これを仮に建物の主軸方向とした場合、建物の向きは東へ約5度傾いている。

建物全体の最大規模は、南北（桁行）16.8m、東西（梁行）9.6mである。柱穴の規模はそれぞれ異なるが、大半が直径約50cm、深さ約50cmである。

柱配置は南北（桁行）が8間であるが、建物南端に位置する東西の柱列がその他の列より間隔が狭いため、身舎付属の床東部分である可能性も考えられる。この場合、身舎部分の桁行は7間である。一方、東西（梁行）は6間であるが、やはり東西両端が身舎付属の床東部分であるとすれば、身舎部分の梁行は3～4間である。これは、身舎の中で柱筋の通らない半間分の仕切り柱や間柱があるためである。

建物の向きや入り口は調査では確認できなかったが、建物の南北に溝が配されていることや現在の地割りなどから類推すれば東正面の南北棟である可能性が考えられる。柱配置から推測される間取りは3～4間取りである。

各柱穴掘方は、黒色や黒褐色シルトを主体とする埋土に地山ブロックが多く含まれ、その大半で柱

痕跡が認められる。柱穴によっては、底面に根がためと思われる石が認められるものも存在する。柱痕跡はいずれも掘方埋土より締まりが無くやや粘質である。これは、柱材が土壌化したことによるものであると考えられる。さらに、各柱穴で抜き取り穴が認められないことから、これらはいずれも柱材が抜き取られていないことが想定される。

柱穴の埋土より若干の遺物は出土したが、3 cmに満たないような微細な磁器の破片である。したがって、出土遺物からこの掘立柱建物の詳細な時期を特定することは難しい。掘立柱建物周辺の表土や攪乱層から出土した陶磁器類も破片のみであるが18世紀代を主体とする陶磁器類である。よって、この掘立柱建物も現段階では、およそ18世紀代の遺構であると推測する。

S E 01井戸跡（第15図、写真図版12）

調査区東側南端に位置する井戸と考えられる遺構である。遺構はS B 01掘立柱建物の北西12mのところに位置する。東西方向に延びるS D 01溝に連結する可能性がある。これについては、S D 01溝がこのS E 01井戸跡東端まで延びながらも、これより先へは延びていないこと、断面で明瞭な切り合い関係が認められなかったことなどの様相から推察される。

規模は東西3.5m、南北3.3m、深さ72.6cmである。遺構上端の平面はおおむね円形であるが、底面はやや隅丸の方形に近い形態である。

埋土は、大きく中央遺構埋土とこれら周囲の掘方埋土とに分けることができる。中央遺構埋土は5層のシルトや粘質シルトからなり、黒褐色から黒色の色調である。いずれも比較的締まりが無く、水分を多く含んでいる自然堆積層である。一方、掘方埋土は地山ブロックや巨礫が多くみられ、人為的に埋められた可能性が高い。巨礫は大きいものでは1 m近くの大きさを有している。いずれも近在する岩塊流中で認められる礫であると推測される。中央遺構埋土と掘方埋土との境界には痕跡等確認できなかったが、井筒や井戸枠の材が存在した可能性がある。

底面は比較的平坦で、この面では湧水が認められる。調査中は一晩で遺構内が満水になることもしばしばあった。

出土遺物は摩滅した縄文土器の微細片が掘方埋土最上層で数点みられるのみで、詳細な時期を特定し得ない。

遺構底面で湧水することや掘方の人為堆積が考えられることから、現段階では井戸であると考えられる。また、この遺構の東側に接続しているS D 01溝は併存していた可能性があり、これらは密接に関わる遺構であると考えられる。断定はできないが、この遺構に溜まり、溢れ出る水を東へ排出するために設けられた溝であるのかもしれない。

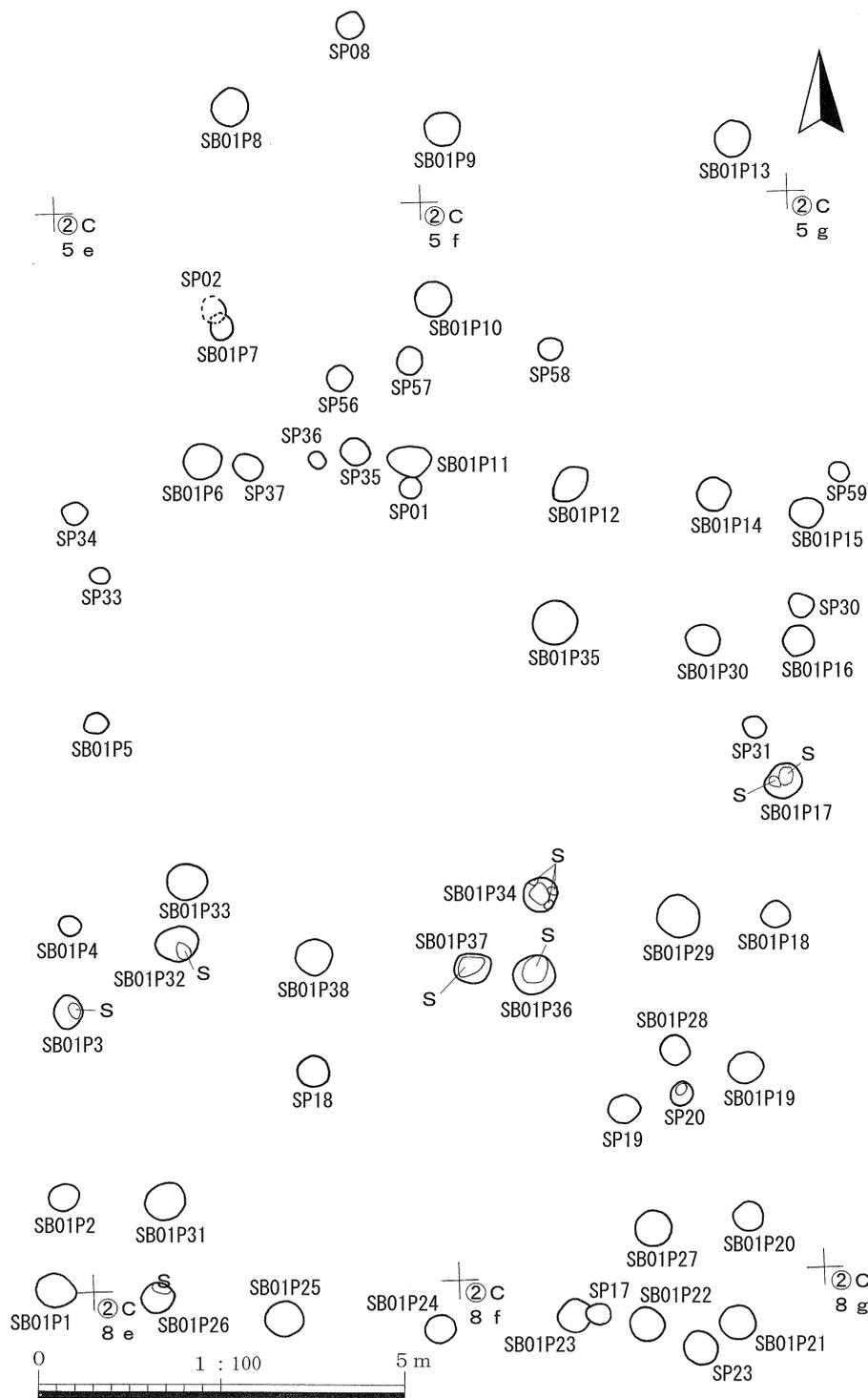
遺構の時期は不明であるが、後述するS D 01溝と併存すれば中世～近世であると考えられる。近世ならば、S B 01掘立柱建物に関連する井戸である可能性も考えられる。

S K 01土坑（第16図、写真図版11）

調査区東側北端に位置する土坑である。遺構北側は調査区外へ延びており、全体の様子は不明である。規模および形態は長軸1.12mの円～不整な楕円形と推定される。時期を特定できる出土遺物が無く性格とともに不明である。

S K 02土坑（第16図、写真図版11）

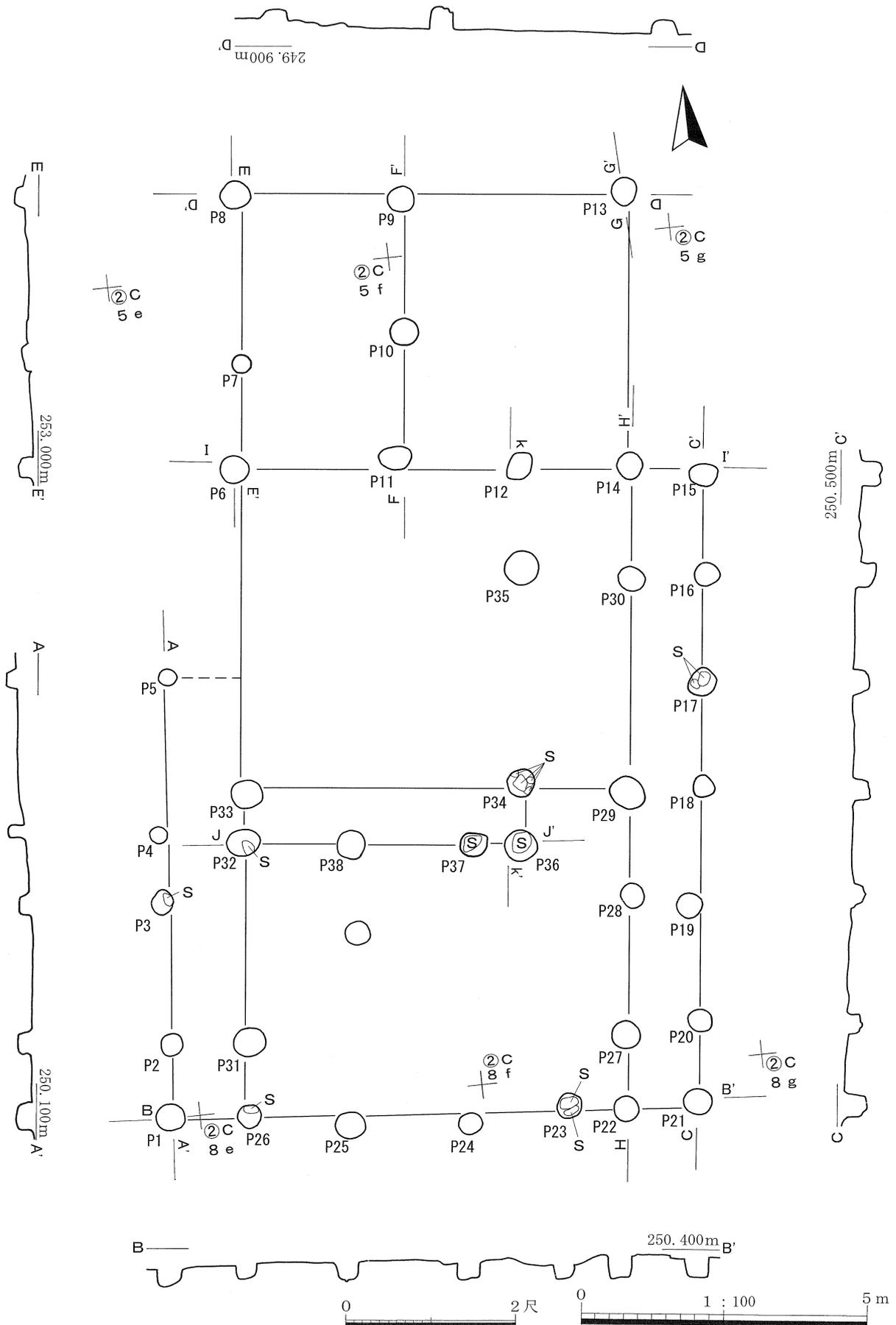
調査区東側北側に位置する土坑である。遺構埋土上部より近現代の耕作による溝に切られている。直径0.61mの平面円形で、深さは4.5cmの皿状である。埋土は黒褐色のシルトの単層である。時期を特定できる出土遺物が無く性格とともに不明である。



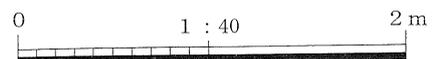
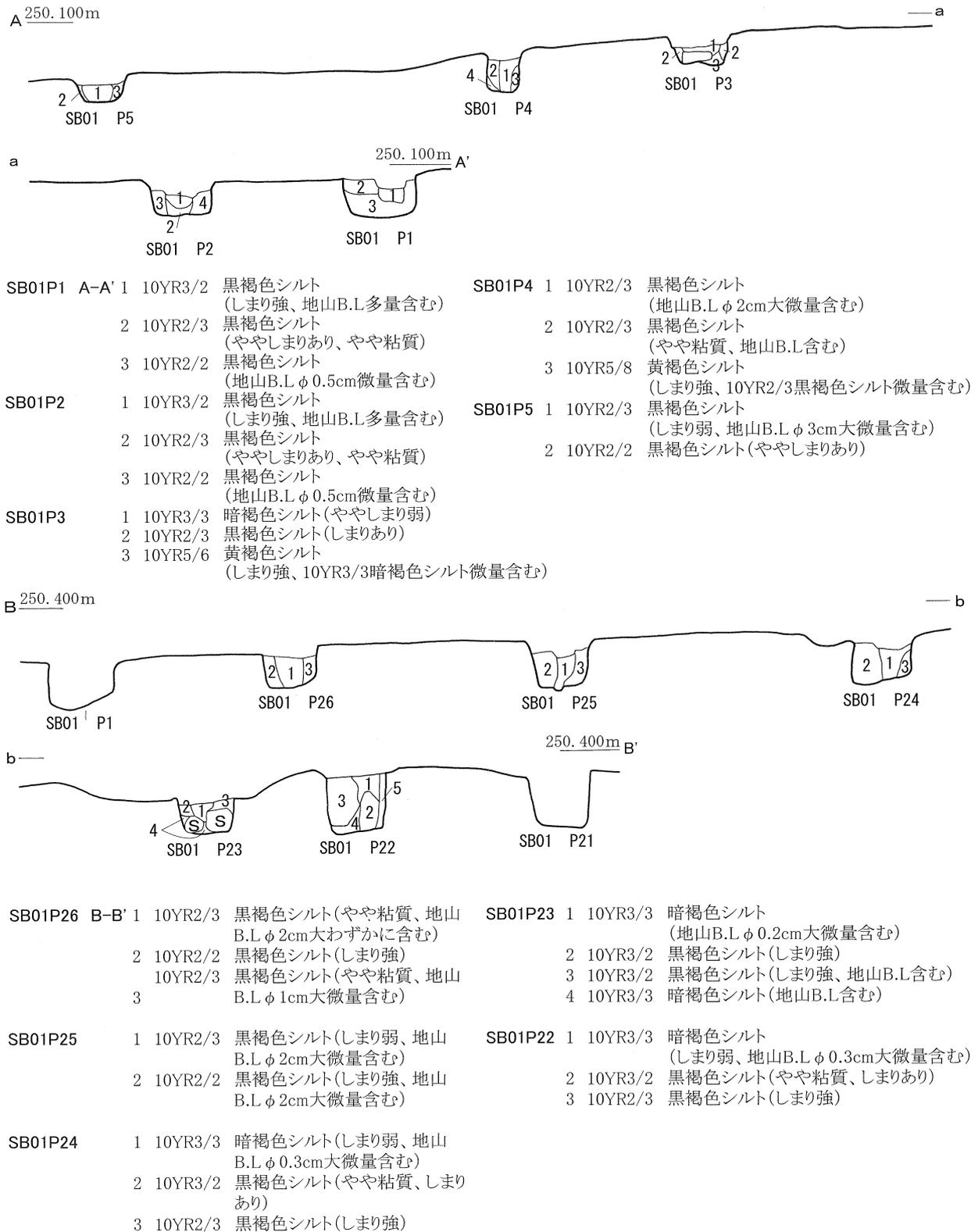
SB 01 周辺ピット一覧

旧No	掲載No	直径 (cm)	深さ (cm)	柱痕跡の有無	埋土		旧No	掲載No	直径 (cm)	深さ (cm)	柱痕跡の有無	埋土	
					柱痕	掘り方						柱痕	掘り方
	1	29	23	有	褐色	黒褐色		31	15	10	無	—	黒褐色
	2	43	9	無	—	黒色		33	12	24	有	黒褐色	黒褐色
	8	38	30	有	黒褐色	黒褐色		34	18	20	有	黒褐色	暗褐色
	17	13	21	無	—	黒褐色	SBP09	35	20	9	有	黒褐色	暗褐色
	18	15	6	有	黒褐色	暗褐色		36	12	15	無	—	黒褐色
	19	21	18	有	黒褐色	暗褐色	SBP33	37	17	17	有	黒褐色	暗褐色
	20	16	31	有	黒褐色	黒褐色		56	35	10	無	—	黒褐色
	23	18	25	有	暗褐色	黒褐色		57	40	10	無	—	黒褐色
	30	11	10	無	—	黒褐色		58	30	45	無	—	黒褐色

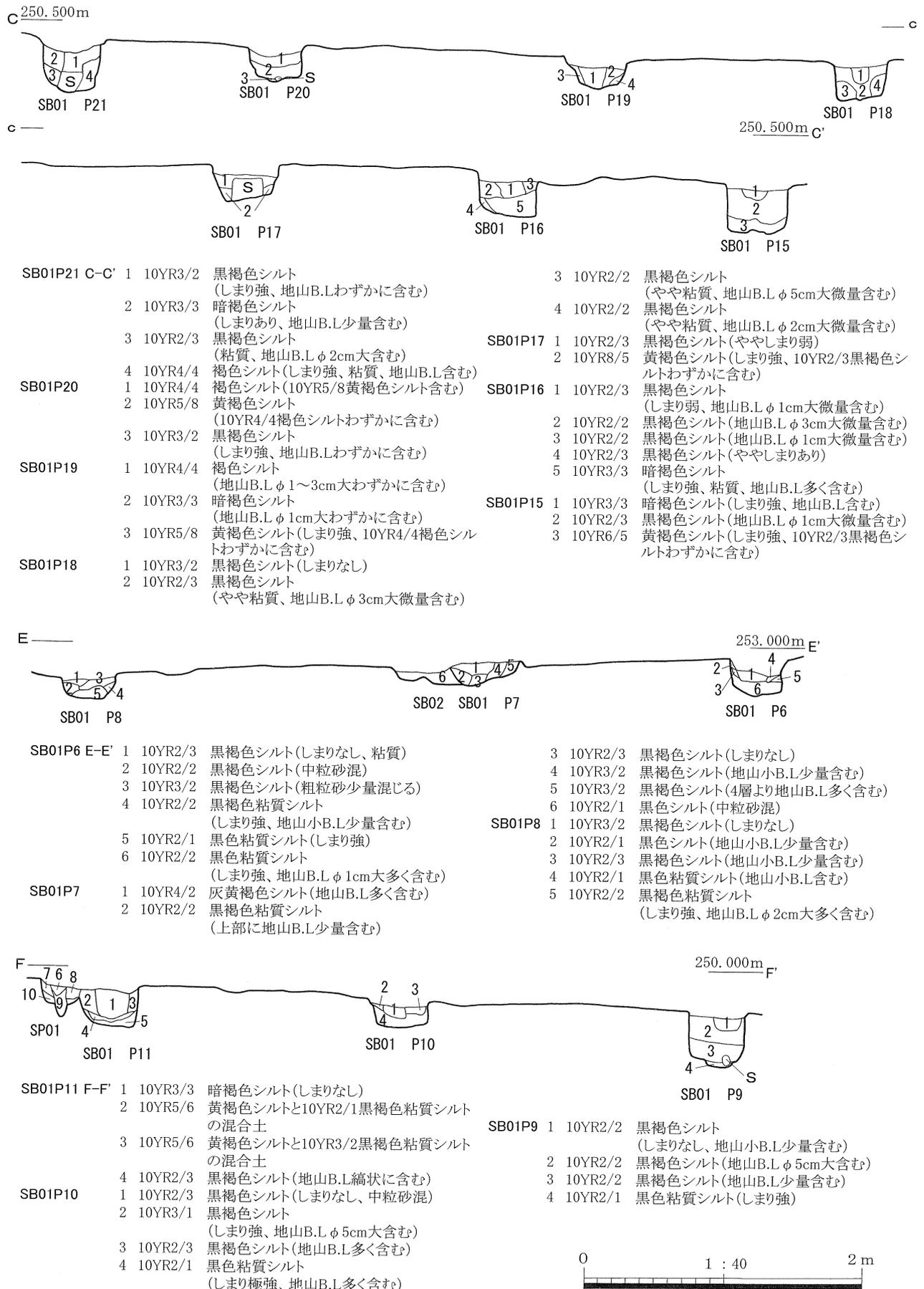
第9図 SB 01掘立柱建物を含む柱穴群



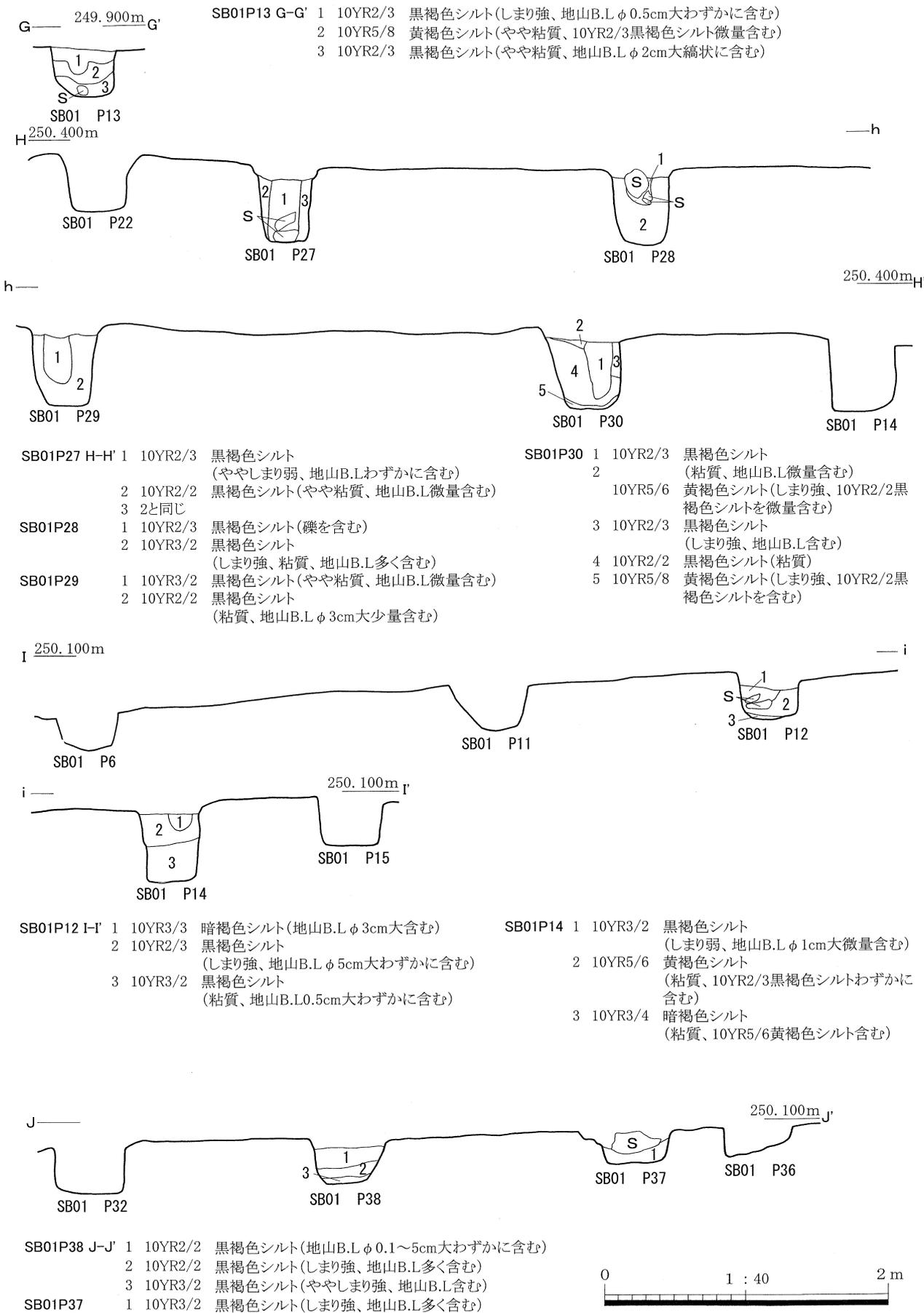
第10図 SB 01掘立柱建物



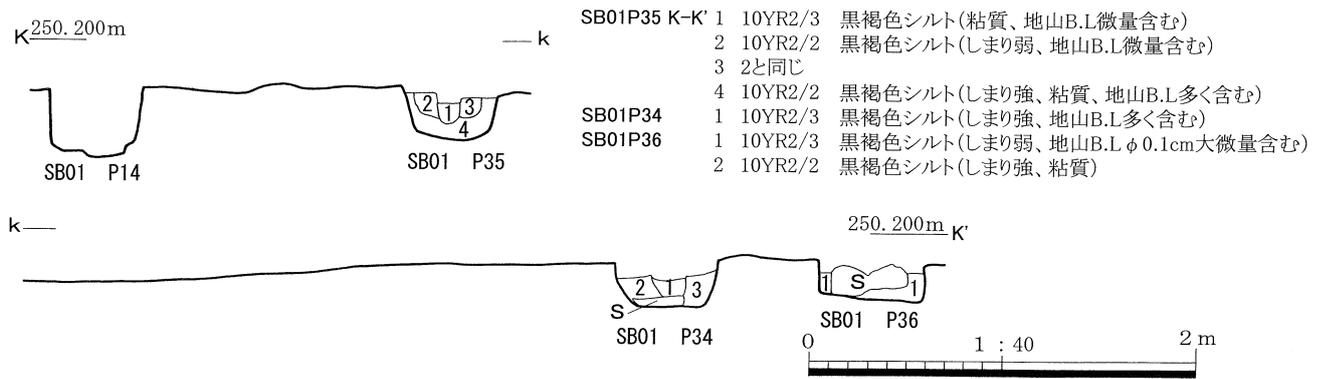
第11図 SB 01掘立柱建物断面(1)



第12図 SB 01掘立柱建物断面(2)



第13図 SB 01掘立柱建物断面(3)



第14図 SB 01掘立柱建物断面(4)

S K03土坑 (第16図、写真図版11)

調査区東側、掘立柱建物の北側に位置する土坑である。S K04土坑と切り合いが認められ、これを切る。また、遺構埋土上部より近現代の耕作による溝に切られている。

最大長0.63mの平面不整な円形で、深さは7.7cmである。

埋土は褐～黒褐色のシルトである。底面には礫が認められるが、この遺構に伴うものかどうかは不明である。時期を特定できる出土遺物が無く性格とともに不明である。

S K04土坑 (第16図、写真図版11)

調査区東側、掘立柱建物の北側に位置する土坑である。S K03土坑と切り合いが認められ、これに切られる。また、遺構埋土上部より近現代の耕作による溝に切られている。

短軸0.67m、残存する長軸0.53mの平面不整な楕円形で、深さは16.5cmである。

埋土は黒褐～黒色のシルトで地山ブロックや炭化物を部分的に含む。時期を特定できる出土遺物が無く性格とともに不明である。

S K05土坑 (写真図版11)

調査区東側、遺物包含層の広がる東斜面の東側に位置する土坑である。長軸2.41m、短軸1.22mの平面楕円形である。底面は平坦でわずかに湧水が認められる。時期を特定できる出土遺物が無く性格とともに不明である。

S K07土坑 (第17図、写真図版12)

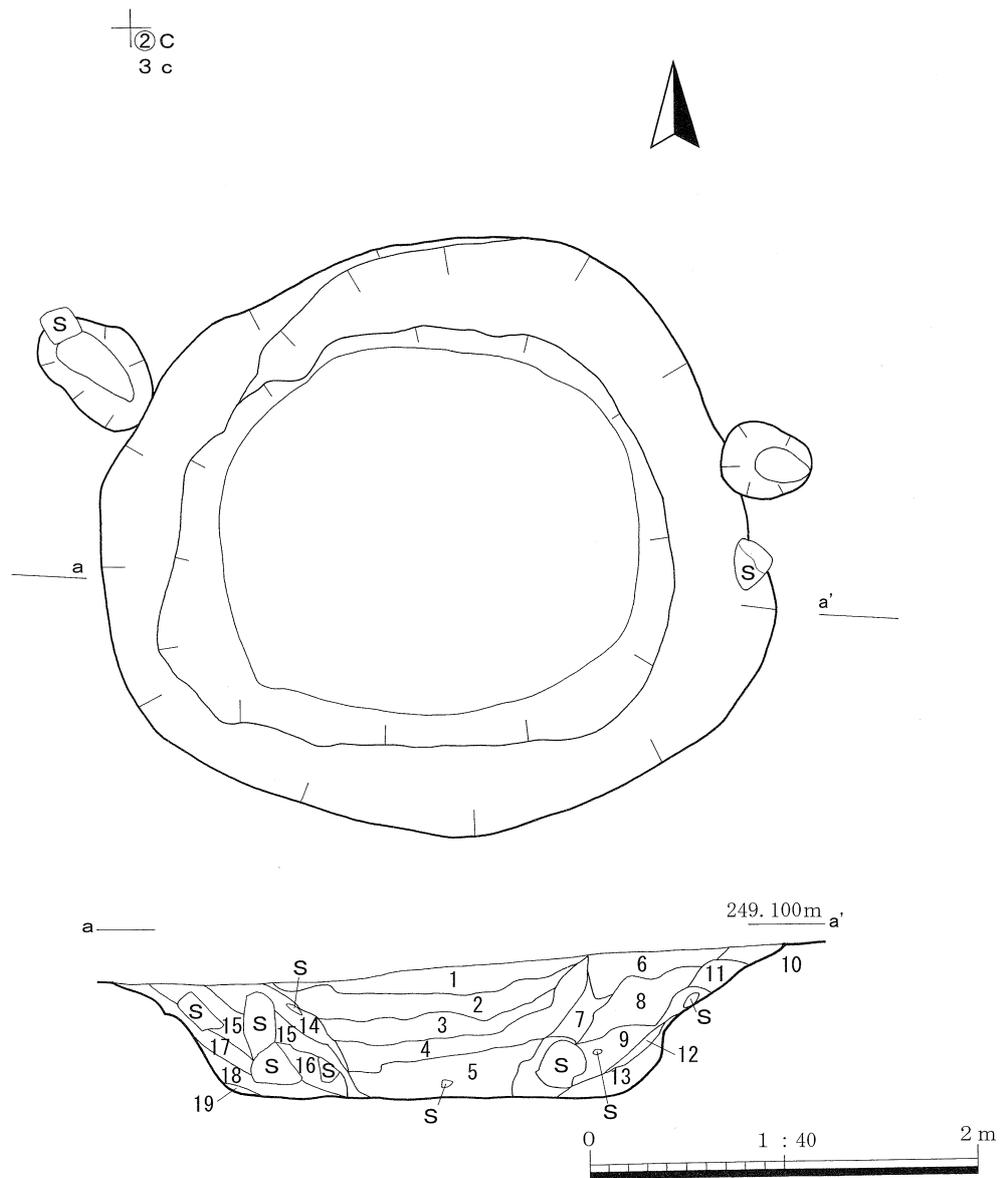
調査区東側、掘立柱建物範囲の内側南端に位置する土坑である。S D07溝に近接するS K08土坑と切り合いが認められ、これを切る。また、遺構埋土上部よりS P14柱穴、遺構埋土との関係不明ながら掘立柱建物柱穴(S B P15)に切られている。

長軸1.02m、短軸0.93mの平面楕円形で、深さは15.2cmである。

埋土は黒褐～暗褐色のシルトで地山ブロックを部分的に含む。また、埋土中には大小の礫が混入している。

遺構西側壁際には拳～人頭大の礫による2～3段の石組みの列がある。その他の壁付近においても礫を据えたと思われる窪みが存在すること、埋土中にも礫が混入していることを考慮すると、石組み列は土坑をほぼ全周していたものとみられる。

埋土中より近世陶器細片が出土しており、少なくとも近世以降の遺構であると考えられる。また、石組み列がみられることから室のような機能が想定される。掘立柱建物との併存関係は不明であるが、



- | | | | | | |
|--------|-----------|-----------------------------------|----|-----------|--------------------------------|
| SE01 1 | 10YR3/1 | 黒褐色シルト(やや粘質、しまり弱) | 11 | 10YR3/2 | 黒褐色シルト(地山B.L少量含む) |
| 2 | 10YR2/1 | 黒色シルト(やや粘質、中粒砂混) | 12 | 10YR1.7/1 | 黒色粘質シルト(しまり弱) |
| 3 | 10YR2/1 | 黒色シルト(やや粘質、しまり弱) | 13 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色シルト
(やや砂質、黒色土B.L多く含む) |
| 4 | 10YR2/1 | 黒色粘質シルト(中粒砂少量混) | 14 | 10YR3/2 | 黒褐色シルト(地山B.L少量含む) |
| 5 | 10YR2/2 | 黒褐色粘質シルト(微粒砂混、しまり弱) | 15 | 10YR3/3 | 暗褐色シルト(中～粗粒砂微量に混じる) |
| 6 | 10YR3/3 | 暗褐色シルト(粗粒砂混) | 16 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト(やや粘質、地山B.L少量含む) |
| 7 | 10YR2/2 | 黒褐色粘質シルト(中粒砂混) | 17 | 10YR2/1 | 黒色シルト(中～粗粒砂混) |
| 8 | 10YR1.7/1 | 黒色シルト
(やや粘質、地山B.L φ 1cm 大少量含む) | 18 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色砂質シルト
(地山B.L少量含む) |
| 9 | 10YR3/2 | 黒褐色粘質シルト
(しまり弱、炭化物微量含む) | 19 | 10YR1.7/1 | 黒色粘質シルト(炭化物少量含む) |
| 10 | 10YR3/3 | 暗褐色シルト(中粒砂混) | | | |

第15図 SE 01井戸跡

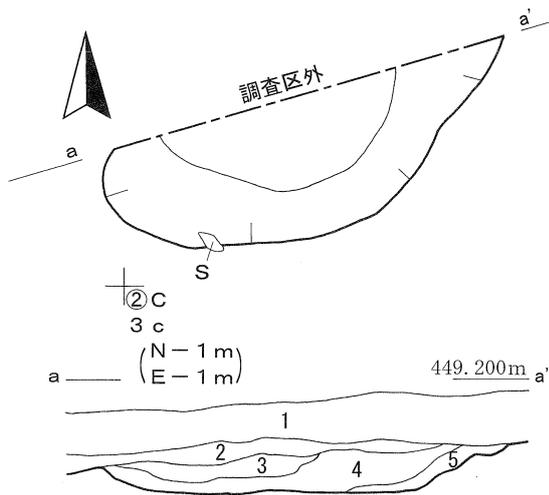
掘立柱建物の地下に設置された室である可能性も考えられる。

SK08土坑 (第17図、写真図版12)

調査区東側、掘立柱建物範囲の内側南端に位置する土坑である。SD07溝に近接し、SK07土坑と切り合いが認められ、これに切られる。時期を特定できる出土遺物が無く性格とともに不明であるが、少なくともSK07土坑よりも古い。

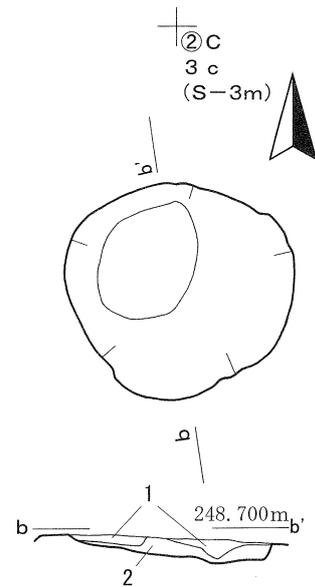
SD01・SD02溝 (第18図、写真図版13)

調査区東側に位置し、ほぼ東西方向に延びる溝である。溝の西端はSE01井戸跡に接続しており、先述した通りこの井戸と関連する溝であると想定される。また、溝北側の一部がSI01竪穴住居と切り合っており、この溝が竪穴住居の南側壁を切っている。平面では明確に確認できなかったが、断面の観察では、2条の溝が同一化していることが判明した。よって、区分可能な箇所ではSD02溝とし

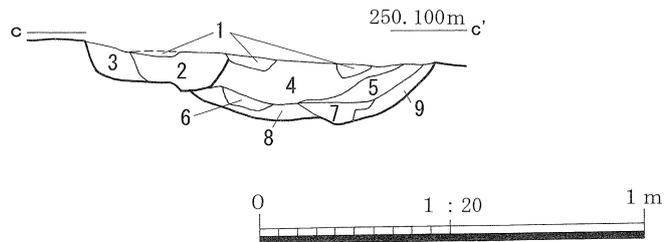
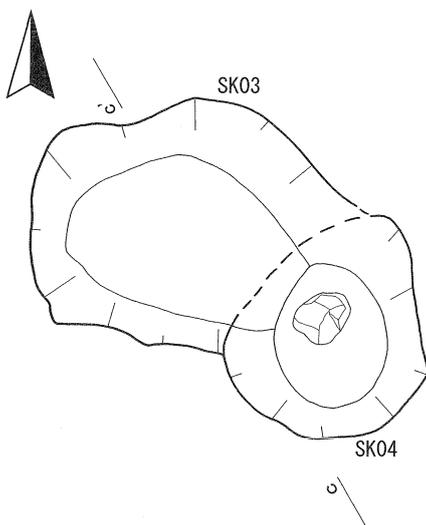


- SK01 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト(植物根多い、下位は地山B.L含む、表土I層)
 2 10YR3/3 暗褐色シルト(中粒砂混、II層?)
 3 10YR3/2 黒褐色シルト(やや粘質、粗粒砂混)
 4 10YR3/2 黒褐色シルト(地山B.L少量含む)
 5 10YR3/4 暗褐色シルト(地山B.L3cm多く含む)

②C
3c
5g



- SK02 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
(地山B.L多く含む、現代の耕作痕)
 2 10YR2/2 黒褐色シルト(やや粘質、中粒砂混)



- SK03-04 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト(現代の耕作痕)
 2 10YR3/2 黒褐色シルト(炭化物、焼土B.L微量含む)
 3 2.5YR4/3 褐色シルト(小礫少量混)
 4 10YR3/3 暗褐色シルト(やや粘質、地山B.L微量含む)
 5 10YR3/1 黒褐色シルト(やや粘質、炭化物を微量含む)
 6 10YR2/3 黒褐色シルト(やや粘質)
 7 10YR2/1 黒色シルト(微粒砂少量混じる)
 8 10YR3/2 黒褐色シルト(地山B.L少量含む)
 9 10YR4/4 褐色シルト(地山B.L微量含む)

第16図 SK 01~04土坑

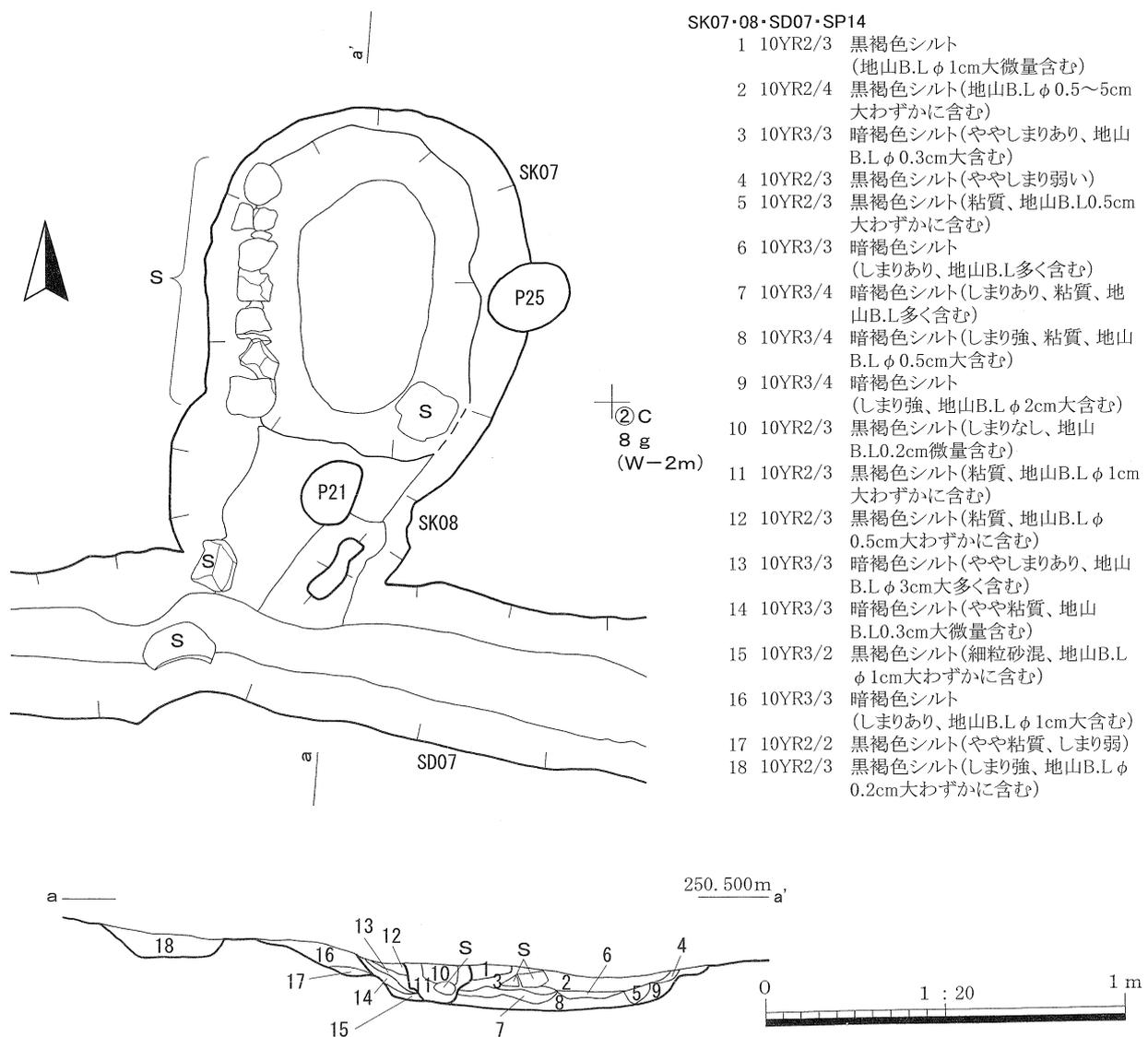
てこの溝とは区分した。新しく堆積している方をSD01溝とし、その下層のものをSD02溝とした。この溝はI層直下で検出され、一部後世の耕作痕によって切られている。

規模は総延長距離29.4m、幅0.30~0.55m、深さ5~20cmである。底面の標高は東へ向け緩やかに下り、東側の崖付近で収束する。

埋土は、自然堆積の黒褐色シルトを主体とする。埋土上位より陶器が1点出土している。この陶器は国産陶器の天目茶碗の破片である。その他出土した遺物は縄文土器片が数点である。出土遺物から中世~近世であると考えられる。

なお、SD02溝はSD01溝と重なっているが、この2条は東側崖付近で二股に分かれ、SD01溝よりやや南側へ延びる。

この溝は南北方向に下る旧地形を考慮すると、等高線に平行する東西方向に延びている。このことから溝は自然流路ではなく、人為的に掘削され機能していたものとみられる。また、先述した通り井戸との関わりが考えられるため排水の機能を有していたと考えられる。さらに、この溝が中世~近世である可能性が考えられるため、掘立柱建物と併存する時期ならば掘立柱建物の南に位置するSD07



第17図 SK07・08土坑、SD07溝

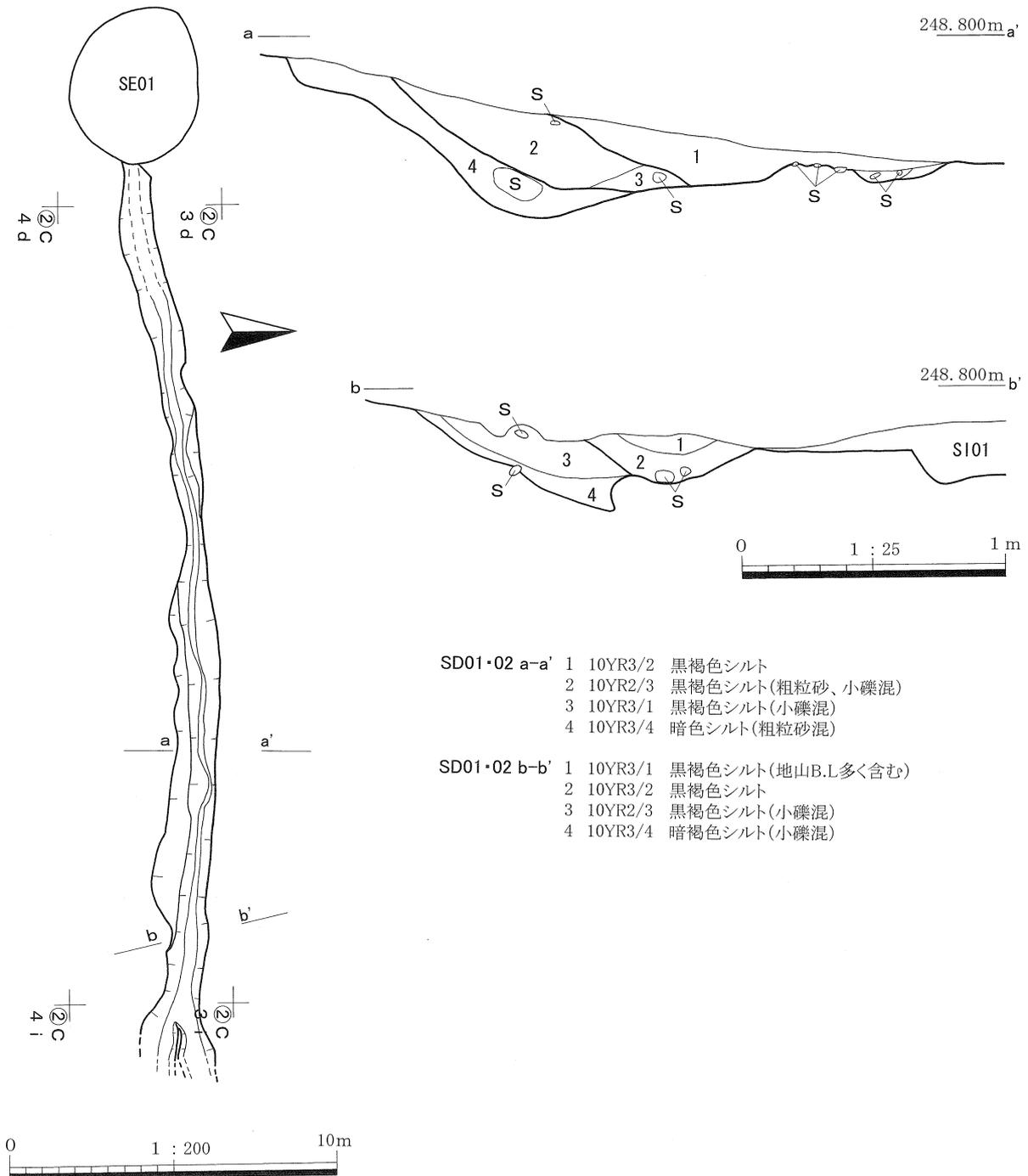
とともに屋敷や建物の北側を区画する機能も具備していた可能性もある。

SD03・04溝 (写真図版13)

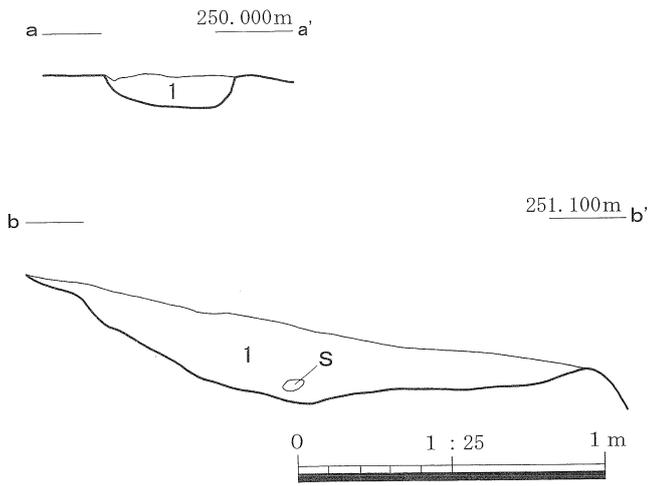
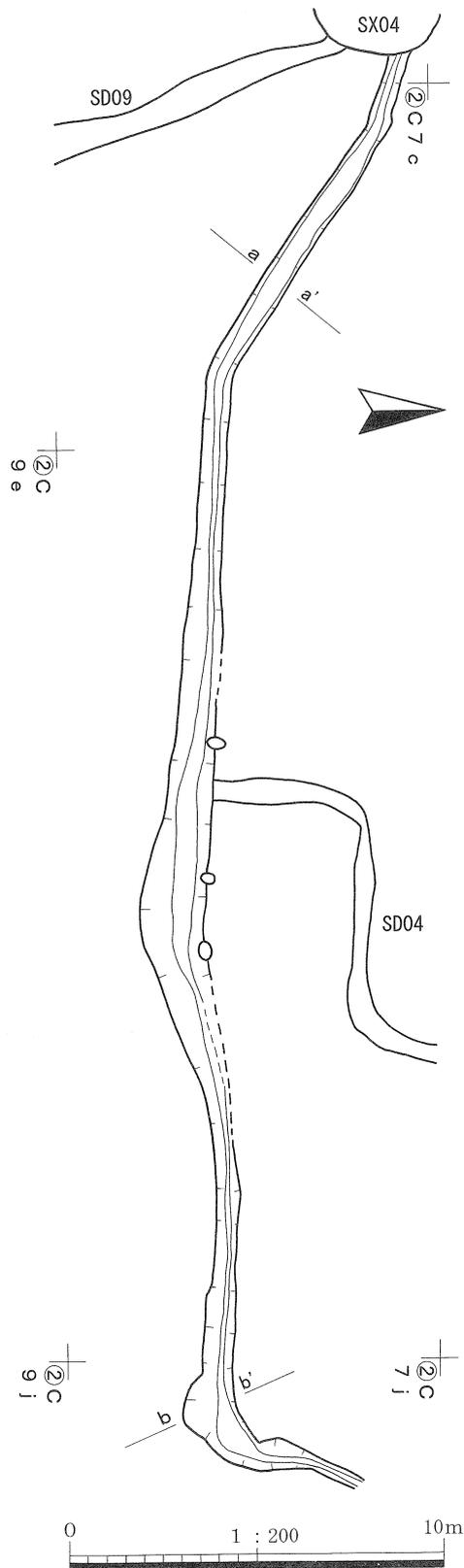
調査区東側、北端に位置する北側調査区外から延び、カーブしながら東西方向を指向する小規模な溝である。埋土は暗褐色シルトの単層で、深さ5cmほどである。出土遺物が無く、時期は不明である。

SD07溝 (第19図、写真図版14)

調査区東側、SB01掘立柱建物の南に位置する東西方向を指向する溝である。SB01掘立柱建物とは近接するが、切り合い関係は認められない。溝の西端はSX04落ち込み状遺構に接続しており、この遺構と何らかの関係があるものと考えられる。また、東端は東側崖に向かって延びているが、崖の

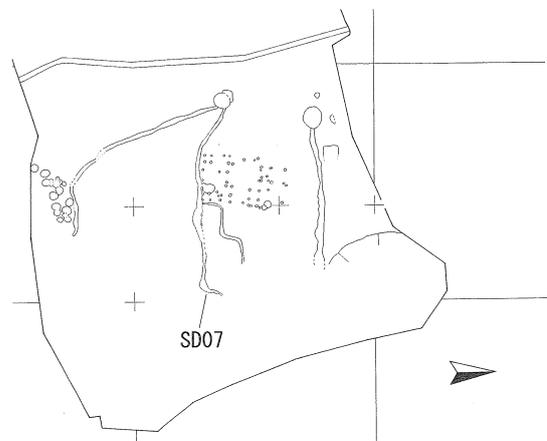


第18図 SD 01・02溝

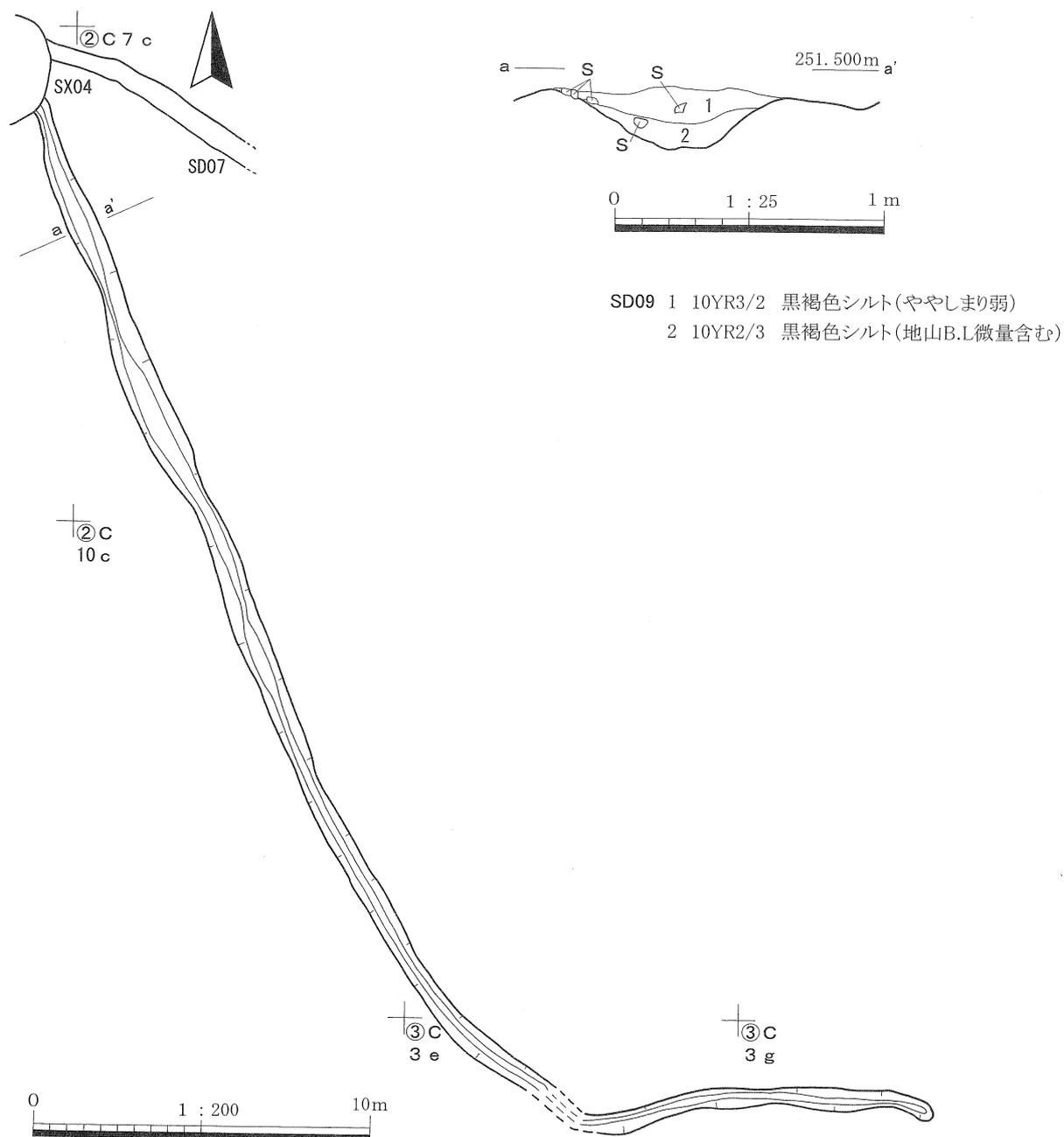


SD07 a-a' 1 10YR3/2 黒褐色シルト(やや粘質、しまり弱)

SD07 b-b' 1 10YR3/3 暗褐色シルト(中粒砂混、やや粘質)



第19図 SD 07溝



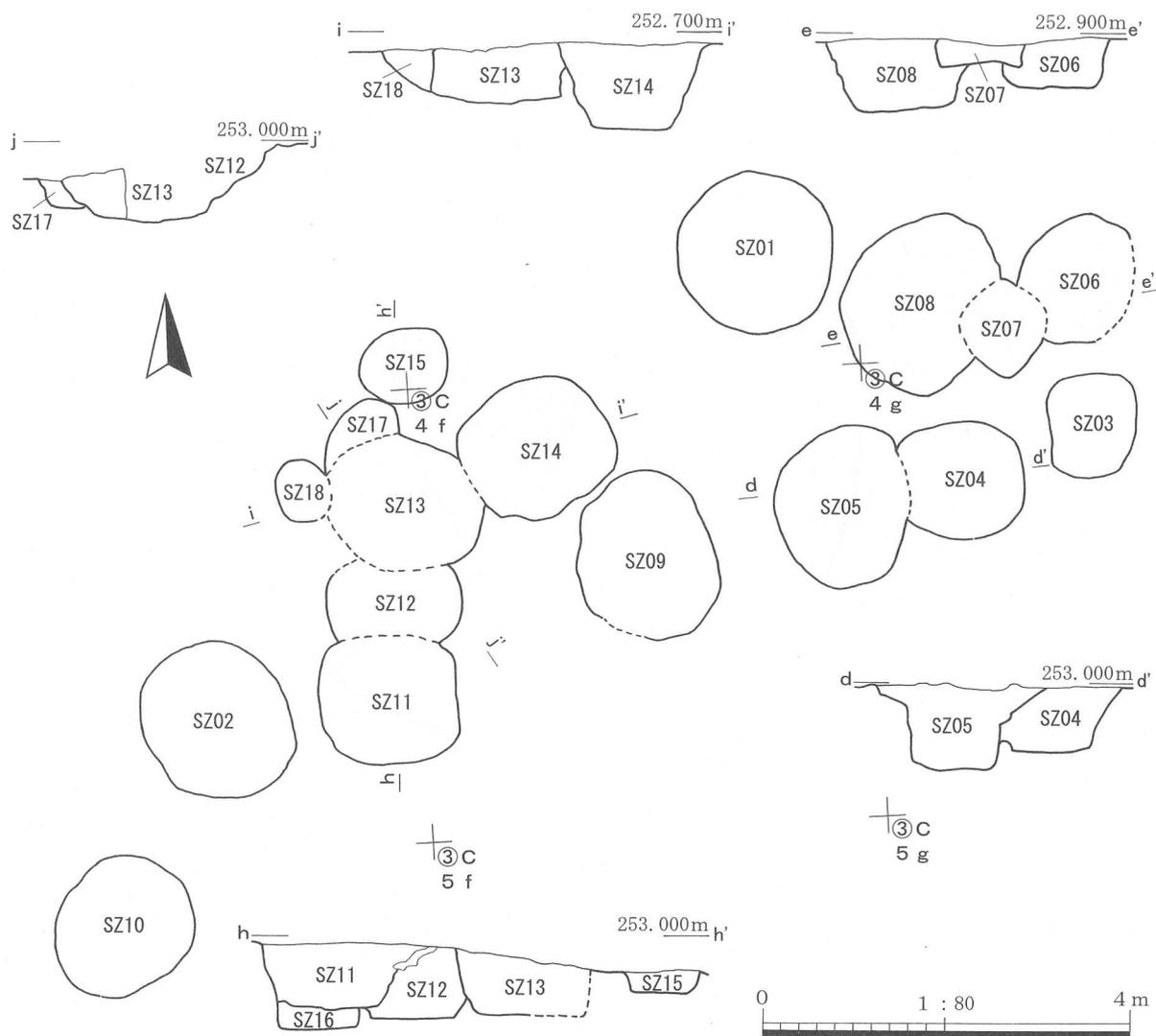
第20図 SD 09溝

手前でクランクし、斜面になると不明瞭になる。溝は南から北へ緩やかに下る斜面に位置しており、溝の方向は斜面等高線とほぼ平行する。

規模は総延長距離22m、幅6.71m、深さ45cmで、斜面上方に当たる南側では、北側より深い傾向にある。

埋土は暗褐～黒褐色シルトを主体とし、機能停止後斜面上方である南側から自然に埋没したものとみられる。

溝東側の埋土中より近世磁器染付碗(56)が出土した。また、わずかながらほかにも陶磁器微細片



第21図 検出墓墳群

が出土している。

出土遺物からみて遺構の時期は近世であると考えられる。

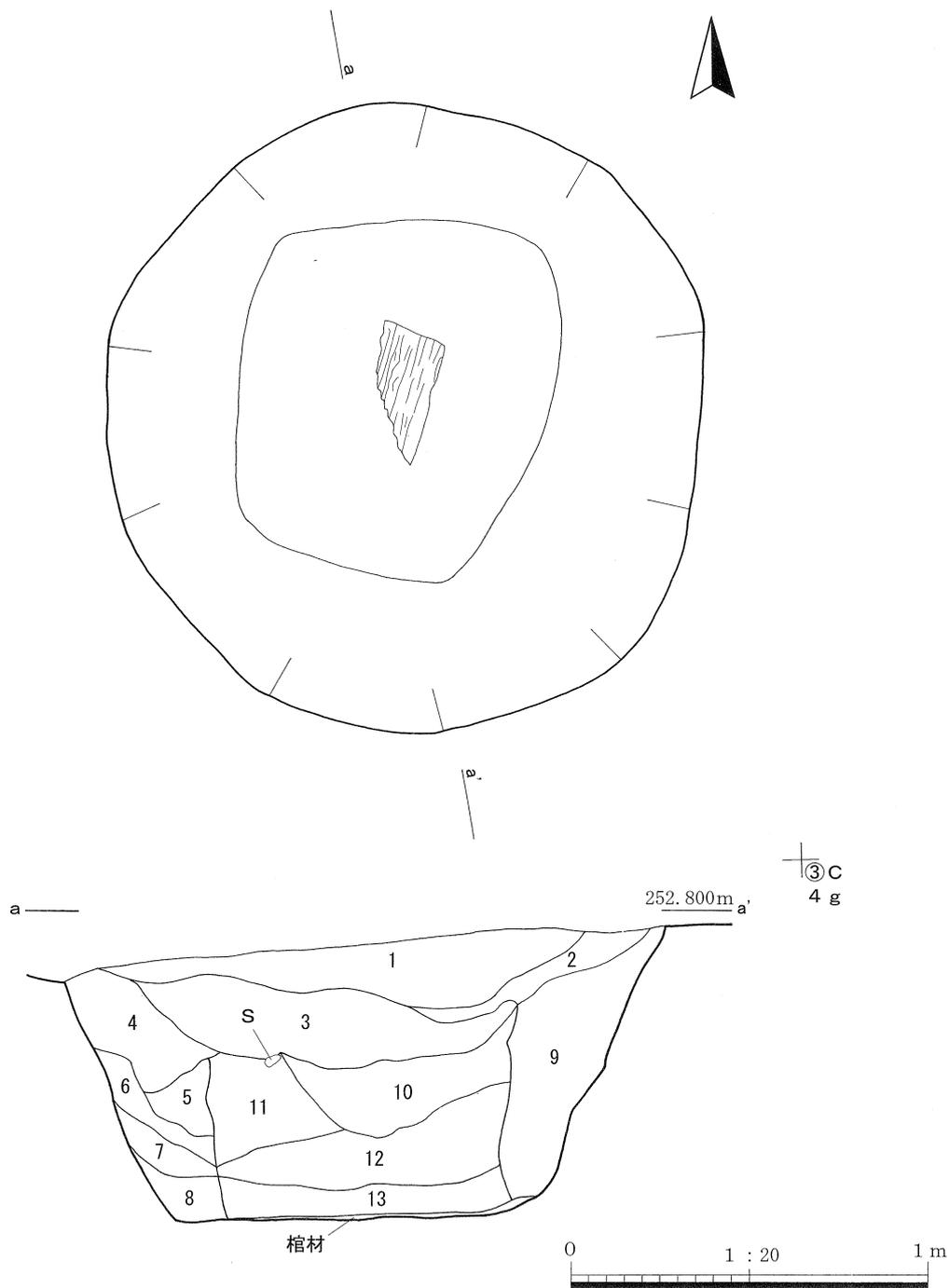
溝の機能については位置や配置から考え、人為的に掘削され機能していたものとみられる。また、S B01掘立柱建物の南、旧地形の斜面上方に位置していることから、建物への雨水流入を排水する機能を考慮している可能性が高い。また、屋敷地の中で建物の南を区画する意図や屋敷地の平坦面を確保するための建物背面をカットする意図も考えられ、S B01掘立柱建物を内包する屋敷地と密接に関わる溝である可能性が高い。

SD09溝 (第20図、写真図版14)

調査区東側の南側、近世墓群の北から北西方向へ延びる溝である。北端はS X04落ち込み状遺構に接続しているとみられる。

規模は総延長距離45m、幅0.2~0.7m、深さ5~20cmである。溝幅は両先端部分で細くなるが、ほかの部分についてはほぼ一定している。

埋土は地点によって若干異なるが、おおむね黒褐色シルトを主体とする。斜面下方に当たる溝北半



- SZ01
- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト(地山B.L5cm大含む)
 - 2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト(地山B.L2cm大多く含む)
 - 3 10YR3/2 黒褐色シルト(地山B.L φ 2cm大多量に含む)
 - 4 10YR3/1 黒褐色シルト(地山B.L φ 1cm大多く含む)
 - 5 10YR6/6 明黄褐色シルト(黒色地山B.L多く含む)
 - 6 10YR6/6 明黄褐色シルトと10YR3/2黒褐色シルトの混合土
 - 7 10YR3/2 黒褐色シルト(地山B.L φ 2cm大多量含む)
 - 8 10YR6/6 明黄褐色シルト(地山B.L φ 2cm大多く含む)
 - 9 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト(地山B.L φ 1cm大多く含む)
 - 10 10YR3/1 黒褐色シルト(地山B.L φ 1cm大含む)
 - 11 10YR2/1 黒色シルト(地山B.L φ 1cm大少量含む)
 - 12 10YR4/2 灰黄褐色シルト(地山B.L φ 2cm大多く含む)
 - 13 10YR6/1 褐灰色粘質シルト(地山B.L φ 1cm大少量含む)

第22図 SZ 01墓墳

は2層の堆積であるが、斜面上方に当たる溝南半についてはほぼ単層である。

埋土より遺物が出土しなかったため帰属時期を特定することは困難であるが、近世墓域を意識して配されていることを考慮すると近世の溝であるという推測もできる。

墓城北端を区画するように存在するため、墓域を意識して掘られた溝である可能性が高い。

S Z01墓壙（第21・22図、写真図版16）

調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓壙である。検出した墓域の中ではもっとも北端にあり、S Z08墓壙に近接する。

規模・形態は直径1.7mの平面円形であるが底面はやや平面方形である。深さは77cmで、底面は平坦である。

埋土には棺箱の痕跡が認められ、棺内埋土とその両側にみられる掘方埋土とに分けられる。掘方埋土は多くのブロック土の混入がみられ、人為的に埋め戻された様相である。一方、棺内埋土にも地山ブロックが認められるものの掘方埋土に比して締まりが無く、棺箱を覆うように埋め戻された埋土が遺骸の骨化に伴って沈み込んだものとみられる。

底面には棺底板の一部が残存しており、その残存する形状より長方形を基調とする木製の棺箱であったと推測される。また、底面では副葬品と考えられる銭貨（86・87）が5枚出土しており、その中に寛永通寶の文銭と新寛永が認められる。底面付近で人骨は認められず、正確な埋葬体位や被葬者の年齢および性別などは不明である。

墓壙底面より出土した銭貨より17世紀後半以降の墓壙であると考えられ、墓壙規模や墓壙内の様子、棺箱の存在などより土葬墓であると判断される。

S Z02墓壙（第21・23図、写真図版17）

調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓壙である。検出した墓域の中では東側にあり、南にはS Z10墓壙、東側にはS Z11墓壙が近接する。

規模・形態は短軸1.53m、長軸18.1mの平面楕円形である。深さは83cmで、底面はほぼ平坦である。

埋土には棺箱の痕跡が認められ、棺内埋土とその両側にみられる掘方埋土とに分けられる。掘方埋土は多くのブロック土の混入がみられ、水平に堆積しており人為的に埋め戻された様相である。一方、棺内埋土にも地山ブロックが認められるものの掘方埋土に比して締まりが無く、棺箱を覆うように埋め戻された埋土が遺骸の骨化に伴って沈み込んだものとみられる。

底面には棺底板の一部および土壌化したその痕跡が残存しており、その残存する形状より長方形を基調とする箱棺であったと推測される。また、底面では副葬品と考えられる銭貨（88～91）が4枚出土しており、いずれも寛永通寶である。出土した寛永通寶はすべて古寛永で構成されている。また、底面では銭貨以外にも布片（132）、供物と考えられる堅果類（134）、被葬者が身につけていたと考えられる木製の数珠（133）が出土した。底面付近で人骨は認められず、正確な埋葬体位や被葬者の年齢および性別などは不明であるが、墓壙掘方の長軸方向と棺箱の長軸方向が沿うように据えられている。

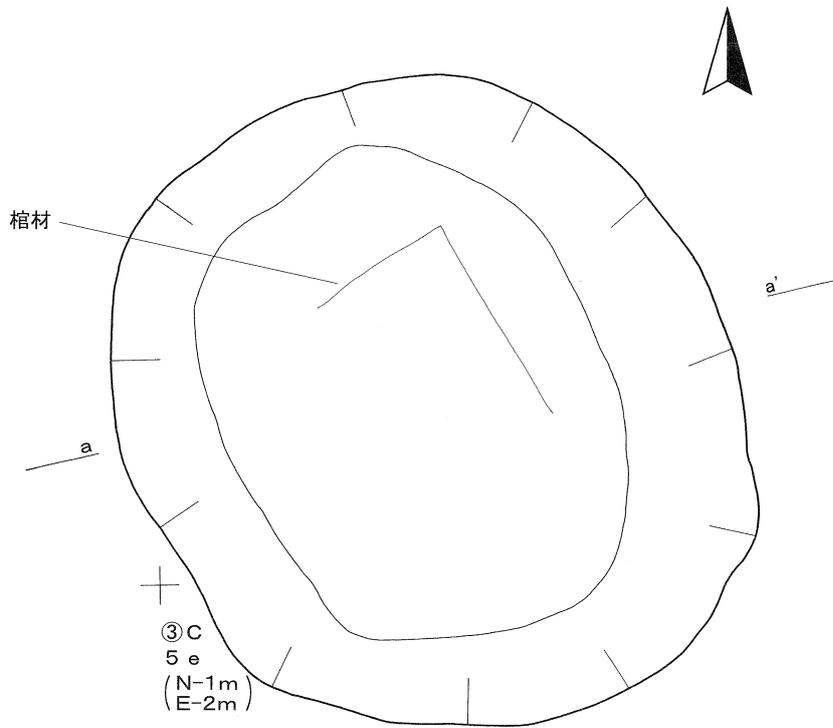
墓壙底面より出土した銭貨より17世紀前半以降の墓壙であると考えられ、墓壙規模や墓壙内の様子、棺箱の存在などより土葬墓であると判断される。

S Z03墓壙（第21・24図、写真図版18）

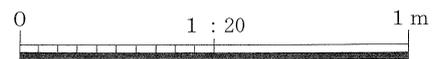
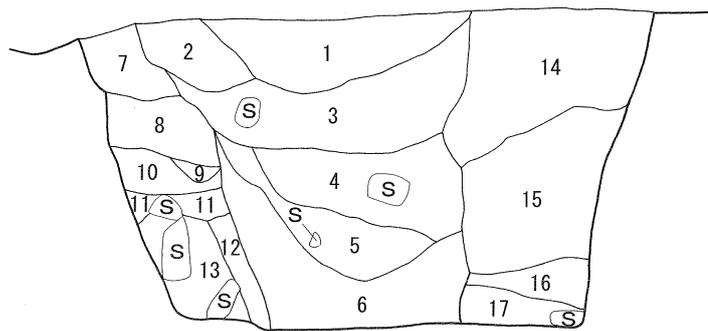
調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓壙である。検出した墓域の中では東端にあり、北にはS Z06墓壙、西にはS Z04墓壙が近接する。

規模・形態は短軸0.95m、長軸1.12mの平面長方形である。深さは38cmで、底面はほぼ平坦である。

埋土には棺箱の痕跡が認められ、棺内埋土とその両側にみられる掘方埋土とに分けられる。掘方埋

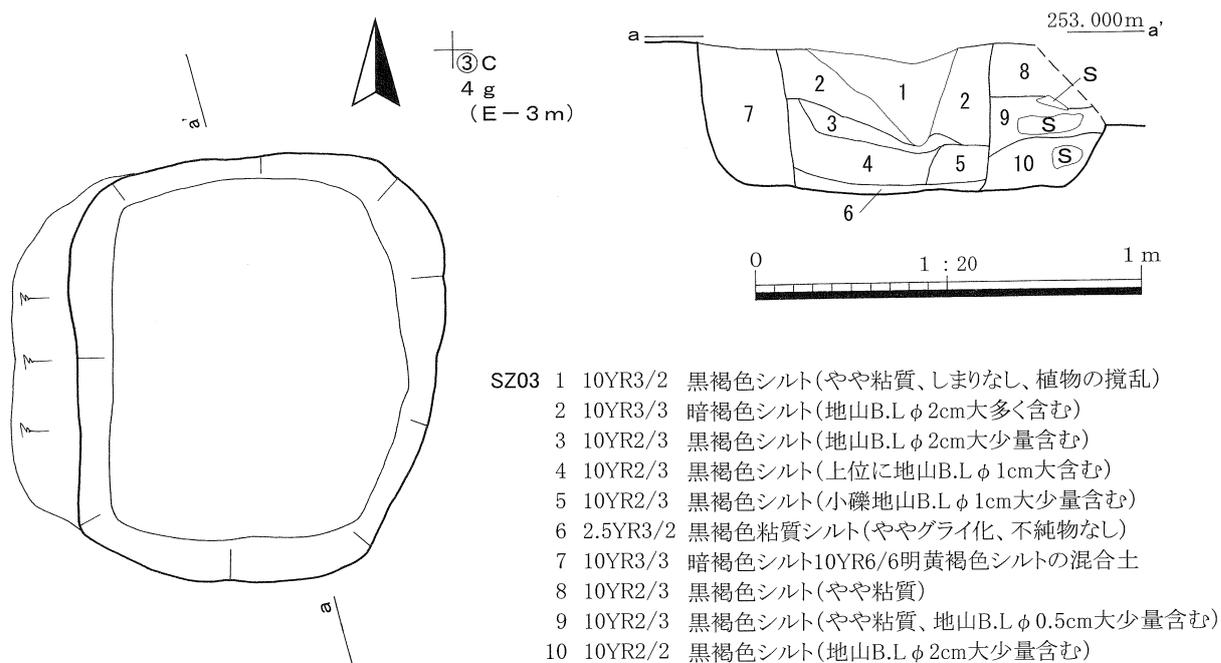


a ————— 253.000m a'



- SZ02
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト(しまりなし、やや粘質)
 - 2 10YR3/2 黒褐色シルト(地山B.L φ 5cm大含む)
 - 3 10YR3/2 黒褐色シルト(地山B.L φ 3cm大少量含む)
 - 4 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト(地山B.L φ 2cm大、黒色土B.L φ 2cm大含む)
 - 5 10YR3/1 黒褐色シルト(様々なB.L土少量含む)
 - 6 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト(様々なB.L土多く含む)
 - 7 10YR4/1 褐灰色シルト(地山B.L少量に含む)
 - 8 10YR6/6 明黄褐色シルト(地山B.L φ 3cm大少量含む)
 - 9 10YR6/6 明黄褐色シルト(地山B.L)
 - 10 10YR2/1 黒色シルト(地山B.L φ 1cm大少量に含む)
 - 11 10YR4/1 褐灰色シルト(やや粘質)
 - 12 10YR4/1 褐灰色シルト(やや粘質、地山B.L φ 1cm大含む)
 - 13 10YR5/6 黄褐色シルト(小礫混、地山B.L φ 3cm大含む)
 - 14 10YR5/6 黄褐色シルト(地山B.L・小礫・黒色B.L少量に含む)
 - 15 10YR6/6 明黄褐色シルト(小礫混、地山B.L少量に含む)
 - 16 10YR6/6 明黄褐色シルト(地山B.L φ 2cm大少量に含む)
 - 17 15と同じ

第23図 SZ 02墓壇



第24図 SZ 03墓墳

土は多くのブロック土の混入がみられ、水平に堆積しており人為的に埋め戻された様相である。一方、棺内埋土にも地山ブロックが認められるものの掘方埋土に比して締まりが無く、棺箱を覆うように埋め戻された埋土が棺箱蓋の腐朽に伴って流れ込んだものとみられる。

底面には土壌化した棺箱の痕跡および鉄製の棺釘が残存しており、その形状より長方形を基調とする鉄釘を用いた木製の箱棺であったと推測される。また、底面では副葬品と考えられる鉄製の刃物(64)が1点出土しており、形状より短刀のような刃物が想定される。底面付近で人骨は認められず、正確な埋葬体位や被葬者の年齢および性別などは不明であるが、墓墳掘方の長軸方向と棺箱の長軸方向が沿うように据えられている。

墓墳は近世墓であると推定されるが、墓墳から時期を特定できる遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明である。墓墳規模や墓墳内の様子、棺の規模などより被葬者が子供ならば土葬墓の可能性もあるが、成人ならば火葬骨が納められた墓墳であると判断される。

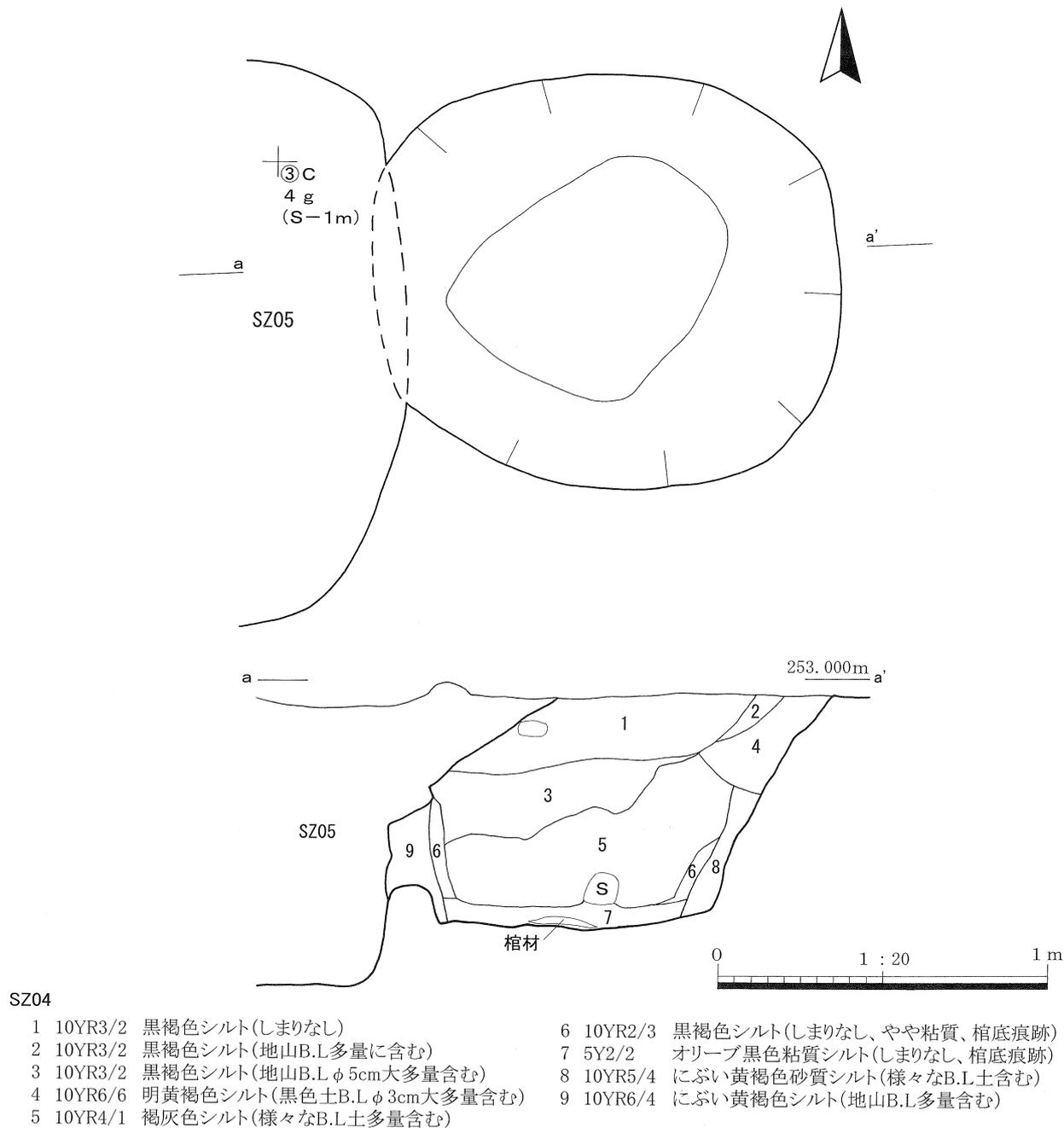
S Z04墓墳 (第21・25図、写真図版19)

調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓墳である。検出した墓域の中では東側にあり、東側に位置する(S Z03)墓墳と近接する。また、S Z05墓墳と切り合いが認められ、このS Z05墓墳に切られている。

規模・形態は直径1.29mの平面円形である。深さは63cmで、底面はほぼ平坦である。

埋土には棺箱の痕跡が認められ、棺内埋土とその両側にみられる掘方埋土とに分けられる。掘方埋土は多くのブロック土の混入がみられ人為的に埋め戻された様相である。一方、棺内埋土にも地山ブロックが認められるものの掘方埋土に比して締まりが無く、棺箱を覆うように埋め戻された埋土が遺骸の骨化に伴って沈み込んだものとみられる。

底面には棺底板の一部および土壌化したその痕跡が残存しており、その残存する形状より長方形を基調とする箱棺であったと推測される。また、底面では副葬品と考えられる銭貨(92~95)が4枚出



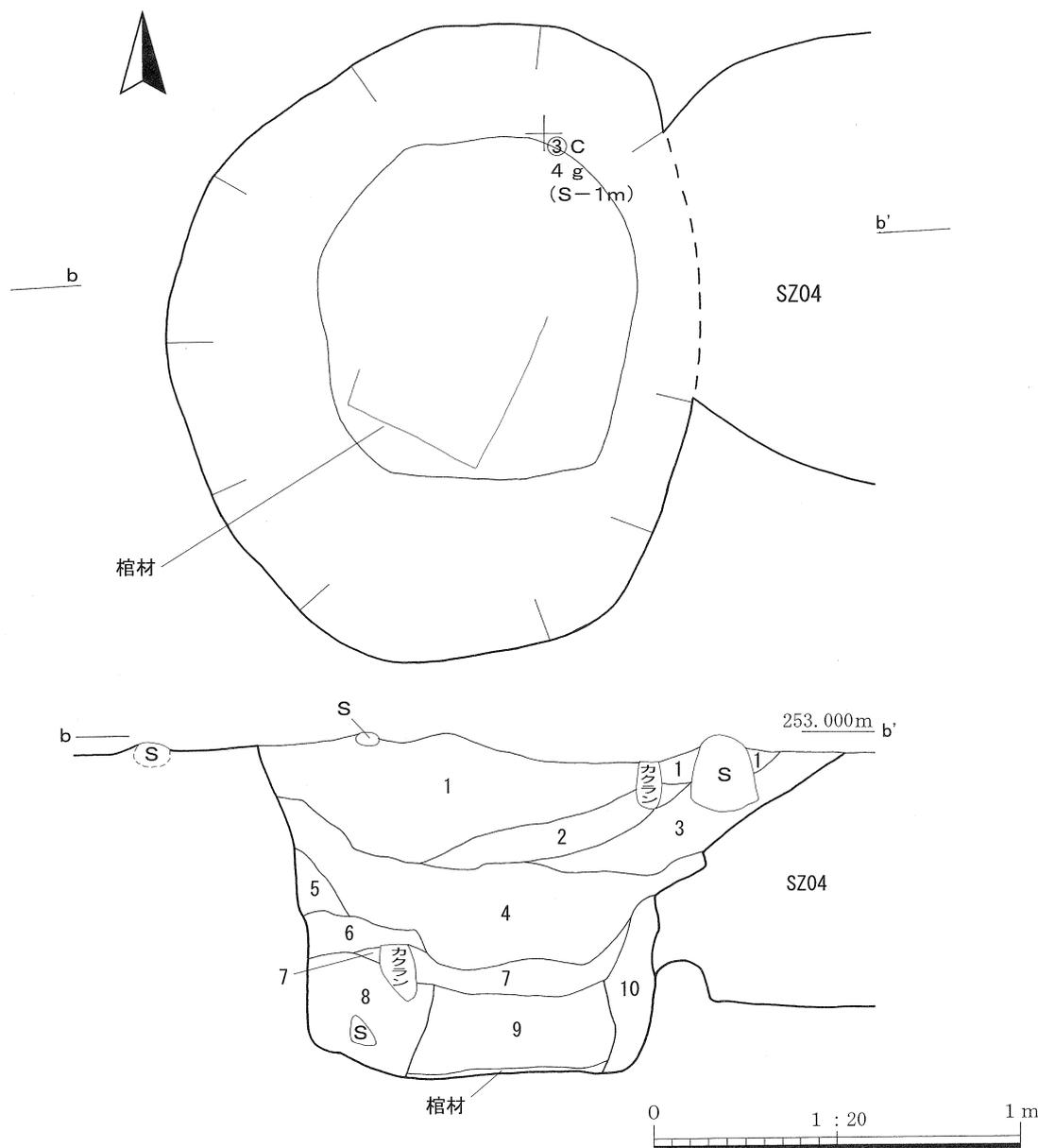
第25図 SZ 04墓壇

土しており、いずれも寛永通寶である。これらの中で2枚は古寛永であると判読できたが、その他2枚は新古の判読が不可能である。

墓壇底面より出土した銭貨より17世紀前半以降の墓壇であると考えられ、墓壇規模や墓壇内の様子、棺箱の存在などより土葬墓であると判断される。

S Z 05墓壇 (第21・26図、写真図版20)

調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓壇である。検出した墓域の中では東側にあり、北側に位置するS Z 08墓壇と近接する。また、S Z 04墓壇と切り合いが認められ、このS Z 04墓



SZ05

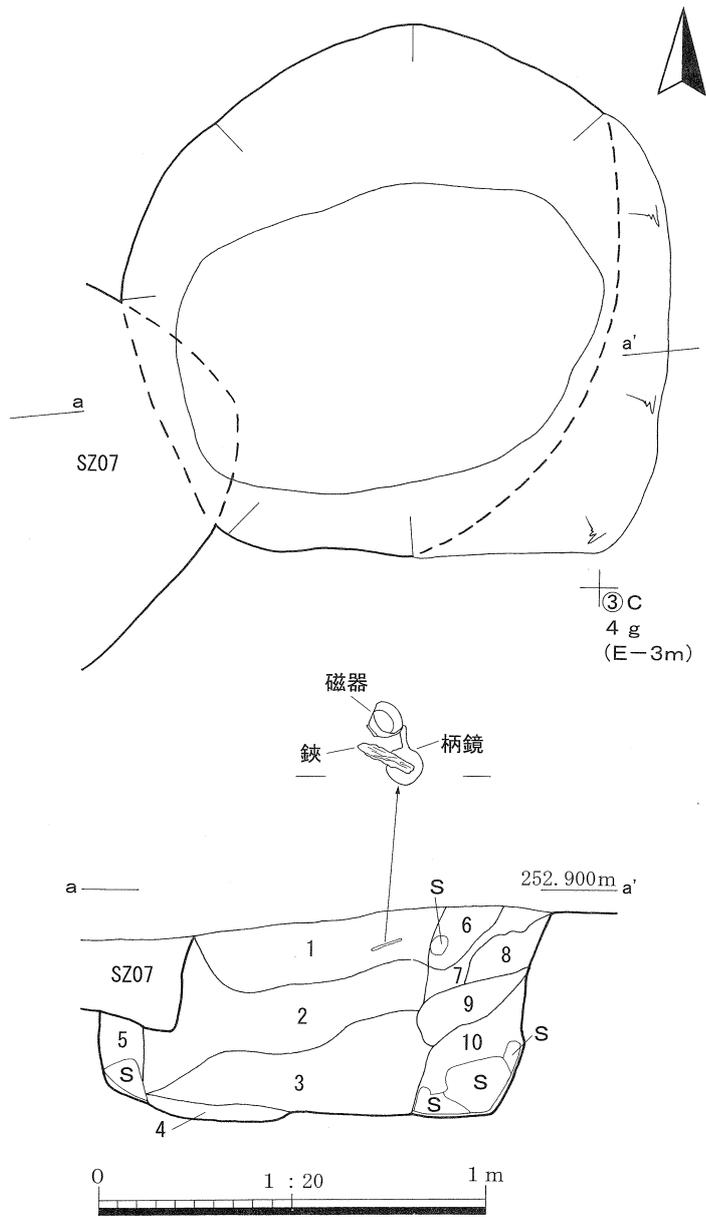
- | | |
|-------------------------------------|---|
| 1 10YR3/1 黒褐色シルト(地山B.L φ 2cm大少量含む) | 6 10YR2/4 灰黄褐色砂質シルト(地山B.L φ 1~3cm大多く含む) |
| 2 10YR6/6 明黄褐色シルト(粗粒砂・黒色土B.L少量含む) | 7 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト(地山B.L φ 1cm大少量含む) |
| 3 10YR2/3 黒褐色シルト(地山B.L φ 5cm大多く含む) | 8 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト(地山B.L φ 2cm大多く含む) |
| 4 10YR3/3 暗褐色シルト(地山B.L φ 5cm大多く含む) | 9 10YR4/1 褐灰色シルト(様々なB.L土多く含む) |
| 5 10YR2/4 灰黄褐色シルト(地山B.L φ 2cm大多く含む) | 10 10YR4/2 灰黄褐色シルト(地山B.L φ 2cm大多量含む) |

第26図 SZ 05墓墳

墳埋土上部を切っている。

規模・形態は長軸1.76m、短軸1.55mの平面楕円形である。深さは96cmで、底面はほぼ平坦である。

埋土には棺箱の痕跡が認められ、棺内埋土とその両側にみられる掘方埋土とに分けられる。掘方埋土は多くのブロック土の混入がみられ人為的に埋め戻された様相である。一方、棺内埋土にも地山ブロックが認められるものの掘方埋土に比して締まりが無く、棺箱を覆うように埋め戻された埋土が遺骸の骨化に伴って沈み込んだものとみられる。しかし、埋土上位は掘方を考えると堆積に不自然さが



- SZ06
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト(地山B.L φ 3cm大微量含む)
 - 2 10YR2/2 黒褐色シルト(地山B.L φ 3cm大少量含む)
 - 3 10YR3/2 黒褐色シルト(地山B.L φ 5cm大少量含む)
 - 4 5Y5/1 灰色粘質シルト(グライ化、棺材痕跡)
 - 5 10YR5/6 黄褐色シルト(小礫混、地山B.L多量含む)
 - 6 10YR3/4 暗褐色シルト(小礫混、地山B.L多量含む)
 - 7 10YR6/6 明黄褐色シルト(黒色土B.L少量含む)
 - 8 10YR2/2 黒褐色シルト(地山B.L少量含む)
 - 9 10YR6/6 明黄褐色シルト(黒色土B.L少量含む)
 - 10 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト(様々なB.L土含む)

第27図 SZ 06墓壙

が遺骸の骨化に伴って沈み込んだものとみられる。しかし、埋土最上層で柄鏡 (80)、鉄製鉄 (70)、磁器 (79) がまとまって出土しており、埋土最上層がこの墓壙に帰属するものかどうか判断できない。

あり、この墓壙とは別に後世に掘り込みがなされたのかもしれない。

底面には棺底板の一部および土壌化したその痕跡が残存しており、その残存する形状より長方形を基調とする箱棺であったと推測される。底板には木製の釘が残っており、棺材を繋ぐために用いられていたようである。また、底面では副葬品と考えられる銭貨 (96~99) が9枚出土しており、北宋銭である聖宗元寶1枚、銭文の判読が不可能な2枚を除けば、その他はいずれも寛永通寶である。これら寛永通寶の中で1枚は古寛永、2枚は新寛永、1枚は文銭である。銭貨以外では小柄 (68) が出土した。底面付近で人骨は認められず、正確な埋葬体位や被葬者の年齢および性別などは不明である。

墓壙底面より出土した銭貨より17世紀後半以降の墓壙であると考えられ、墓壙規模や墓壙内の様子、棺箱の存在などより土葬墓であると判断される。

S Z 06墓壙 (第21・27図、写真図版20)

調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓壙である。検出した墓域の中では東端にあり、西側に位置するS Z 08墓壙と近接する。また、S Z 07墓壙と切り合いが認められ、このS Z 07墓壙によって埋土上部が切られている。

規模・形態は直径1.46mの平面不整な円形である。深さは63cmで、底面は平面楕円形でほぼ平坦である。

埋土には棺箱の痕跡が認められ、棺内埋土とその両側にみられる掘方埋土とに分けられる。掘方埋土は多くのブロック土の混入がみられ人為的に埋め戻された様相である。一方、棺内埋土にも地山ブロックが認められるものの掘方埋土に比して締まりが無く、棺箱を覆うように埋め戻された埋土

柄鏡は鏡面を下にした状態で出土し、鏡面は和紙と思われる繊維質の白い物質が付着していた。また、和紙を挟んで下には板の破片があり、この状況から和紙で保護された鏡が小さな木箱のようなものに入っていたものと考えられる。

底面には棺底板の一部および土壌化したその痕跡が残存しており、その残存する形状より長方形を基調とする箱棺であったと推測される。底板（138・139）には釘孔あるいは木製の釘が残っており、棺材を繋ぐために用いられていたようである。また、底面では副葬品と考えられる銭貨（103）が6枚まとまって出土しており、判読不可能な2枚を除けば、その他すべて寛永通寶である。寛永通寶はすべて新寛永であり、そのうち1枚は背文に「元」とある。銭貨以外では木質の残存する不明鉄製品（71）が1点出土した。

埋土最上層での副葬品出土状況を考えると、もう1基別の墓壙が埋土上部から切り込んでいる可能性、墓壙が完全に埋め戻された後に再度上部のみ掘り返されて副葬品が納められた可能性、墓壙を埋め戻す最終過程で置かれた後自然に沈下した可能性などが考えられるが、これを決めることはできなかった。

墓壙底面より出土した銭貨より17世紀後半以降の墓壙であると考えられ、墓壙規模や墓壙内の様子、棺箱の存在などより土葬墓であると判断される。

S Z 07墓壙（第21・28図、写真図版20）

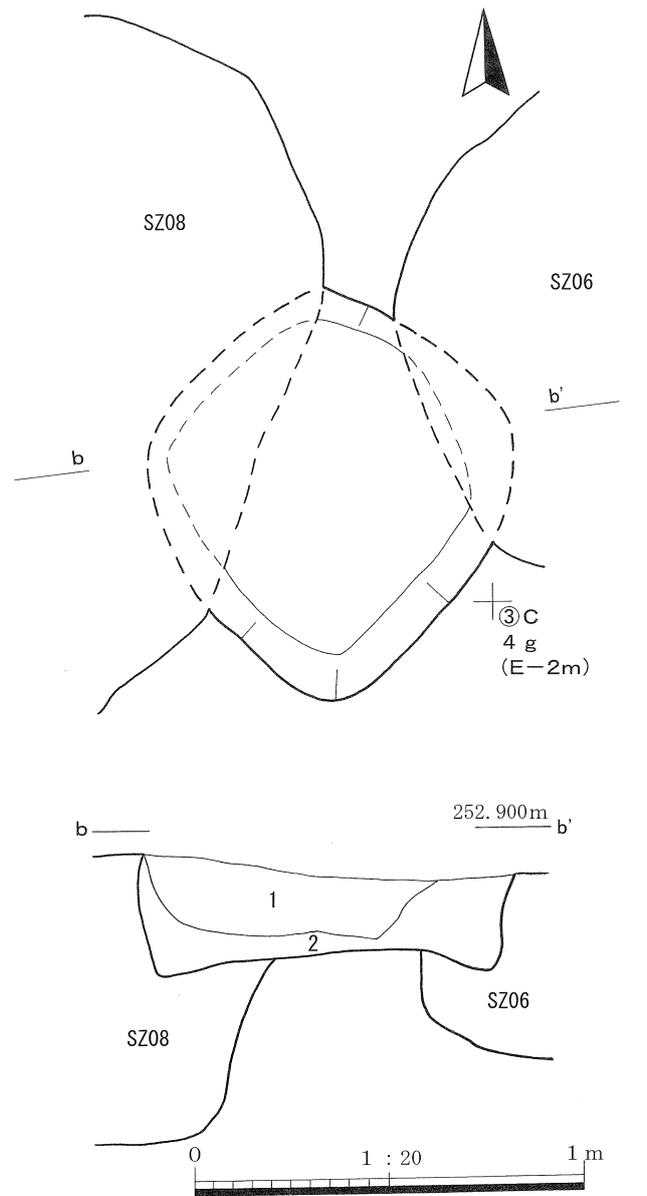
調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓壙である。検出した墓域の中では東側にあり、南側に位置するS Z 03・04墓壙などと近接する。また、S Z 06・08墓壙と切り合いが認められ、これら2基の墓壙の埋土上部を切っている。

規模・形態は約0.9mの平面方形である。深さは30cmで、底面はこの墓壙が切っている墓壙埋土に当たっている面はやや沈下しているが、ほかはほぼ平坦である。

埋土は2層からなる暗～黒褐色シルトである。炭化物や地山ブロックが混入する人為堆積であると考えられる。

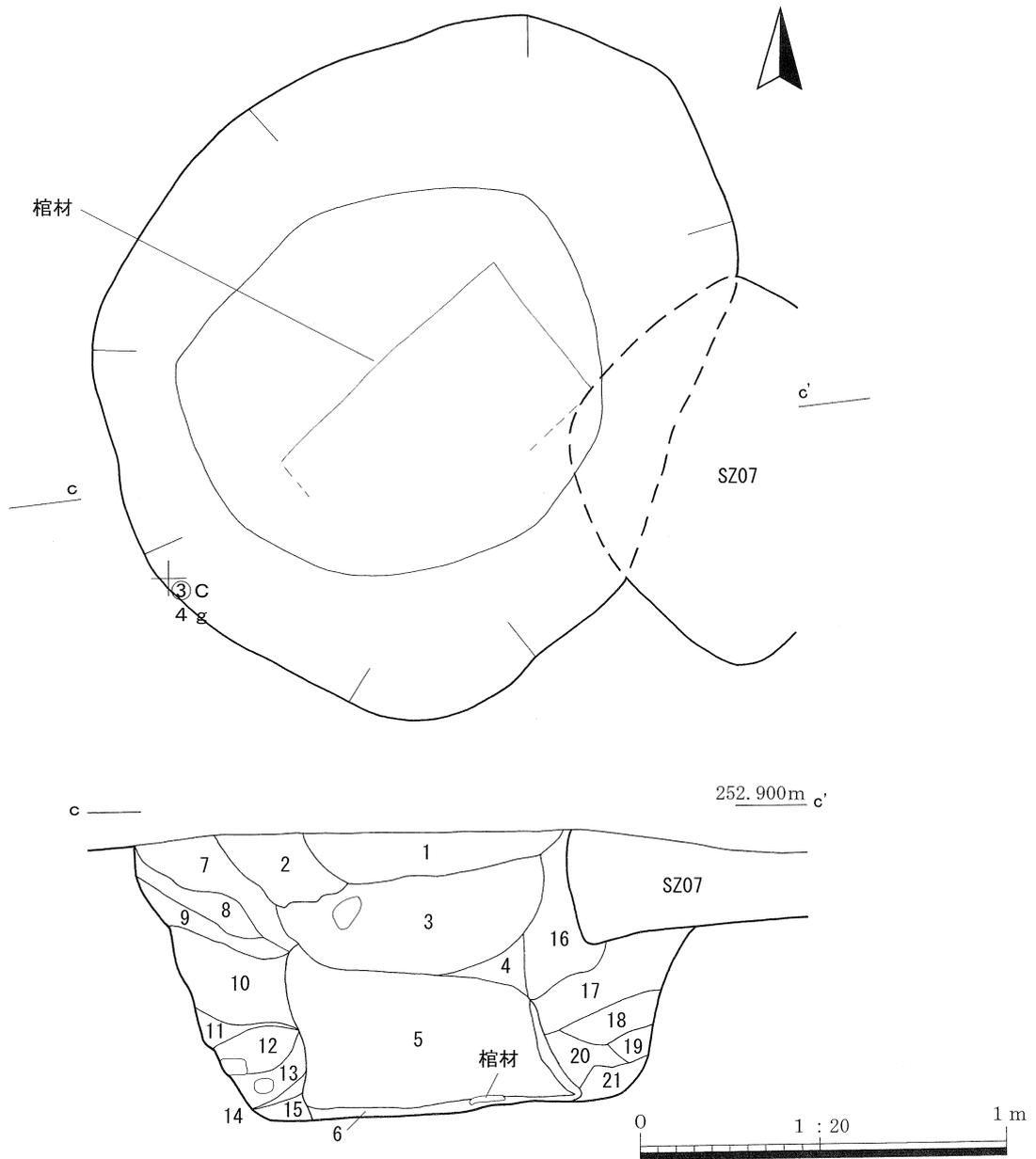
埋土中および底面から副葬品等の出土遺物はなかった。

墓壙以外の土坑である可能性も否定できないが、このエリアに占地し、これに類する土坑類がほか



- SZ07 1 10YR3/2 黒褐色シルト(炭化物微量含む)
2 10YR3/3 暗褐色シルト(地山B.L φ 3~5cm 大多く含む)

第28図 SZ 07墓壙



- | | | | | | |
|--------|---------|--------------------------|----|---------|---------------------------|
| SZ08 1 | 10YR3/2 | 黒褐色シルト(地山B.L少量含む) | 12 | 10YR5/6 | 黄褐色シルト(地山B.L φ 2cm大含む) |
| 2 | 10YR6/6 | 明黄褐色シルト(黒色土B.L多く含む) | 13 | 10YR2/1 | 黒色シルト(小礫混、地山B.L含む) |
| 3 | 10YR3/1 | 黒褐色シルト(地山B.L少量含む) | 14 | 10YR5/6 | 黄褐色シルト(地山B.L φ 2cm大少量含む) |
| 4 | 10YR5/6 | 黄褐色シルト(しまりなし、粗粒砂多く含む) | 15 | 10YR2/1 | 黒色シルト(地山B.L φ 1cm大少量含む) |
| 5 | 10YR6/8 | 明黄褐色シルト(様々なB.L多く含む) | 16 | 10YR6/6 | 明黄褐色シルトと10YR3/2黒褐色シルトの混合土 |
| 6 | 5Y5/1 | 灰色粘質シルト(棺痕跡) | 17 | 10YR4/6 | 褐色シルト(様々なB.L含む) |
| 7 | 10YR6/6 | 明黄褐色シルト(様々なB.L多く含む) | 18 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト(地山B.L φ 1cm大含む) |
| 8 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色シルト(様々なB.L含む) | 19 | 10YR3/4 | 暗褐色シルト(地山B.L φ 1cm大多く含む) |
| 9 | 10YR6/6 | 明黄褐色シルト(黒色土B.L多く含む) | 20 | 10YR3/2 | 黒褐色シルト(地山B.L φ 2cm大少量含む) |
| 10 | 10YR4/6 | 褐色シルト(小礫混) | 21 | 10YR4/1 | 褐灰色シルト(地山B.L φ 2cm大少量含む) |
| 11 | 10YR2/1 | 黒褐色シルト(地山B.L φ 2cm大少量含む) | | | |

第29図 SZ 08墓壙

に存在しないことを考えると墓壙であると考えられる。墓壙底面より時期を特定できる出土遺物が無かったが、他の遺構と同じ墓域に存在することから17世紀後半以降の墓壙であると考えられる。墓壙規模や墓壙内の様子、棺の規模などより被葬者が子供ならば土葬墓の可能性もあるが、成人ならば火葬骨が納められた墓壙であると判断される。

S Z 08墓壙 (第21・29図、写真図版20)

調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓壙である。検出した墓域の中では東側にあり、南側に位置する墓壙 (S Z 04) と近接する。また、S Z 07墓壙と切り合いが認められ、この墓壙によって埋土上部が切られている。

規模・形態は長軸2.02m、短軸1.5mの平面不整な楕円形である。深さは78cmで、底面は平面円形でほぼ平坦である。

埋土には棺箱の痕跡が認められ、棺内埋土とその両側にみられる掘方埋土とに分けられる。掘方埋土は多くのブロック土の混入がみられ人為的に埋め戻された様相である。一方、棺内埋土にも地山ブロックが認められるものの掘方埋土に比して締まりが無く、棺箱を覆うように埋め戻された埋土が遺骸の骨化に伴って沈み込んだものとみられる。

底面には棺底板の一部および土壌化したその痕跡が残存しており、その残存する形状より長方形を基調とする箱棺であったと推測される。また、底面では副葬品と考えられる銭貨 (104~107) が4枚出土しており、これらすべてが寛永通寶である。これら4枚の寛永通寶の内訳は古寛永1枚、新寛永3枚である。銭貨以外では煙管 (76・78)、ガラス製の玉 (135) が出土した。煙管は雁首と吸口であり、本来両者は同一個体であると考えられる。底面付近で人骨は認められず、正確な埋葬体位や被葬者の年齢および性別などは不明である。

墓壙底面より出土した銭貨より17世紀後半以降の墓壙であると考えられ、墓壙規模や墓壙内の様子、棺箱の存在などより土葬墓であると判断される。

S Z 09墓壙 (第21・30図、写真図版21)

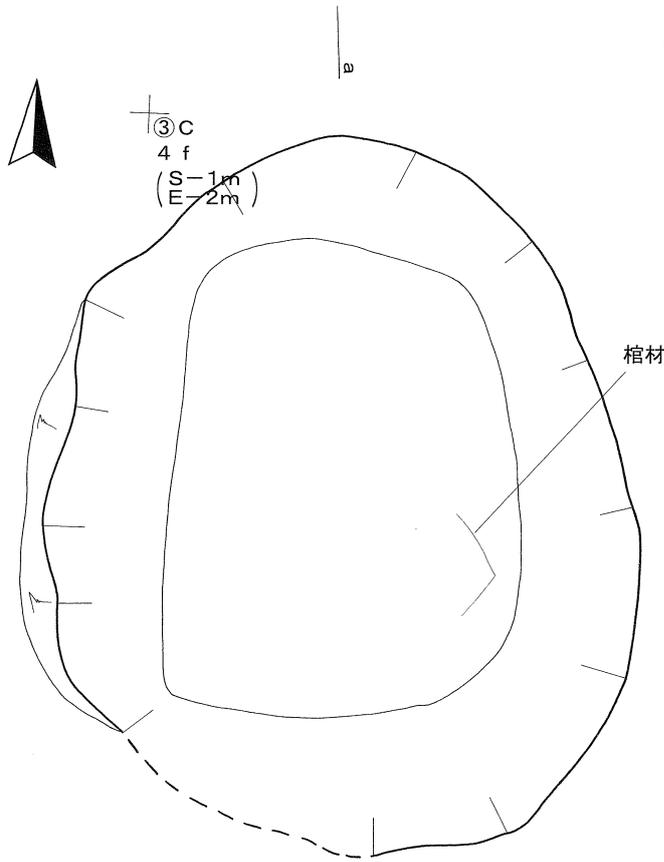
調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓壙である。検出した墓域のほぼ中央にあり、北側に位置するS Z 14墓壙と近接する。

規模・形態は長軸1.92m、短軸1.53mの平面不整な楕円～長方形である。深さは92cmで、底面は平面方形でほぼ平坦である。

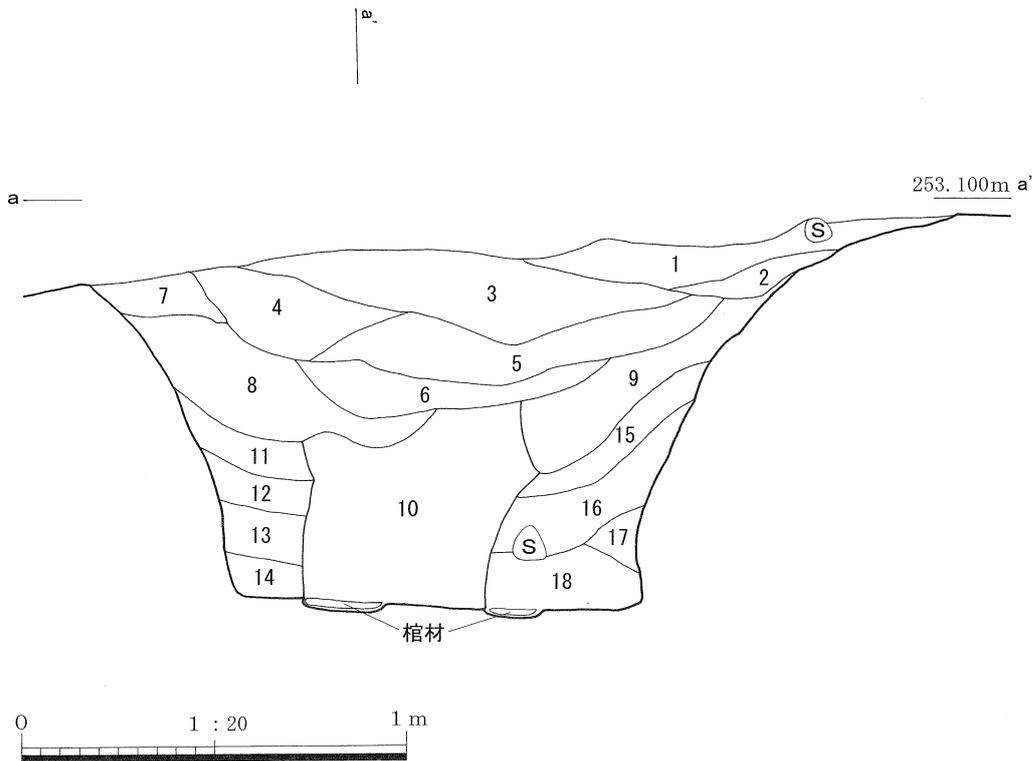
埋土には棺箱の痕跡がかすかに認められ、棺内埋土とその両側にみられる掘方埋土とに分けられる。掘方埋土は多くのブロック土の混入がみられ人為的に埋め戻された様相である。一方、棺内埋土にも地山ブロックが認められるものの掘方埋土に比して締まりが無く、棺箱を覆うように埋め戻された埋土が遺骸の骨化に伴って沈み込んだものとみられる。

底面には土壌化した棺箱底板の痕跡が残存しており、その残存する形状より長方形を基調とする箱棺であったと推測される。また、底面では副葬品と考えられる銭貨 (108~114) が7枚出土しており、銭文の判読が不可能な1枚を除いてすべてが寛永通寶である。判読可能な6枚の内、新古の判断ができないものが1枚あるが、ほか5枚すべて古寛永である。銭貨以外では小柄 (69)、煙管 (74) がそれぞれ出土した。底面付近で人骨は認められず、正確な埋葬体位や被葬者の年齢および性別などは不明である。

墓壙底面より出土した銭貨より17世紀前半以降の墓壙であると考えられ、墓壙規模や墓壙内の様子、棺箱の存在などより土葬墓であると判断される。



- SZ09
- 1 10YR3/1 黒褐色シルト
(様々なB.L土多量含む)
 - 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト
(地山B.L φ 2cm大多量含む)
 - 3 10YR3/2 黒褐色シルト(地山B.L多量含む)
 - 4 10YR3/2 黒褐色シルト(地山B.L φ 5cm多く含む)
 - 5 10YR2/1 黒色シルト(地山B.L φ 1cm含む)
 - 6 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
(様々なB.L土多く含む)
 - 7 10YR5/6 黄褐色シルト(様々なB.L土多く含む)
 - 8 10YR5/6 黄褐色シルト10YR3/2黒褐色シルトとの
混土
 - 9 10YR3/2 黒褐色シルト
(地山B.L φ 2cm大多く含む)
 - 10 10YR6/6 明黄褐色シルトと10YR3/1黒褐色シルト
の混土
 - 11 10YR2/1 黒色シルト(地山B.L φ 3cm大含む)
 - 12 10YR4/2 灰黄褐色シルト
(地山B.L φ 5cm大多量含む)
 - 13 10YR6/6 明黄褐色シルト
(黒色B.L φ 5cm大多く含む)
 - 14 10YR3/2 黒褐色シルト(地山 φ 2cm大多く含む)
 - 15 10YR2/1 黒色シルト(地山B.L φ 5cm大含む)
 - 16 10YR4/1 褐灰色シルト(様々なB.L土多量含む)
 - 17 10YR2/2 黒褐色シルト(地山B.L φ 1cm大含む)
 - 18 10YR4/2 灰黄褐色シルト
(地山B.L φ 2cm大多量含む)



第30図 SZ 09墓墳

SZ10墓壙 (第21・31図、写真図版24)

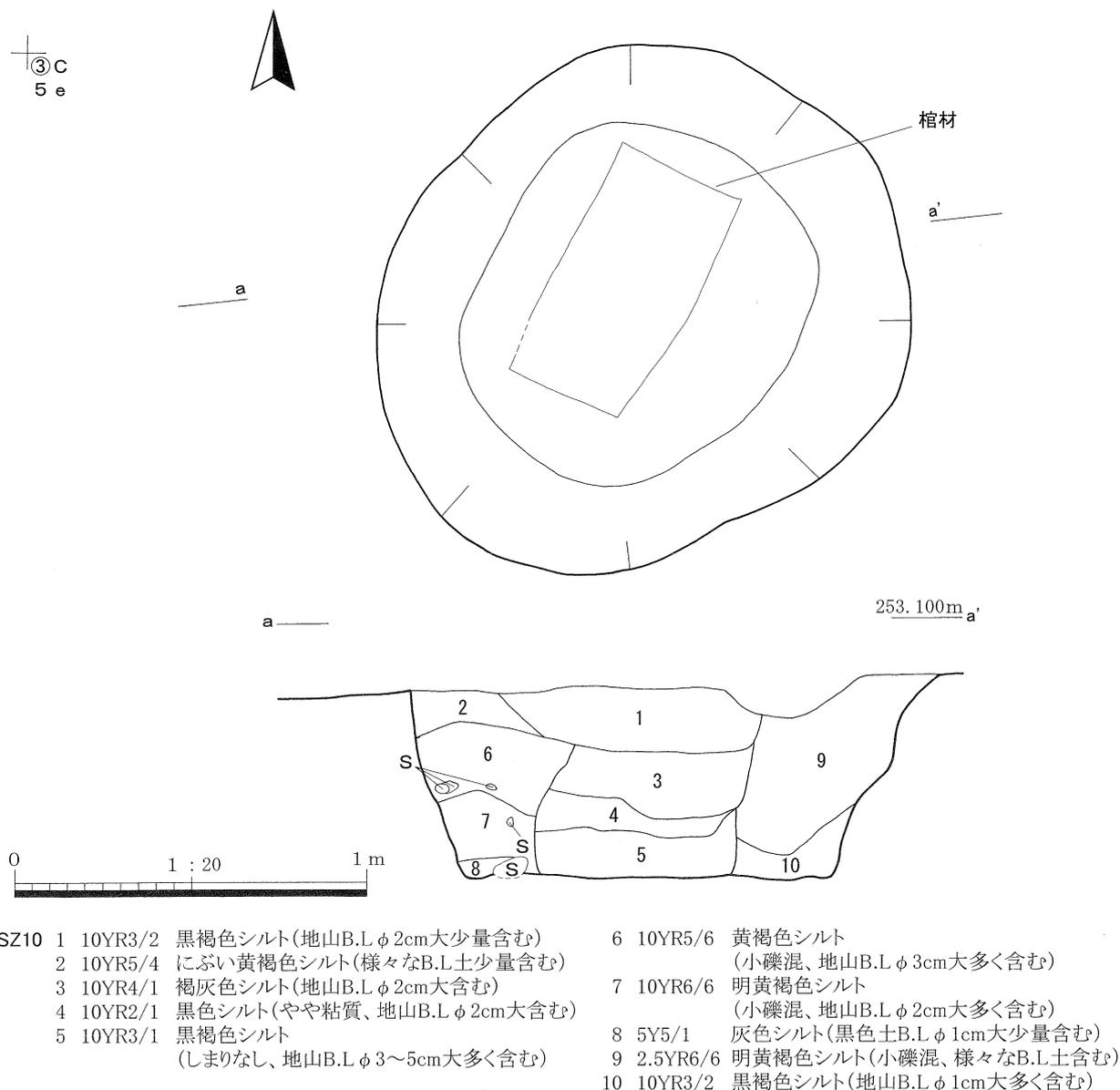
調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓壙である。検出した墓域の中では南西端にあり、北側に位置するSZ02墓壙とはやや間隔をおいて存在する。

規模・形態は長軸1.60m、短軸1.43mの平面円形に近い楕円形である。深さは55cmで、底面はほぼ平坦である。

埋土には棺箱の痕跡がかすかに認められ、棺内埋土とその両側にみられる掘方埋土とに分けられる。掘方埋土は多くのブロック土の混入がみられ人為的に埋め戻された様相である。一方、棺内埋土にも地山ブロックが認められるものの掘方埋土に比して締まりが無く、棺箱を覆うように埋め戻された埋土が遺骸の骨化に伴って沈み込んだものとみられる。

底面には土壌化した棺箱底板の痕跡が残存しており、その残存する形状より長方形を基調とする箱棺であったと推測される。底面付近で人骨は認められず、正確な埋葬体位や被葬者の年齢および性別などは不明である。

墓壙底面より時期を特定できる出土遺物が無かったが、他の遺構と同じ墓域に存在することから17



第31図 SZ10墓壙

世紀後半以降の墓壙であると考えられる。墓壙規模や墓壙内の様子、棺箱の存在などより土葬墓であると判断される。

S Z 11墓壙 (第21・32図、写真図版25)

調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓壙である。検出した墓域の中では西側にあり、西側に位置するS Z 02墓壙と近接する。また、S Z 12墓壙と切り合いが認められ、この墓壙埋土を切っている。また、底面より下位では1基のS Z 16墓壙を検出し、このS Z 16墓壙を切っていることがわかった。

規模・形態は東西1.55mの平面方形である。深さは55cmで、底面はほぼ平坦である。

埋土には棺箱の痕跡がかすかに認められ、棺内埋土とその両側にみられる掘方埋土とに分けられる。掘方埋土は多くのブロック土の混入がみられ人為的に埋め戻された様相である。一方、棺内埋土にも地山ブロックが認められるものの掘方埋土に比して締まりが無く、棺箱を覆うように埋め戻された埋土が遺骸の骨化に伴って沈み込んだものとみられる。特に棺内埋土は一部空洞化した状態であった。底面には明瞭な棺の痕跡は認められなかったが、埋土に微妙な変化が認められることから底面であると考えた。底面では副葬品と考えられる小柄(67)と煙管(77)が出土した。底面付近で人骨は認められず、正確な埋葬体位や被葬者の年齢および性別などは不明である。

墓壙底面より時期を特定できる出土遺物が無かったが、他の遺構と同じ墓域に存在することから17世紀後半以降の墓壙であると考えられる。墓壙規模や墓壙内の様子、棺箱の存在などより土葬墓であると判断される。

S Z 12墓壙 (第21・33図、写真図版25)

調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓壙である。検出した墓域の中では西側にあり、2基のS Z 11・13墓壙と切り合いが認められる。S Z 11・13墓壙の2基はこの墓壙埋土を切っている。

規模・形態は東西1.48mの平面楕円であると考えられる。深さは86cmで、底面はほぼ平坦である。

埋土の大部分は、ほかの墓壙2基に切られているため埋土の大半は残存していないが、棺箱の痕跡がかすかに認められ、棺内埋土とその両側にみられる掘方埋土とに分けられる。掘方埋土は多くのブロック土の混入がみられ人為的に埋め戻された様相である。一方、棺内埋土にも地山ブロックが認められるものの掘方埋土に比して締まりが無く、棺箱を覆うように埋め戻された埋土が遺骸の骨化に伴って沈み込んだものとみられる。

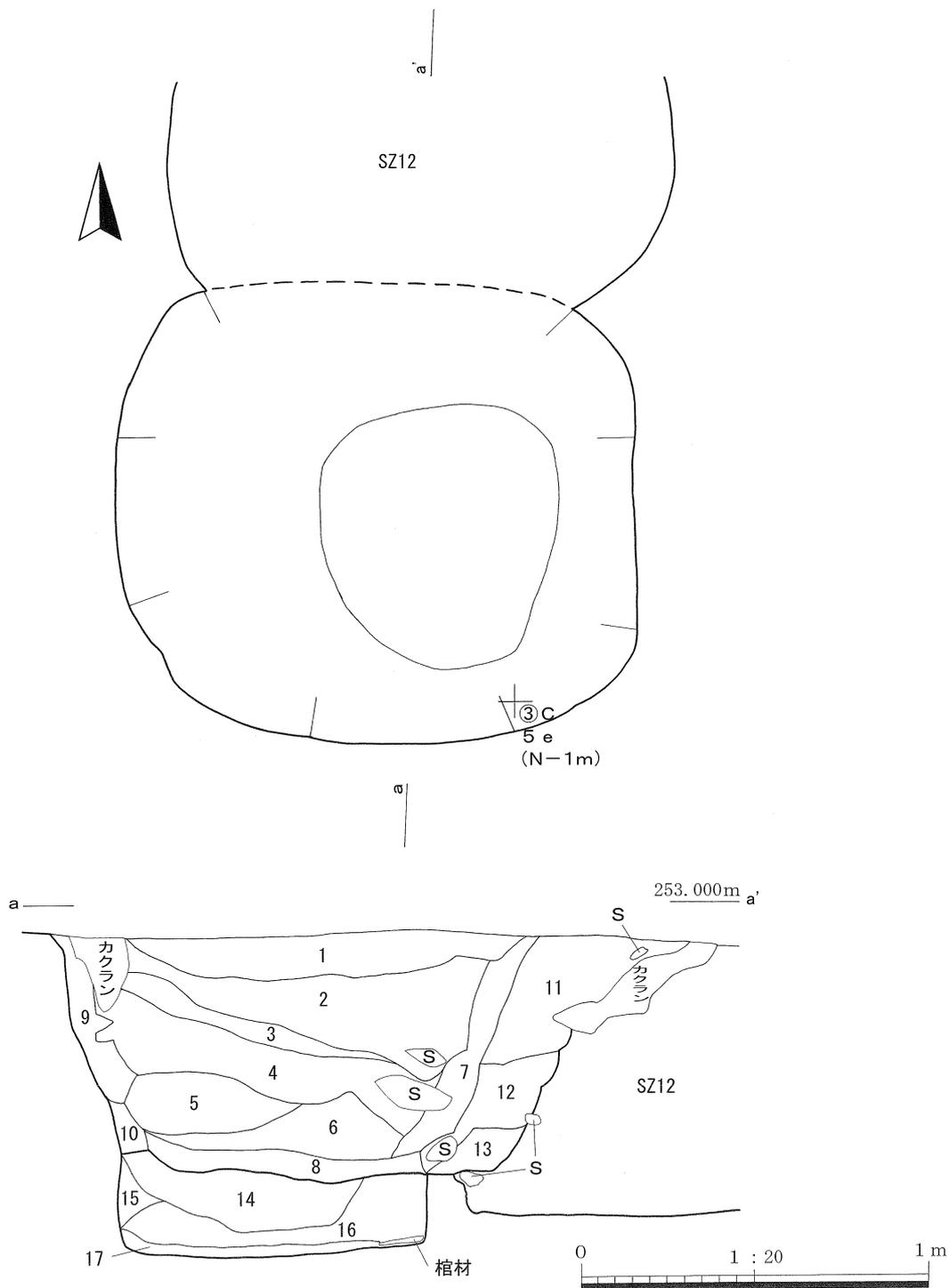
底面には土壌化した棺箱底板の痕跡が残存しており、その残存する形状より長方形を基調とする箱棺であったと推測される。また、底面では副葬品と考えられる銭貨(115)が1枚出土しているが、銭文の判読は不可能である。底面付近で人骨は認められず、正確な埋葬体位や被葬者の年齢および性別などは不明である。

墓壙底面より出土した銭貨が判読不可能であるため、詳細な時期は不明である。しかし、他の遺構との関係を考えれば、少なくとも16～17世紀前半頃までの墓壙であると考えられ、墓壙規模や墓壙内の様子、棺箱の存在などより土葬墓であると判断される。

S Z 13墓壙 (第21・34図、写真図版25)

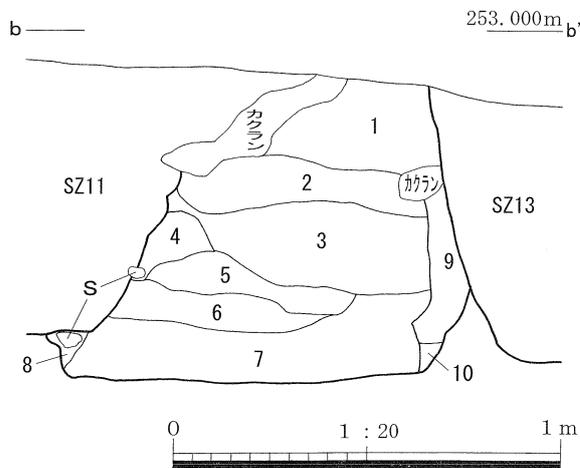
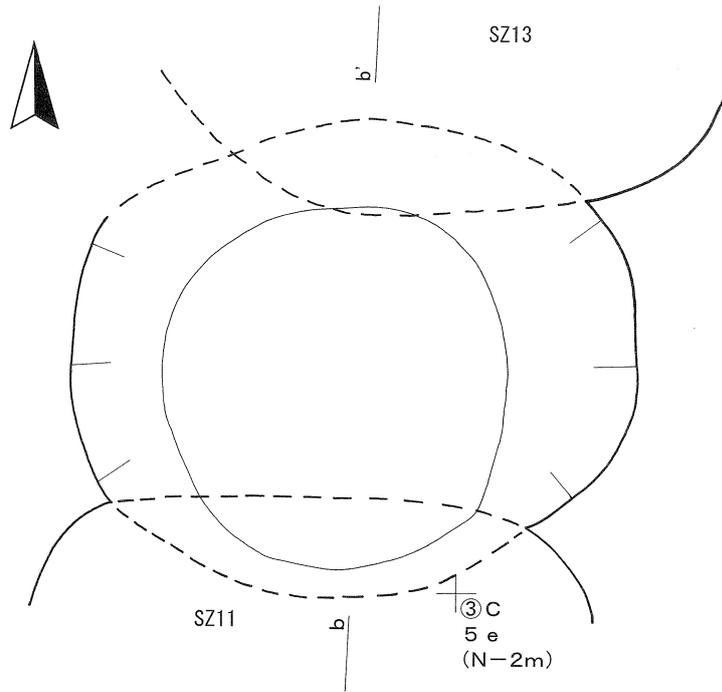
調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓壙である。検出した墓域の中では東側にあり、4基のS Z 12・14・17・18墓壙と切り合いが認められる。S Z 14・18墓壙の2基はこの墓壙埋土を切っており、2基のS Z 12・17墓壙埋土の一部を切っている。

規模・形態は、他の遺構との切り合いが著しく判然としないが、他の土葬墓と考えられる墓壙と同



- | | |
|--|--|
| <p>SZ11 1 10YR3/2 黒褐色シルト(地山B.L φ 1cm 大多く含む)
 2 10YR3/2 黒褐色シルト(様々なB.L土多量含む)
 3 10YR2/1 黒色シルト(地山B.L φ 1cm 大多く含む)
 4 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト
 (様々な地山B.L土多量含む)
 5 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
 (小礫混、様々なB.L土多量含む)
 6 10YR4/1 褐灰色シルト(地山B.L φ 3cm 大多く含む)
 7 10YR5/1 褐灰色シルト(やや粘質、しまりなし)
 8 10YR1.7/1 黒色粘質シルト</p> | <p>9 10YR2/2 黒褐色シルト(地山B.L 3cm 大含む)
 10 10YR4/1 褐灰色シルト
 (しまりなし、地山B.L φ 1cm 大少量含む)
 11 10YR3/1 黒褐色シルト(様々なB.L土多量含む)
 12 10YR4/1 褐灰色シルト(地山B.L φ 2cm 大多く含む)
 13 10YR4/1 褐灰色シルト(地山B.L φ 1cm 大含む)
 SZ16 14 10YR3/2 黒褐色シルト(やや粘質)
 15 10YR4/1 褐灰色シルト(地山B.L φ 1cm 大含む)
 16 10YR5/1 褐灰色シルト
 17 10YR2/2 黒褐色シルト(やや粘質)</p> |
|--|--|

第32図 SZ 11・16墓墳



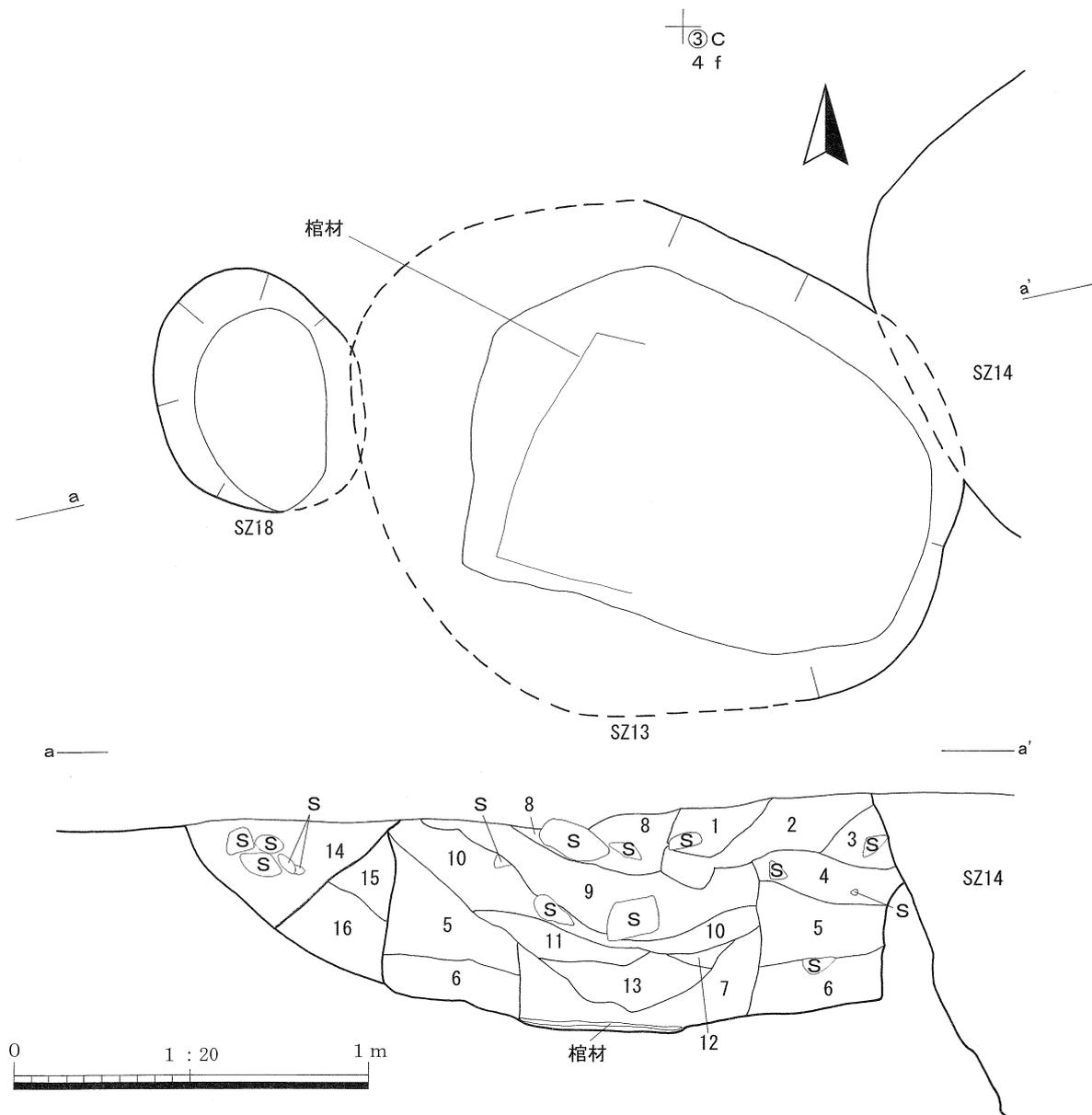
- | | | | |
|------|----|---------|-----------------------------------|
| SZ12 | 1 | 10YR4/1 | 褐灰色シルト(地山B.L φ 5cm 多く含む) |
| | 2 | 10YR5/1 | 褐灰色シルト(地山B.L φ 1cm 大含む) |
| | 3 | 10YR4/2 | 灰黄褐色シルト
(地山B.L φ 1cm 多く含む) |
| | 4 | 10YR3/1 | 黒褐色シルト
(地山B.L φ 1~5cm 多く含む) |
| | 5 | 10YR2/2 | 黒褐色シルト(地山B.L φ 2cm 大含む) |
| | 6 | 10YR4/1 | 褐灰色シルト(様々なB.L土 多く含む) |
| | 7 | 10YR4/1 | 褐灰色シルト
(粗粒砂混、地山B.L φ 1cm 少量含む) |
| | 8 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色シルト |
| | 9 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色シルト(様々なB.L土 含む) |
| | 10 | | 8と同じ |

第33図 SZ 12墓墳

様の規模で、やや丸みのある長方形あるいは楕円形であると推測される。深さは61.2cmで平坦であり、底面の平面形態は丸みのある長方形である。

埋土には棺箱の痕跡がかすかに認められ、棺内埋土とその両側にみられる掘方埋土とに分けられる。掘方埋土は多くのブロック土の混入がみられ人為的に埋め戻された様相である。一方、棺内埋土にも地山ブロックが認められるものの掘方埋土に比して締まりが無く、棺箱を覆うように埋め戻された埋土が遺骸の骨化に伴って沈み込んだものとみられる。

底面には棺底板の一部および土壌化したその痕跡が残存しており、その残存する形状より長方形を基調とする箱棺であったと推測される。また、底面では副葬品と考えられる銭貨(109)が8枚出土した。これらのうち2枚は寛永通寶であるが、その他6枚は銭文の判読が不可能である。なお、2枚



- SZ13
- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト(地山B.L φ 1cm大含む)
 - 2 10YR5/2 灰黄褐色シルト(地山B.L φ 2cm大多く含む)
 - 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト(地山B.L φ 1cm大含む)
 - 4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト(様々なB.L土多く含む)
 - 5 10YR3/2 黒褐色シルト(様々なB.L土多く含む)
 - 6 10YR3/2 黒褐色シルト(様々なB.L土多量含む)
 - 7 10YR4/1 褐灰色シルト(地山B.L φ 1~2cm大多く含む)
 - 8 10YR2/1 黒色シルト(やや粘質)
 - 9 10YR3/2 黒褐色シルト(地山B.L φ 3cm大多く含む)
 - 10 10YR4/1 褐灰色シルト(地山B.L φ 5cm大含む)
 - 11 10YR3/3 暗褐色シルト(地山B.L φ 1cm大少量含む)
 - 12 10YR4/1 褐灰色シルト(粗粒砂混、地山B.L φ 1cm大少量含む)
 - 13 10YR5/2 灰黄褐色シルト(小礫混、様々なB.L土含む)
- SZ18
- 14 10YR2/2 黒褐色シルト(礫多く混じる)
- SZ17
- 15 10YR3/1 黒褐色シルト(地山B.L φ 5cm以上大多く含む)
 - 16 10YR3/4 暗褐色シルト(地山B.L φ 1cm大少量含む)

第34図 SZ 13・17・18墓墳

の寛永通寶のうち1枚は新寛永であるが、1枚は新古不明である。底面付近で人骨は認められず、正確な埋葬体位や被葬者の年齢および性別などは不明である。

墓壇底面より出土した銭貨より17世紀後半以降の墓壇であると考えられ、墓壇規模や墓壇内の様子、棺箱の存在などより土葬墓であると判断される。

S Z 14墓壇 (第21・35図、写真図版26)

調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓壇である。検出した墓域の中では東側にあり、S Z 13墓壇と切り合いが認められる。S Z 13墓壇はこの墓壇埋土の一部を切っている。規模・形態は長軸1.69m、短軸1.47mの平面楕円であると考えられる。深さは93cmで、底面はほぼ平坦である。

埋土には棺箱の痕跡がかすかに認められ、棺内埋土とその両側にみられる掘方埋土とに分けられる。掘方埋土は多くのブロック土の混入がみられ人為的に埋め戻された様相である。一方、棺内埋土にも地山ブロックが認められるものの掘方埋土に比して締まりが無く、棺箱を覆うように埋め戻された埋土が遺骸の骨化に伴って沈み込んだものとみられる。

底面には棺底板および側板の一部が残存しており、その形状より長方形を基調とする箱棺であったと推測される。また、底面では副葬品と考えられる銭貨(117~120)が5枚出土した。これらのうち2枚は寛永通寶であるが、その他3枚は銭文の判読が不可能である。なお、2枚の寛永通寶のうち1枚は古寛永であるが、1枚は新古不明である。銭貨以外では火打ち金(72)、煙管(73・75)が出土した。煙管はそれぞれ雁首と吸口であり、両者は本来同一個体である。底面付近で人骨は認められず、正確な埋葬体位や被葬者の年齢および性別などは不明である。

墓壇底面より出土した銭貨より17世紀前半以降の墓壇であると考えられ、墓壇規模や墓壇内の様子、棺箱の存在などより土葬墓であると判断される。

S Z 15墓壇 (第21・36図、写真図版27)

調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓壇である。検出した墓域の中では西側にあり、南には切り合いはないもののS Z 17墓壇が近接する。

規模・形態は長軸0.97m、短軸0.84mの長円形である。深さは23cmで、底面はほぼ平坦である。

埋土は5層から成り、地山ブロックを部分的に含むシルトである。断定はできないが、ブロック等の混入などから人為堆積であると考えられる。

底面では、鉄製の鎌と考えられる刃物が出土した。また、遺存度が悪く掲載していないが墓壇四隅を中心に鉄釘が数点出土した。この底面付近で人骨は認められず、正確な埋葬体位や被葬者の年齢および性別などは不明である。

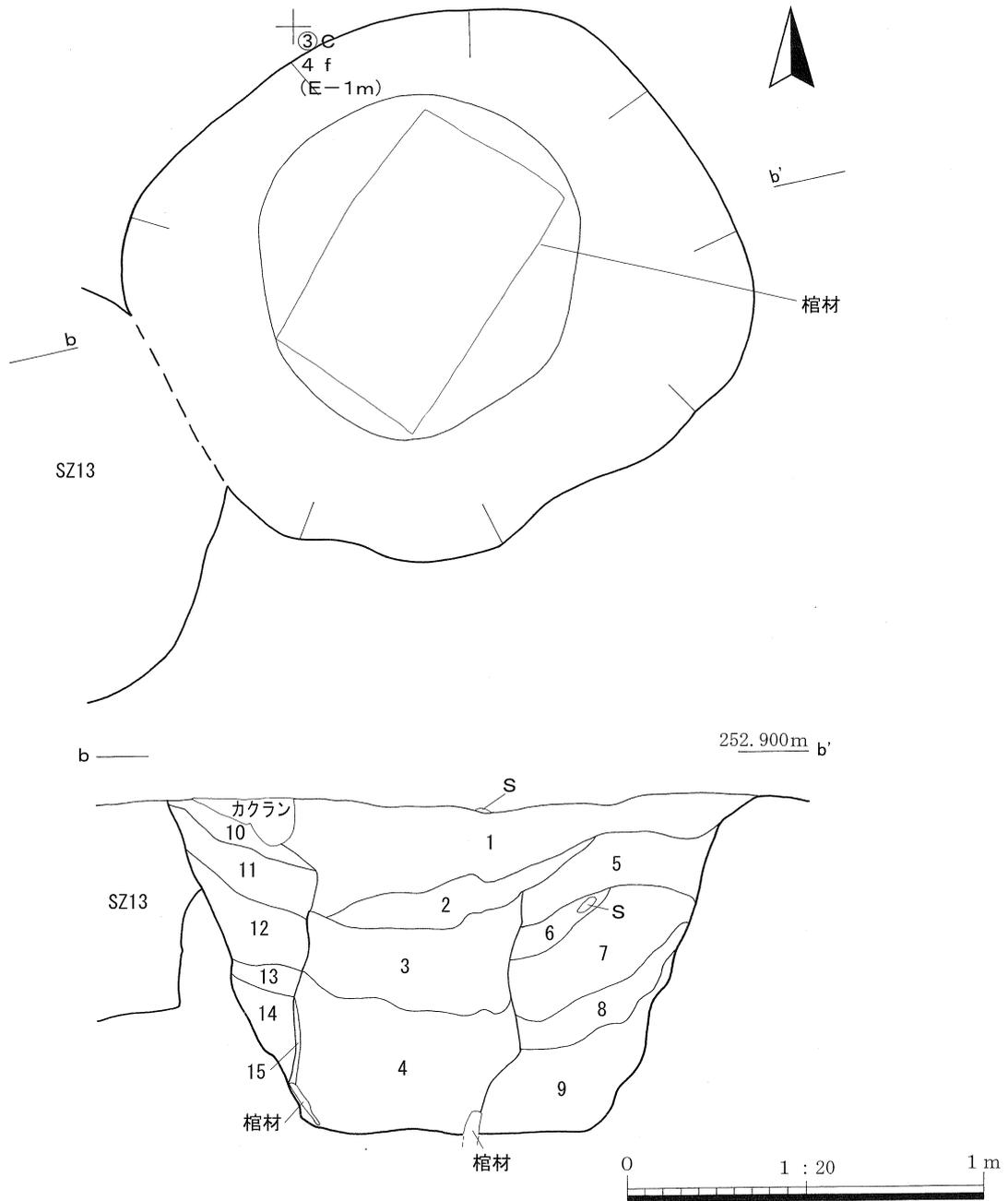
墓壇は近世墓であると推定されるが、墓壇から時期を特定できる遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明である。墓壇規模や墓壇内の様子、棺の規模などより被葬者が子供ならば土葬墓の可能性もあるが、成人ならば火葬骨が納められた墓壇であると判断される。

S Z 16墓壇 (第21・32図、写真図版25)

調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓壇である。検出した墓域の中では西側にあり、上部大半をS Z 11墓壇が切っている。よって、墓壇底面付近がわずかに残るのみである。

平面の規模は不明であるが、深さは地表面から底面までが96cmである。平面形態は底面がおおむね円形である

埋土は最下層が残存しており、棺箱の痕跡がわずかに認められる。底面付近では湧水が著しく、埋土も多くの水分が含まれている。



- SZ14
- 1 10YR4/1 褐灰色シルト(小礫混、地山B.L φ 3cm大少量含む)
 - 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト(炭化物微量含む、地山B.L φ 2cm大含む)
 - 3 10YR5/1 褐灰色砂質シルトと10YR6/4にぶい黄橙色シルトの混合土
 - 4 10YR6/2 灰黄褐色シルト(地山B.Lと黒色土B.Lを多く含む)
 - 5 2.5Y5/3 黄褐色シルト(粗粒砂混、地山B.L 3cm大多く含む)
 - 6 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト(地山B.L含む)
 - 7 2.5YR3/3 暗オリーブ褐色シルト(中～粗粒砂混、様々なB.L土含む)
 - 8 10YR4/2 灰黄褐色シルト(様々なB.L土多く含む)
 - 9 10YR5/6 黄褐色シルト(粗粒砂混、地山B.L 1cm大多く含む)
 - 10 10YR6/6 明黄褐色シルト(粗粒砂混、地山B.L φ 3～5cm大少量含む)
 - 11 10YR5/6 黄褐色シルト(地山B.L φ 2cm大少量含む)
 - 12 10YR5/6 黄褐色シルト(粗粒砂混、地山B.L φ 1cm大少量含む)
 - 13 10YR4/6 褐色シルト(小礫混、地山B.L φ 1cm大含む)
 - 14 10YR6/8 明黄褐色シルトと10YR4/1褐灰色シルトの混合土
 - 15 5B5/1 青灰色粘質シルト(棺の側板痕)

第35図 SZ 14墓壇

底面において遺物および人骨は認められず、正確な埋葬体位や被葬者の年齢および性別などは不明である。

墓壙は近世墓であると推定されるが、墓壙から時期を特定できる遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明である。また、墓壙規模や墓壙内の様子、棺箱の存在などより土葬墓であると判断される。

S Z 17墓壙（第21・34・37図、写真図版28）

調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓壙である。検出した墓域の中では西側にあり、S Z 15・18墓壙などと近接し、S Z 13墓壙によって切られている。

規模・形態は推定値で長軸1.2m、短軸0.7mの平面楕円形である。深さ32cmで、底面はほぼ平坦である。

埋土はほぼ単層の黒色シルトである。埋土は小礫と地山ブロックを含み、人為堆積であると考えられる。

底面では副葬品と考えられる銭貨（121～126）が6枚まとまった状態で出土した。これらはいずれも寛永通寶であり、内訳は古寛永3枚、新寛永3枚である。銭貨以外では鉄製鎌と考えられる刃物1点、漆器椀の塗膜片が出土した。いずれの副葬品も底面北端の一箇所でもとまっている。底面において人骨は認められず、正確な埋葬体位や被葬者の年齢および性別などは不明である。

墓壙の時期は出土した銭貨より17世紀後半以降であると考えられる。墓壙規模や墓壙内の様子、棺の規模などより被葬者が子供ならば土葬墓の可能性もあるが、成人ならば火葬骨が納められた墓壙であると判断される。

S Z 18墓壙（第21・34図、写真図版29）

調査区東側の南端、近世墓が密集する場所に位置する墓壙である。検出した墓域の中では西側にあり、S Z 15・17墓壙などと近接し、S Z 13墓壙によって切られている。

規模・形態は短軸0.53m、長軸0.72mの平面楕円形である。深さは32cmで、底面は平面楕円形でほぼ平坦である。

埋土は多くのブロック土および小礫の混入がみられ、ほぼ水平に堆積しており人為的に埋め戻された様相である。

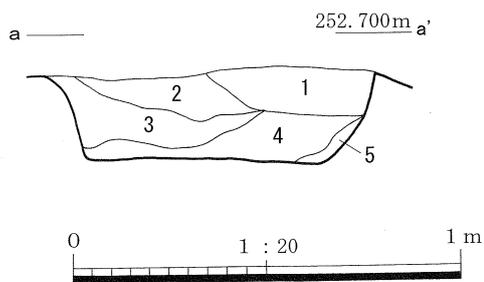
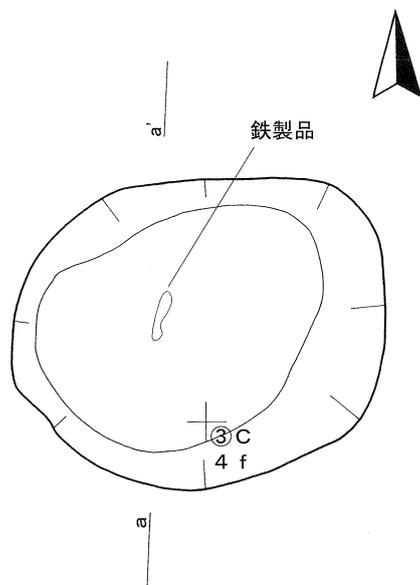
底面では副葬品と考えられる鉄製の刃物（66）が1点出土しており、形状より短刀か包丁のような刃物が想定される。また、漆器椀の塗膜片（81）も同じ位置で出土した。底面付近で人骨は認められず、正確な埋葬体位や被葬者の年齢および性別などは不明である。

墓壙は近世墓であると推定されるが、墓壙から時期を特定できる遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明である。墓壙規模や墓壙内の様子、棺の規模などより被葬者が子供ならば土葬墓の可能性もあるが、成人ならば火葬骨が納められた墓壙であると判断される。

S X 06暗きよ（写真図版29）

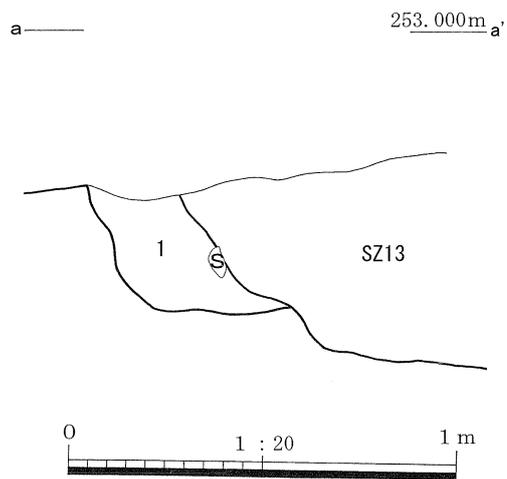
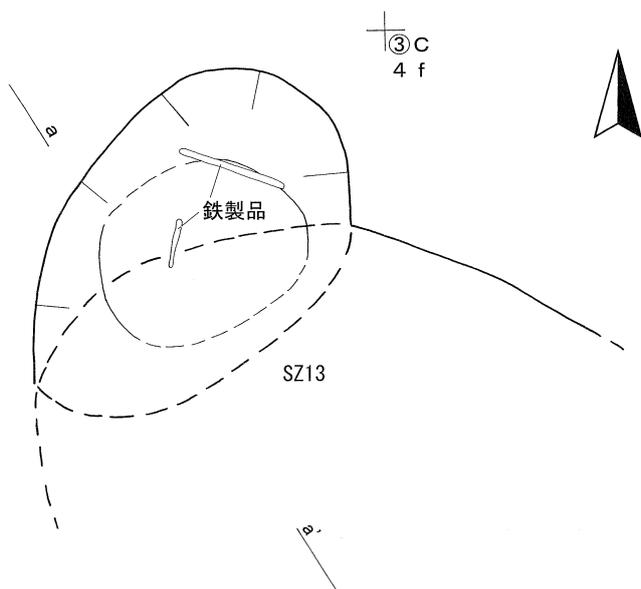
調査区西側で検出した暗きよである。拳～人頭大の石を溝の両縁に並べ、その中をさらに石で充填されている。南北方向から東西方向へ曲がりながら方形区画を導出している。このことから水田区画に沿うものと考えられ、水田区画が必ずしも均等でないことが窺える。

遺物を伴わないため時期の特定は難しいが、遺構の特徴から考えて近世の水田に伴う暗きよであると推測される。



- SZ15 1 10YR3/1 黒褐色シルト(地山B.L φ 5cm 大多く含む)
 2 10YR2/1 黒色シルト(やや粘質)
 3 10YR3/1 黒褐色シルト(地山B.L φ 2cm 大多量含む)
 4 10YR2/4 灰黄褐色シルト(やや粘質)
 5 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト(様々なB.L 土多く含む)

第36図 SZ 15墓墳



- SZ17 1 10YR2/1 黒色シルト (地山B.L. 含む)

第37図 SZ 17墓墳

(2) 出土遺物

縄文土器 (第38図、写真図版30・31)

1～18は縄文時代早期末～前期初頭に属する土器である。20～23は縄文時代晩期に属する土器である。19は時期不明の縄文土器である。いずれも調査区東側で検出した遺物包含層より出土したものである。

1～3は尖底土器深鉢の底部片である。いずれも底部最先端は欠損しているが、底部から体部下半への立ち上がり角度は約45度であるとみられる。3点とも胎土に繊維が認められるが、器表面にみられる繊維の痕跡はわずかである。

6～12・14～18は深鉢の口縁部である。いずれも縄文が施されているが、8・11は口唇部端面にもみられる。また、12の口唇部端面には連続する圧痕文が施されており、14は器表面に指による圧痕が認められる。13の縄文は羽状文、18の縄文には結束が認められる。19は深鉢であると考えられる。地文として捺糸文が施されている。他の土器と比べ、器壁薄く焼きも良いため前期以前の土器ではない可能性が高い。

20・21は深鉢の口縁部であり、22は浅鉢の口縁部～体部である。23は小形器種の底部である。

石器・石製品・土製品 (第39・40図、写真図版32・33)

24～49は縄文時代の剥片石器である。いずれも頁岩製であると考えられる。50は不明礫石器、51は石製品、52は土偶片である。いずれも遺物包含層出土である。

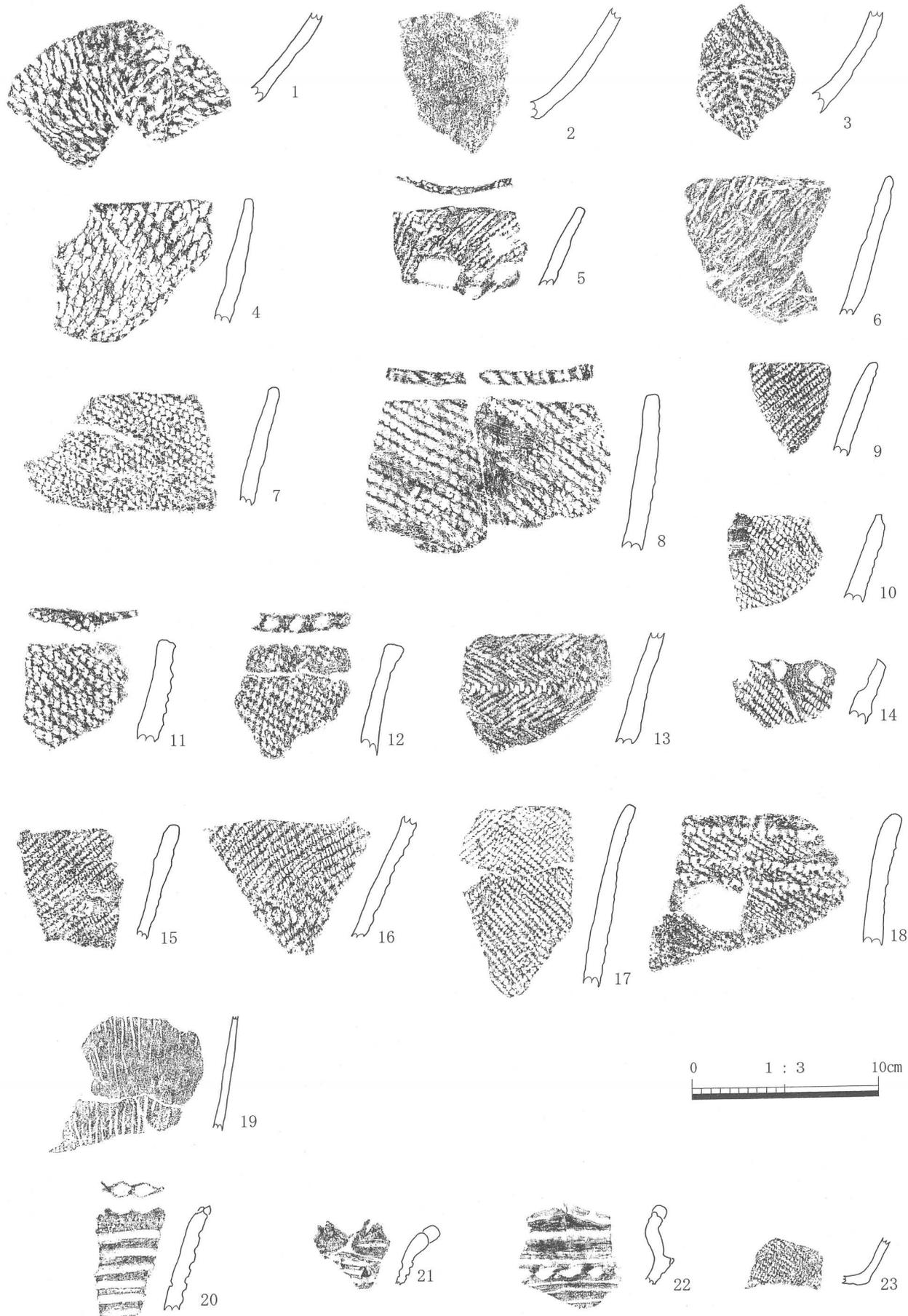
24～36は石匙である。24・25・27・28・29・31・32・34はいずれも縦長の形態であり、その他は横長の形態である。いずれも刃部に細かな調整が施されている。37～41は搔器であると考えられるが、不確かなものも含まれる。特に40は先端部の欠損した石鏃である可能性も考えられる。42～49は石鏃である。48・49は基部が作り出されている。50は礫石器であると考えられるが、器種および用途は不明である。形状から石斧等の未製品である可能性が考えられるが、判然としない。51は棒状の石製品である。表面は丁寧に研磨されており、その大きさ、形状、調整より石棒の一部であると考えられる。両先端部分が欠損しているため全長は不明である。52は土偶の破片である。中空土偶の肩部～腕にかけての部位であると推測される。円形の文様が3つ連なって確認できるほか、首～頭部に続くと思われる部分では一条の沈線が認められる。

土師器 (第41図、写真図版33)

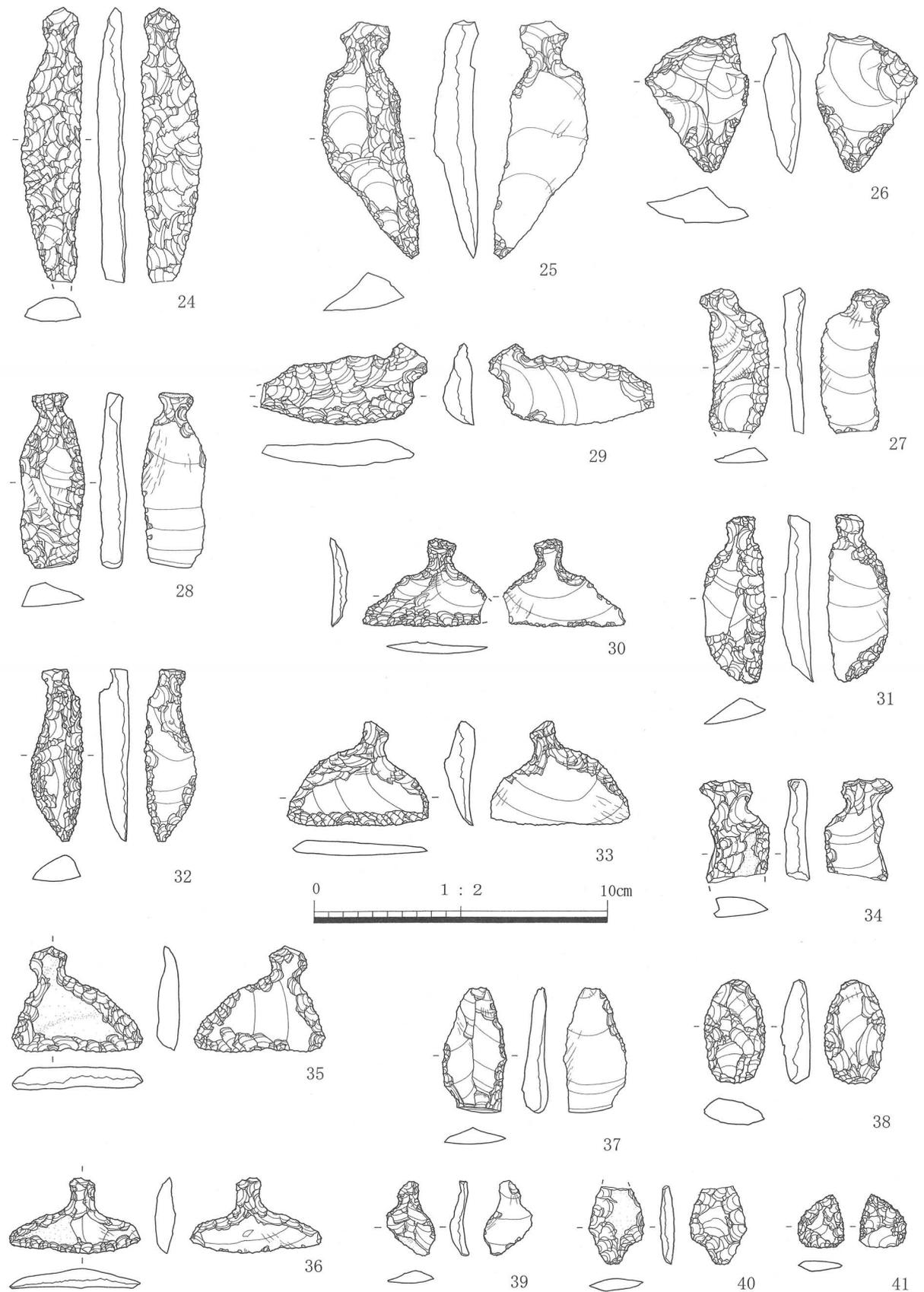
53～55はいずれも土師器である。いずれもS X 01～03焼土遺構に伴って出土した。53は坏である。外面はロクロによる回転ナデおよび体部最下半は回転ヘラケズリ、内面はミガキ調整および黒色処理が施されている。特徴から9世紀代のものであると考えられる。54・55は甕である。54は外面がロクロによる回転ナデおよび縦方向のヘラケズリ、内面は回転ナデおよびナデが施されている。土器の特徴から9世紀代のものであると考えられる。55は外面ヘラケズリ、内面は工具を用いた調整が施されている。やや軟質に焼成されている。時期はおおむね9世紀後半～10世紀頃のものと考えられる。

陶磁器 (第42図、写真図版34・36)

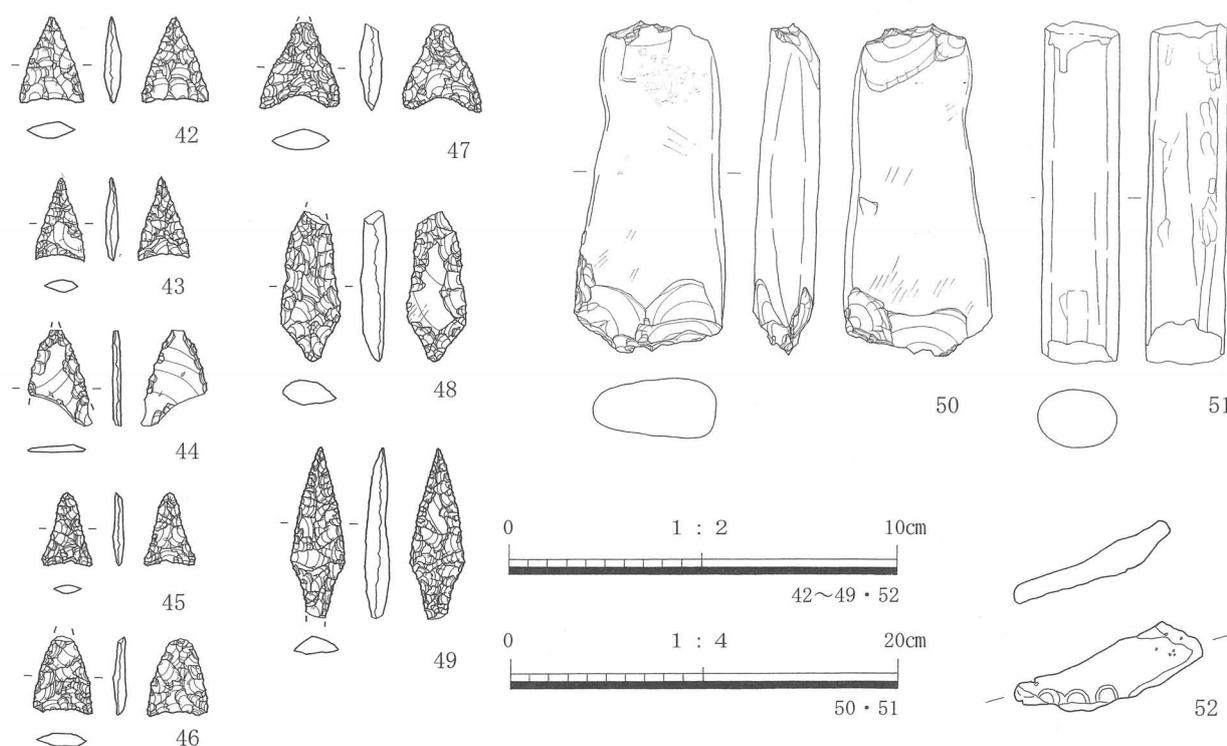
56はS D 07溝埋土上層より出土した磁器の染付碗である。内面に図柄は認められないが、外面には植物の図柄が認められる。また、見込み部分には環状に釉の掻き取りがおこなわれており、重ね焼きの量産体制下で製作されたものであると思われる。産地は肥前であると考えられ、時期は18世紀代が考えられる。57は表土層出土の陶器碗の体部下半の破片である。高台が付き、残存する外面は無釉で灰白色を呈する。一方、内面は褐色の鉄釉が厚く掛かっている。時期、産地は不明であるが、18世紀



第38図 出土遺物（縄文土器）



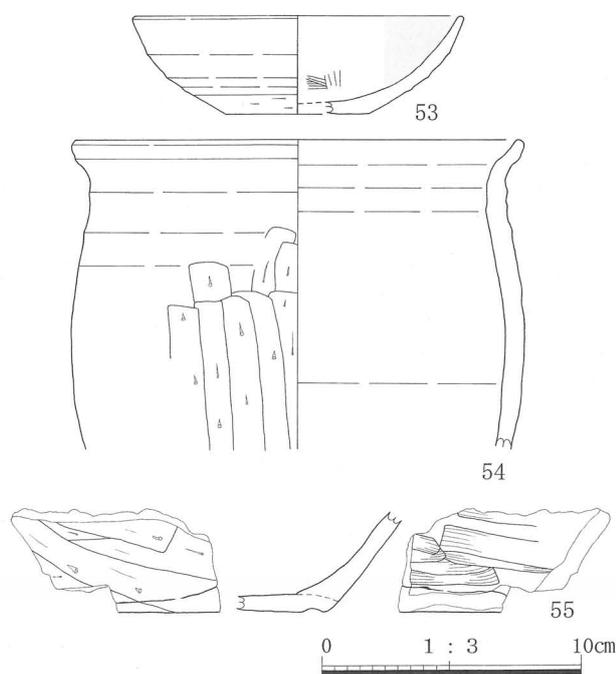
第39図 出土遺物（剥片石器 1）



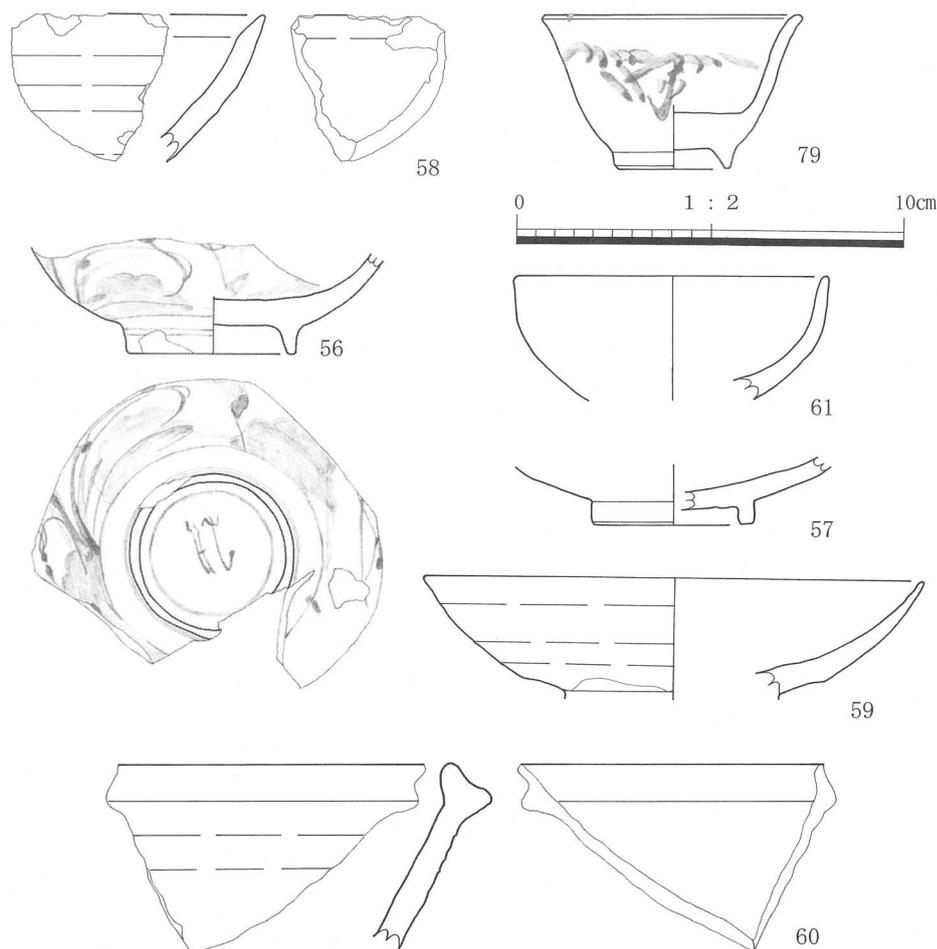
第40図 出土遺物（剥片石器2・石製品・土製品）

代の大堀・相馬産である可能性が考えられる。58はS D01溝埋土上層より出土した陶器口縁部片である。内外面ともに光沢のある黒色の釉が施されており、胎土は緻密で淡い灰白色である。器種は形態からみて国産の天目茶碗であると考えられる。時期および産地は中世後半の瀬戸・美濃産である可能性が高い。

59は調査区東側、S B01掘立柱建物付近の表土から出土した磁器である。内外面ともに淡い緑色の釉が施され、高台付近は無釉である。釉は比較的厚く、体部下半では釉溜まりも認められる。また、波佐見焼等の青磁釉とはやや趣を異にしている。見込みには重ね焼きによる高台痕跡があるが、釉は掻き取られていない。諸特徴からみて、17世紀代の肥前産磁器である可能性が高い。60は東側調査区東端表土より出土した陶器である。播り目は確認できないが、播鉢である可能性も考えられる。全体的に被熱のためか器表面が固く荒れている。時期、産地とも不明である。61はS X05落ち込みより出土した陶器片である。内外面に淡い緑色の釉が施されている小形の碗である。時期、産地は18世紀代の大堀・相馬産である



第41図 出土遺物（土師器）

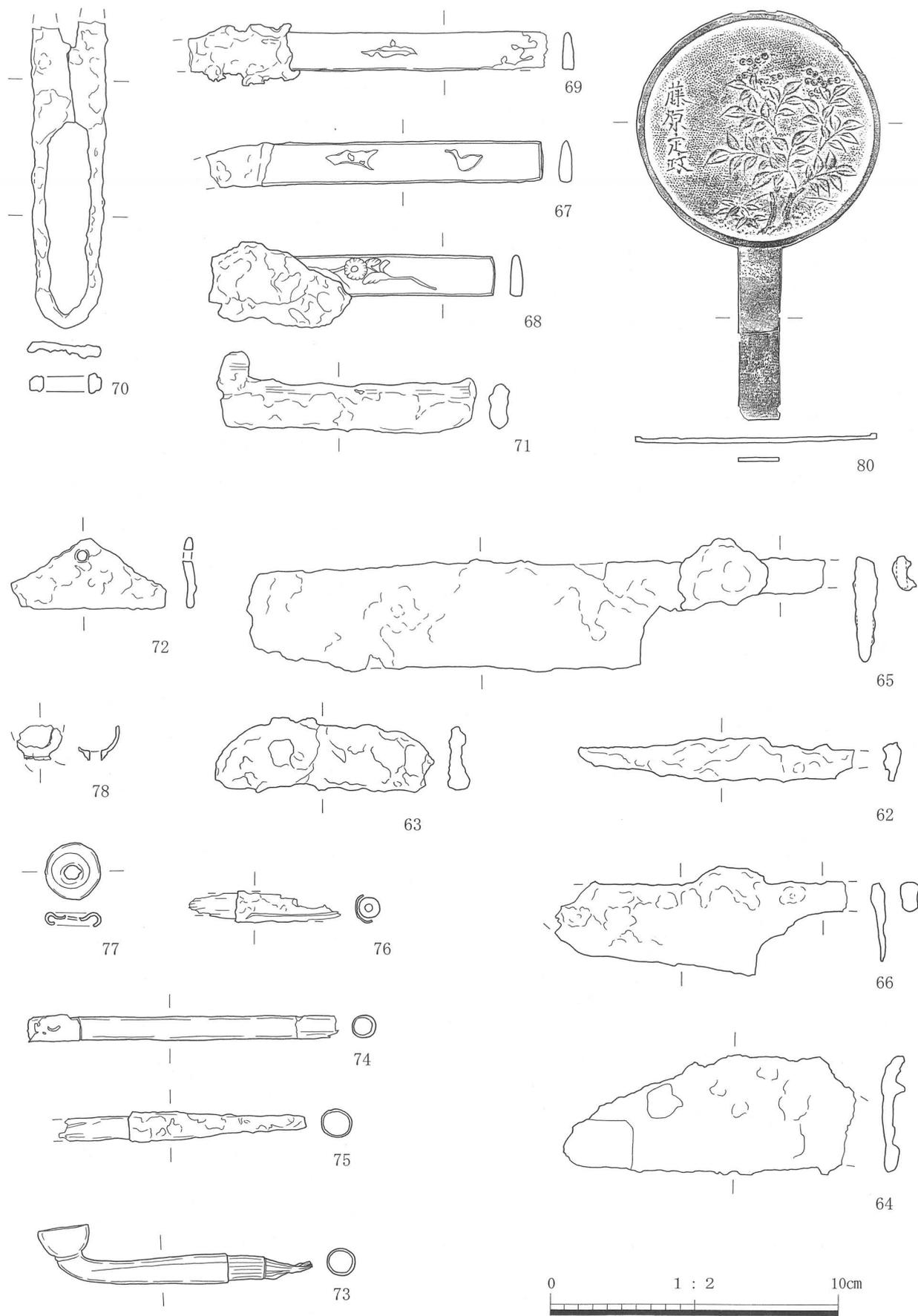


第42図 出土遺物（陶磁器）

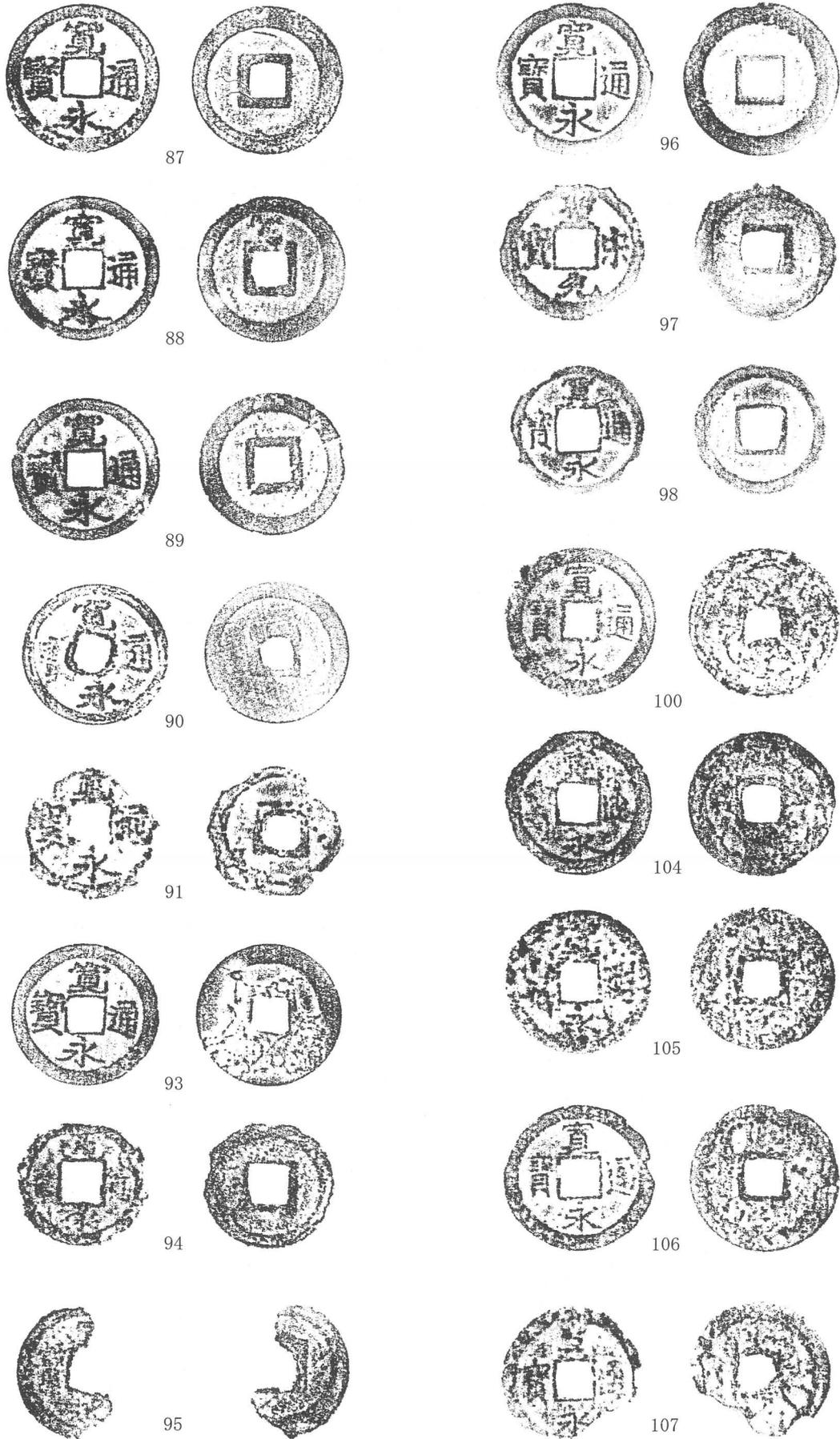
可能性が考えられる。79はS Z 06墓壙上層より出土した磁器染付小杯である。鉄製鋏、柄鏡と供伴して出土している。体部内外面全体に透明釉、外面に植物の図柄が認められる。高台と体部との境が連続せず明瞭な境界を有し、口縁部は外反する。諸特徴から17世紀後半～18世紀前半の肥前産染付であると考えられる。

金属製品（第43図、写真図版34～36）

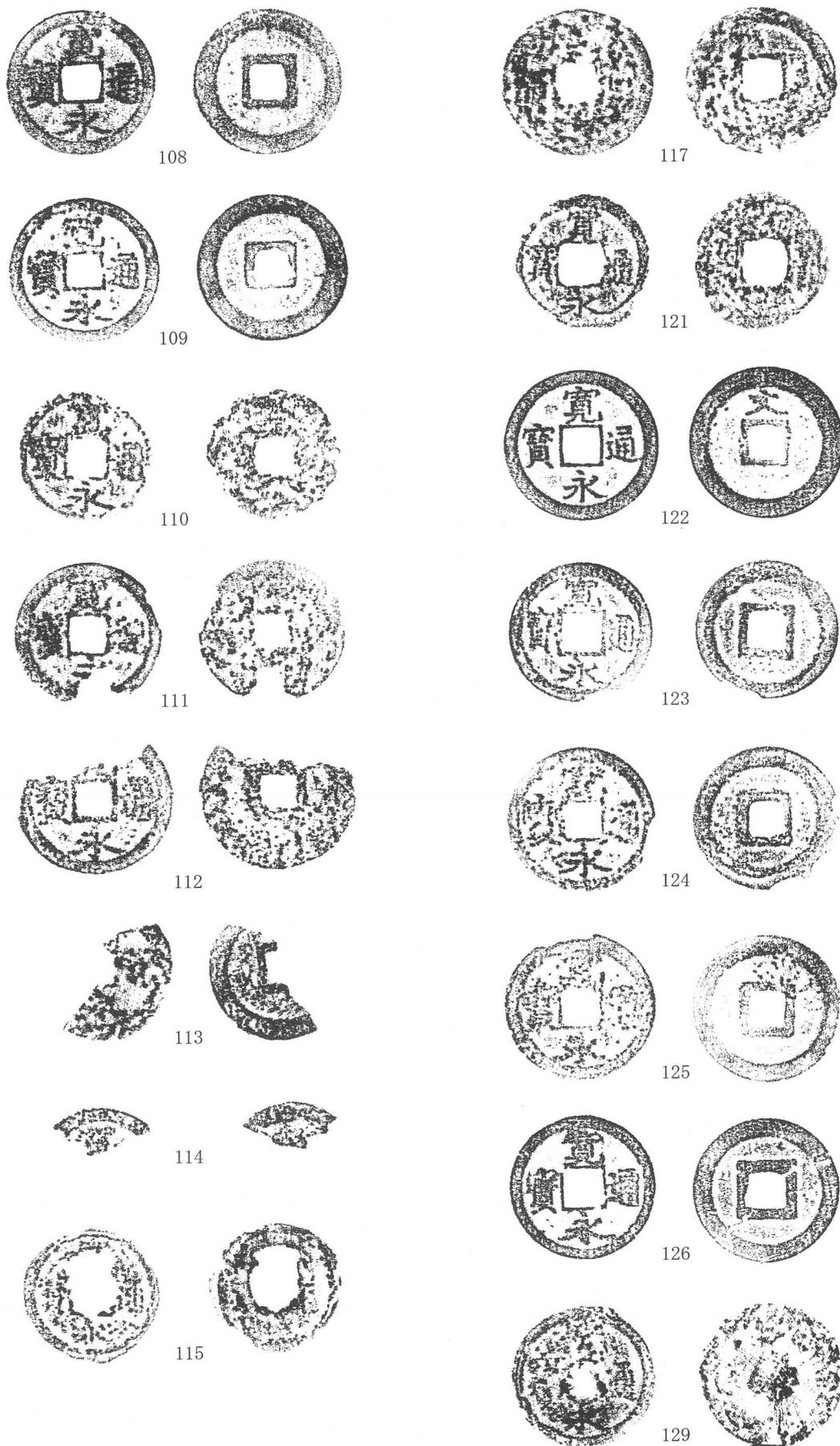
62はS Z 17墓壙より出土した鉄製の小形の刃物である。刃部の薄さを考えると、小柄の刃物である可能性が高い。63はS Z 15墓壙より出土した鉄製刃物である。形状より小形の鎌のようなものであると推測される。64はS Z 07墓壙より出土した鉄製刃物である。形状より鎌のようなものであると推測される。65はS Z 03墓壙より出土した刃物である。刃部先端は欠損しているが、その他の形状より短刀である可能性が高い。66はS Z 18墓壙より出土した刃物である。刃部が短く、刀剣類には分類できない。67～68はいずれも小柄の柄部である。いずれも鉄製の芯部に銅板が巻き付けられており、芯部は鉄製の刃部に接続、あるいは連続するものと思われる。67はS Z 11墓壙より出土した。不鮮明ながら片面には水鳥のような図柄が表現されている。68はS Z 09墓壙より出土した。片面には菊の図柄が表現されている。69はS Z 05墓壙より出土した。他の2点と異なり、表面は全面的に赤銅色であり、図柄等の装飾はみられない。70はS Z 06墓壙埋土上層で磁器と柄鏡とともに出土した鉄製鋏である。柄鏡の上に重なって出土した。いわゆる、和鋏の形態であり、刃部はそれぞれ交差している。71はS



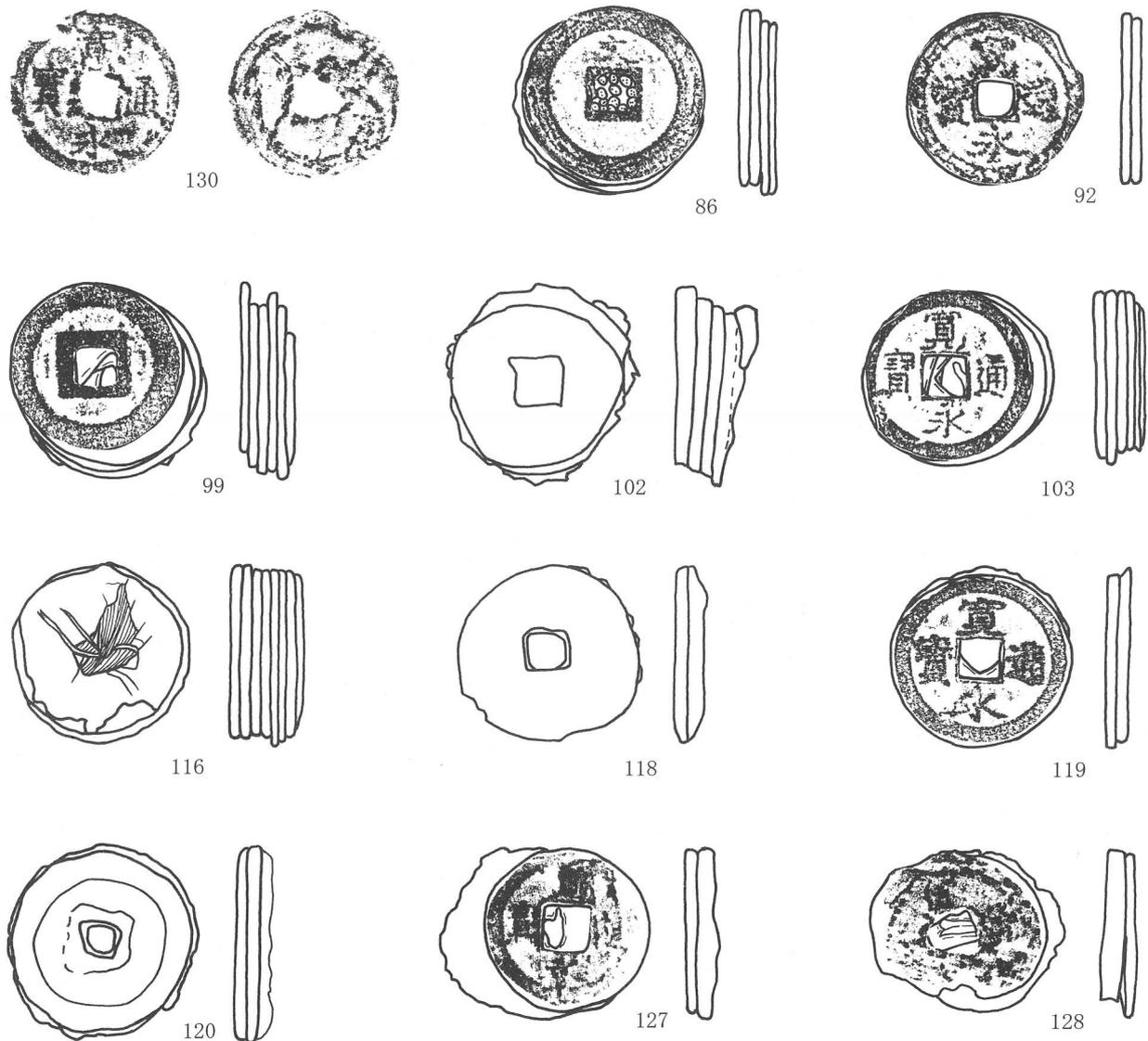
第43図 出土遺物（金属製品）



第44図 出土遺物（銭貨1）



第45圖 出土遺物（錢貨2）



第46図 出土遺物（銭貨3）

Z 06墓壙底面より出土した不明鉄製品である。72はS Z 14墓壙より出土した火打ち金である。「山」形の形状で頂部には円孔がある。73～78は煙管およびその部品である。73と75はS Z 14墓壙より出土しており、同一個体である。74はS Z 09墓壙より出土した竹製の羅宇である。雁首および吸口は残存していないが、色調の違いによりそれぞれが差し込まれていたことが明確である。76はS Z 08墓壙より出土した竹製羅宇とそれに差し込まれた吸口である。遺存状況は良くないが、同じ墓壙より出土した78の雁首はこの煙管と同一個体であると考えられる。77はS Z 11墓壙より出土した。雁首の一部であるとみられるが、他の銅製品の一部であるかもしれない。80はS Z 06墓壙埋土上層で磁器、鉄製鋏と供伴し出土した柄鏡である。銅製で、背面には砂地目に「南天」の図柄が表現されている。また、図柄の左には「藤原定政」と銘がある。柄は比較的細長く、薄いもので、鏡面も直径8.6cmと比較的小さい。このような形態から近世でも前半期の所産と推測される。

漆器（写真図版36）

81～85はいずれも漆器の塗膜片である。木地部分は残存しておらず、非常に脆い状態であるが、破片の湾曲等より椀の塗膜片であると考えられる。82はS Z 15墓壙より出土した椀であり、底部外面の

塗膜片である。底部の直径より一回り小さい直径の朱色の円と、中央に同じく朱色で「叶」と思われる一字が施されている。

銭貨（第44～46図、写真図版37・38）

86～131はすべて銭貨である。大半が近世墓壙の出土資料であるが、100～103についてはS X 05落ち込みより出土したものである。銭文を読むことができる銭貨のうち、95のみ北宋銭の聖宗元寶（1101年初鑄）であるが、その他はすべて寛永通寶である。寛永通寶には古寛永（1636年初鑄）、文銭（1668年初鑄）、新寛永（1677年初鑄）があり、S X 05落ち込み出土の銭貨には寛永鉄銭（1739年初鑄）が混在している。墓壙に納められた副葬銭が主であるが、墓壙内より出土する副葬される枚数は定まっていない。

その他（写真図版38～40）

132はS Z 02墓壙底面棺箱底板直上より出土した布片である。木綿の布であると考えられる。原色は保持されていないと思われるが、格子状の柄が微かにみられるため緋の着物などの端布であると想定される。133はS Z 02墓壙底面棺箱底板直上より出土した木製の数珠である。大小不揃いの17個の簡素な玉から成り、いずれも中央に穿孔がなされている。形状は球状ではなく、穿孔面に端面を持つ。それぞれは、本来紐で繋がっていたものとみられるが、紐は切れてしまっている。134はS Z 02墓壙底面棺箱底板直上より出土した堅果類の種実である。トチとハシバミの2種で構成されており、いずれも外皮のみ良好に残存する。埋葬時に棺内へ入れられた供物であると考えられる。その他食物が入られ、たまたまこの2種が残ったのか、当初よりこの2種のみが入れたのかは判断できない。135はA Z 08墓壙最下層から出土したガラス製の玉である。直径4mmの不整な円形であり、中央に1mmの孔が認められる。色調は光沢のある緑色であるが、細かな白い筋が認められる。これは、ガラスに不純物が多く含まれているためかもしれない。136はS Z 11墓壙底面付近より出土した貝製と思われる玉である。やや潰れた球形であり、貫通する穿孔1箇所と、これに直行する貫通していない穿孔が1箇所ある。全体的に白い色調であるが、やや濁っており透明度はやや低い。しかし、真珠のような光沢があるわけではない。137はS Z 05墓壙より出土した棺箱の底板である。材質はスギであると思われる。側板が付けられる位置には3箇所が釘孔がみられ、2箇所に木製の釘が残存している。138・139はS Z 06墓壙底面より出土した棺箱の底板である。137同様、これらにも釘孔が認められ、1箇所で木製の釘を確認した。すべての釘孔には、同じように木製の釘が打ち込まれていたものと考えられる。

第1表 掲載遺物一覧(土器)

No	種別	器種	出土遺構	寸法 (cm・最大)				特徴	備考
				器高	口径	底径	器厚		
1	縄文土器	深鉢	遺物包含層2～3層	(5.5)	-	-	0.8	尖底、繊維少量、縄文	
2	縄文土器	深鉢	遺物包含層3層	(7.6)	-	-	0.8	尖底、繊維少量、地文不明	
3	縄文土器	深鉢	遺物包含層を切る攪乱	(7.4)	-	-	0.8	尖底、撚糸文?	
4	縄文土器	深鉢	遺物包含層2～3層	(7.6)	-	-	1.0	口縁部、繊維少量、縄文(LR1?)	
5	縄文土器	深鉢	遺物包含層2層	(5.0)	-	-	0.7	口縁部、繊維少量、縄文(LR)	
6	縄文土器	深鉢	遺物包含層2層	(8.1)	-	-	0.9	口縁部、繊維多量、撚糸文	
7	縄文土器	深鉢	遺物包含層2層	(6.4)	-	-	0.9	口縁部、繊維多量、	
8	縄文土器	深鉢	遺物包含層3層	(8.5)	-	-	1.2	口縁部、繊維多量	
9	縄文土器	深鉢	遺物包含層2層	(5.0)	-	-	0.8	縄文(LR)	
10	縄文土器	深鉢	遺物包含層2層	(5.2)	-	-	1.0	縄文(RL?)	
11	縄文土器	深鉢	遺物包含層層位不明	(5.8)	-	-	1.2	縄文(LR)	
12	縄文土器	深鉢	遺物包含層3層	(6.4)	-	-	0.9	縄文(RL)	
13	縄文土器	深鉢	遺物包含層表土	(6.8)	-	-	1.0	縄文(結束羽状)	
14	縄文土器	深鉢	遺物包含層層位不明	(3.9)	-	-	1.2	圧痕文あり、縄文(RL)	
15	縄文土器	深鉢	遺物包含層2層	(6.6)	-	-	1.0	縄文(LR)	
16	縄文土器	深鉢	遺物包含層層位不明	(7.2)	-	-	0.8	縄文(結束羽状?)	
17	縄文土器	深鉢	遺物包含層1層	(10.4)	-	-	1.0	縄文(LR)	
18	縄文土器	深鉢	遺物包含層2～3層	(7.8)	-	-	1.0	縄文(結束あり)	
19	縄文土器	深鉢	遺物包含層3層	(6.4)	-	-	0.4	地文(撚糸)	
20	縄文土器	深鉢	遺物包含層2層	(6.0)	-	-	0.8	平行沈線	
21	縄文土器	深鉢	遺物包含層1層	(3.8)	-	-	0.4	口縁突起	
22	縄文土器	浅鉢	遺物包含層2層	(5.4)	-	-	0.9	平行沈線	
23	縄文土器	小形鉢	遺物包含層2層	(2.9)	-	-	0.5	縄文(RL)	
53	土師器	坏	焼土	[3.9]	[13.0]	[5.6]	0.5	ロクロ・内面ミガキおよび黒色処理	
54	土師器	甕	焼土	(0.7)	[17.8]	-	0.7	ロクロ・ヘラケズリ	
55	土師器	甕	焼土	(4.2)	-	-	0.8	非ロクロ・ヘラケズリ	

*寸法欄の数値は、()のものが残存値、[]のものが復元値である。

第2表 掲載遺物一覧（石器・石製品・土製品）

No	種別	器種	出土遺構	寸法 (cm・g)				特徴	備考
				長さ	幅	厚さ	重量		
24	剥片石器	石匙	遺物包含層3層	(9.6)	2.1	1.0	18.95	頁岩	
25	剥片石器	石匙	遺物包含層2層	8.3	3.3	1.3	20.92	頁岩	
26	剥片石器	石匙	遺物包含層2層	(4.9)	3.5	1.3	14.72	頁岩	
27	剥片石器	石匙	遺物包含層2層	(5.0)	2.4	0.6	6.03	頁岩	
28	剥片石器	石匙	遺物包含層を切る攪乱	(6.2)	2.2	1.0	12.06	頁岩	
29	剥片石器	石匙	遺物包含層2～3層	2.9	(5.7)	1.0	12.06	頁岩	
30	剥片石器	石匙	遺物包含層2層	3.1	(4.3)	0.5	4.04	頁岩	
31	剥片石器	石匙	遺物包含層1層	5.9	2.2	0.9	9.4	頁岩	
32	剥片石器	石匙	遺物包含層2～3層	6.0	1.9	0.9	9.7	頁岩	
33	剥片石器	石匙	遺物包含層2層	3.7	4.8	1.1	10.28	頁岩	
34	剥片石器	石匙	遺物包含層2～3層	(3.6)	2.4	0.9	6.8	頁岩	
35	剥片石器	石匙	遺物包含層検出面	3.7	4.5	0.8	10.47	頁岩（乳白色、凝灰岩質）	
36	剥片石器	石匙	遺物包含層直上表土	2.7	4.5	0.7	5.03	頁岩	
37	剥片石器	搔器	遺物包含層3層	4.4	2.2	1.0	6.89	頁岩	
38	剥片石器	搔器	遺物包含層を切る攪乱	3.6	2.1	1.05	8.22	頁岩	
39	剥片石器	石匙？	遺物包含層検出面	(2.6)	1.7	0.7	1.44	頁岩	
40	剥片石器	不明	遺物包含層1層	(2.7)	1.9	0.45	2.37	頁岩	
41	剥片石器	搔器	遺物包含層2～3層	1.9	1.6	0.4	0.35	頁岩（赤色）	
42	剥片石器	石鏃	遺物包含層2層	2.3	1.7	0.5	1.24	頁岩	
43	剥片石器	石鏃	遺物包含層	2.2	1.4	0.4	0.57	頁岩（乳白色、凝灰岩質）	
44	剥片石器	石鏃	遺物包含層を切る攪乱	(2.6)	(1.7)	0.3	0.78	頁岩（乳白色、凝灰岩質）	
45	剥片石器	石鏃	遺物包含層3層	2.0	1.4	0.3	1.89	頁岩（赤色）	
46	剥片石器	石鏃	遺物包含層	(2.1)	1.6	0.4	0.92	頁岩（乳白色、凝灰岩質）	
47	剥片石器	石鏃	遺物包含層1層	(2.4)	2.1	0.6	1.89	頁岩（乳白色、凝灰岩質）	
48	剥片石器	石鏃	遺物包含層検出面	(4.0)	1.6	0.7	3.98	頁岩	
49	剥片石器	石鏃	遺物包含層検出面	(4.6)	1.4	0.7	3.03	頁岩（北上山地？）	
50	礫石器	石斧？	遺物包含層3層	(13.6)	3.0	2.3		頁岩	
51	石製品	石棒	遺物包含層検出面	(13.2)	5.8	2.5		頁岩（北上産地？）	両端部欠損
52	土製品	土偶	遺物包含層2～3層	(5.0)	(1.6)	1.0	6.69	肩～首にかけての破片。 連続する円形の文様。	

*寸法欄の数値は、() のものが残存値、[] のものが復元値である。

第3表 掲載遺物一覧（陶磁器）

No	種別	器種	出土遺構	寸法 (cm・最大)				特徴	備考
				器高	口径	底径	器厚		
56	染付	碗	SD07埋土上層	(3.1)	-	[4.4]	0.7	外面に草花文、見込みは環状に釉掻き取り。	肥前産?
57	陶器	碗	東側調査区表土層	(1.5)	-	(4.4)	0.6	内面のみに褐色の鉄釉。	大堀・相馬産?
58	陶器	天目茶碗	SD01埋土上層	(3.9)	-	-	0.6	光沢のある黒色の釉。	瀬戸・美濃産
59	磁器	皿	調査区東側表土層	(3.2)	[13.0]	-	0.6	高台付近以外は内外面ともに厚く淡緑色の釉。	肥前産?
60	陶器	鉢	調査区東側表土層	5.2	-	-	0.8	被熱のため器表面荒れ気味。	産地不明
61	陶器	碗	SX05埋土	(3.3)	[8.2]	-	0.5	濃緑色の釉。	大堀・相馬産
79	磁器 (染付)	碗	SZ06埋土上層 (鉄製鉢・柄鏡と供伴)	4.1	6.8	3.0	1.0	外面には簡素な草花文、全面透明釉。	肥前産

第4表 掲載遺物一覧（金属製品）

No	種別	器種	出土遺構	寸法 (cm・g)				特徴	備考
				長さ	幅	厚さ	重量		
62	鉄製品	小刀	SZ17最下層	(9.7)	1.6	0.7	8.2	薄い刃部、鋭利な刃先。	小柄の刃部?
63	鉄製品	鎌?	SZ15底面	(7.7)	2.6	0.7	10.9	形状不明瞭な刃物類。	
64	鉄製品	鎌	SZ07底面	(10.2)	4.3	0.8	25.1	形状不明瞭な刃物類。	
65	鉄製品	短刀	SZ03埋土最下層	(20.3)	4.7	0.9	86.4	刃先欠損。	
66	鉄製品	包丁?	SZ18底面	(10.2)	3.9	0.7	18.1		
67	銅製品	小柄	SZ11棺底	(11.8)	1.6	0.5	27.5	鳥の図柄。	
68	銅製品	小柄	SZ05底面	(10.0)	3.1	0.5	39.5	菊の図柄。	
69	銅製品	小柄	SZ09底面	(12.6)	(2.2)	0.4	14.7	図柄なし。赤茶色を呈する。	
70	鉄製品	和鋏	SZ06上層	(11.0)	2.7	0.7	18.4	先端部欠損。	
71	鉄製品	火打金?	SZ06底面	(9.1)	3.0	0.7	13.5	木質部残存するが鉄製部分はほとんど欠損。	
72	鉄製品	火打金	SZ14底面	(2.5)	(5.5)	0.5	8.2		
73	煙管	雁首～羅宇	SZ14底面	(9.6)	2.3	1.0	9.9		75と同一個体?
74	煙管	羅宇	SZ09底面	(11.0)	0.8	0.8	3.3		78と同一個体?
75	煙管	吸口～羅宇	SZ14底面	(8.8)	1.1	1.1	5.7		73と同一個体?
76	煙管	吸口～羅宇	SZ08底面	(5.3)	1.0	-	3.4		
77	煙管?	火皿	SZ11棺底	(2.0)	2.0	-	3.2		
78	煙管	火皿	SZ08底面	(1.2)	-	-	1.3		74と同一個体?
80	銅製鏡	柄鏡	SZ06上層	(14.7)	8.5	0.4	45.4	背面に図柄「砂地目」「南天図」、銘「藤原定政」	

*寸法欄の数値は、() のものが残存値、[] のものが復元値である。

第5表 掲載遺物一覧（銭貨1）

No	種別	銭種	出土遺構	寸法 (cm・g)				特徴	備考
				縦	横	厚さ	重量		
86	銅銭	寛永通寶	SZ01	2.7	2.6	1.1	12.9	文銭1枚・不明3枚	全4枚
87	銅銭	寛永通寶	SZ01	2.45	2.45	-	2.7	新寛永	
88	銅銭	寛永通寶	SZ02	2.4	2.4	-	2.4	古寛永	
89	銅銭	寛永通寶	SZ02	2.35	2.36	-	1.1	古寛永	
90	銅銭	寛永通寶	SZ02	2.3	2.3	-	2.1	古寛永	
91	銅銭	寛永通寶	SZ02	(2.2)	(2.1)	-	0.8	古寛永	
92	銅銭	寛永通寶	SZ04	2.5	2.45	0.3	3.9	古寛永	
93	銅銭	寛永通寶	SZ04	2.35	2.35	-	2.2	古寛永	
94	銅銭	寛永通寶	SZ04	(2.0)	(2.1)	-	1.1	新古不明	
95	銅銭	寛永通寶	SZ04	(2.2)	(1.55)	-	0.9	新古不明	
96	銅銭	聖宗元寶	SZ05底面	2.5	2.5	-	2.4	北宋銭	
97	銅銭	寛永通寶	SZ05底面	(2.25)	(2.3)	-	2.5	新寛永	
98	銅銭	寛永通寶	SZ05底面	2.15	2.1	-	1.5	新寛永	
99	銅銭	寛永通寶	SZ05底面	2.8	2.7	1.75	15.4	新寛永2枚・古寛永1枚・ 文銭1枚・不明2枚	全6枚
100	銅銭	寛永通寶	SZ05	2.4	2.4	-	3.3	新寛永	
101	銅銭	銭文不明	SZ05	-	-	-	1.6		
102	銅銭	銭文不明	SZ05	3.7	2.7	1.2	10.5		
103	銅銭	寛永通寶	SZ06	2.5	2.65	0.7	12.0	新寛永4枚（うち背文 「元」銭1枚）	全4枚
104	銅銭	寛永通寶	SZ08底面	2.4	2.35	-	1.5	新寛永	
105	銅銭	寛永通寶	SZ08底面	2.4	2.3	-	2.0	古寛永	
106	銅銭	寛永通寶	SZ08底面	2.4	2.4	-	1.8	新寛永	
107	銅銭	寛永通寶	SZ08	(2.1)	[2.1]	-	1.2	新寛永	
108	銅銭	寛永通寶	SZ09底面	2.4	2.4	-	2.6	古寛永	
109	銅銭	寛永通寶	SZ09底面	2.4	2.4	-	3.3	古寛永	
110	銅銭	寛永通寶	SZ09	(2.2)	[2.3]	-	1.3	古寛永	
111	銅銭	寛永通寶	SZ09	[2.3]	2.35	-	1.7	古寛永	
112	銅銭	寛永通寶	SZ09	(1.8)	(2.4)	-	1.5	古寛永	
113	銅銭	寛永通寶	SZ09	(1.9)	(1.4)	-	1.2	新古不明	
114	銅銭	銭文不明	SZ09	(0.75)	(0.5)	-	0.3		
115	銅銭	銭文不明	SZ12	2.2	2.2	-	1.6		
116	銅銭	寛永通寶	SZ13	2.6	2.4	1.0	18.7	新寛永1枚・新古不明1 枚・銭文不明5枚	全8枚

*寸法欄の数値は、() のものが残存値、[] のものが復元値である。

第6表 掲載遺物一覧（銭貨2）

No	種別	銭種	出土遺構	寸法				特徴	備考
				縦	横	厚さ	重量		
117	銅銭	銭文不明	SZ14底面	2.4	2.4	-	2.2		
118	銅銭	寛永通寶	SZ14底面	2.5	2.5	0.4	2.8	古寛永	
119	銅銭	寛永通寶	SZ14底面	2.6	2.5	0.3	2.6	新古不明	
120	銅銭	寛永通寶	SZ14底面	2.6	2.7	0.5	6.3	新古不明	
121	銅銭	寛永通寶	SZ17最下層	(2.2)	(2.1)	-	0.8	新寛永	
122	銅銭	寛永通寶	SZ17最下層	2.5	2.5	-	2.5	新寛永	
123	銅銭	寛永通寶	SZ17最下層	2.3	2.3	-	2.5	新寛永	
124	銅銭	寛永通寶	SZ17最下層	2.4	2.4	-	2.3	古寛永	
125	銅銭	寛永通寶	SZ17最下層	2.4	2.4	-	2.2	古寛永	
126	銅銭	寛永通寶	SZ17	2.4	2.35	-	1.6	古寛永	
127	銅銭・鉄銭	寛永通寶	SX05埋土	2.9	2.4	0.5	4.9	鉄寛永1枚・新寛永1枚	全2枚
128	銅銭	寛永通寶	SX05埋土	2.7	2.7	0.5	2.2	新寛永	
129	銅銭	寛永通寶	SX05埋土	2.3	2.3	-	1.8	新古不明	
130	銅銭	寛永通寶	SX05埋土	2.3	2.3	-	4.1	新古不明	

第7表 掲載遺物一覧（その他）

No	種別	細分・材質	出土遺構	寸法	特徴	備考
81	漆器塗膜片	椀	SZ18底面	不明	体部下半外面の塗膜（黒）。	
82	漆器塗膜片	椀	SZ15底面	直径3.7cm	底部外面の塗膜。朱色の円の中に朱色で「叶」の字。	
83	漆器塗膜片	椀	SZ15底面	不明	内面の塗膜（朱）。	
84	漆器塗膜片	椀	SZ17底面	不明	内面の塗膜（朱）。	
85	漆器塗膜片	椀	SZ17底面	不明	内面の塗膜（朱）。	
132	着物端布？	木綿	SZ02棺底板直上	最長のものが4.5cm	緋の着物のような格子状の柄があるが不鮮明。	
133	数珠	木製	SZ02棺底板直上	最大のものが直径1.0cm、最小のものが直径0.5cm	17個の不揃いの玉。部分的に紐が残存する。	
134	種実	堅科類	SZ02棺底板直上	トチは平均2.5cm大、ハシバミは平均1.0cm大	トチ、ハシバミの実2種で構成される。	副葬された供物か？
135	玉	ガラス製	SZ08最下層	直径4mm、孔の直径1mm	緑色に白い筋。中央に孔がある不整な球状。	
136	玉	貝製？	SZ11底面付近	直径1.2cm、厚さ0.9cm、貫通孔直径1mm	2方向から穿孔、1方向は貫通していない（径2.5mm）。	濁った白色
137	棺箱底板	スギ？	SZ05底面	最大長（12.5）cm、最大幅（8.6）cm、厚さ0.9cm	3箇所釘孔。2箇所は木製の釘が残存。	
138	棺箱底板	スギ？	SZ06底面	最大長（18.5）cm、最大幅（13.4）cm、厚さ1.0cm	1箇所に釘孔があり、木製の釘が残存。	139と同一底板
139	棺箱底板	スギ？	SZ06底面	最大長（43.2）cm、最大幅（21.4）cm、厚さ1.0cm	4箇所に釘孔があるが、釘は残存せず。	138と同一底板

*寸法欄の数値は、（ ）のものが残存値、[]のものが復元値である。

V 総 括

1 縄 文 時 代

(1) 遺 構

今回の調査で縄文時代の遺構は検出されなかったが、東端の斜面で遺物包含層を確認した。これについては、IV章で述べたように多くの遺物が出土し、縄文時代早期末～前期初頭を中心とする土器および縄文時代晩期の遺物がみられることから、これらの時期に該当する集落が近くに存在したものと考えられる。

遺物包含層はおおむね3層に分層可能であり、1層は暗褐色シルト、2層は黒色シルト、3層は褐色シルトである。検出面も含め1～2層は晩期の遺物を下限とし、3層は縄文時代早期末～前期初頭の遺物を下限とする。火山灰等が確認できなかったため土層そのものの堆積年代は特定できないが、現段階では土器群が指し示す年代を堆積年代として考えたい。

今回の調査区より東2kmに位置する綾織新田遺跡は、縄文時代前期前葉の大集落であることが判明している。今回の調査で、この綾織新田遺跡と同じ時期の遺構・遺物は検出されなかったが、それ以前の縄文時代早期末～前期初頭頃の集落がこの向Ⅱ遺跡周辺に近在することが推測される。

(2) 遺 物

先述した通り、遺物包含層より縄文土器が出土した。土器は早期末～前期初頭を中心とする土器群と縄文時代晩期を中心とする土器群に分けられる。

縄文時代早期末～前期初頭の土器群を概観すると、確実に尖底であるものが3点あり、文様、胎土、形態などから口縁部でも尖底土器になりそうなものも存在し、これらは八戸市赤御堂貝塚で見られる早期末の資料に近い。この時期の土器について遠野市内では、権現前遺跡や九重沢遺跡で良好な資料が出土しており、これらとの対比が可能である。今回の調査では微細な破片も含め、表裏縄文が施された土器は出土していない。縄文時代前期初頭の土器は、大木1式と考えられるものが一定量含まれていると考えられる。これらは結束が入り、羽状縄文が認められるものである。

これらを比較すると尖底土器あるいは尖底土器と想定される土器については、肉眼で認められる繊維が少ない傾向にあり、前期初頭と考えられる土器は繊維が顕著に目立つ傾向がある。これに関しては、繊維の量ではなく、種類や混入方法の違いにも要因が求められる可能性もあるが、一見して違いが判別できる。また、胎土や色調にも違いが認められ、出土層位で新旧は判断できなかったものの早期末に属する一群と前期初頭に属する一群とに分離可能である。

2 古 代

(1) 遺 構

古代の遺構と考えられるものは堅穴住居と焼土遺構である。堅穴住居は遺物が出土しなかったが遺構の特徴から古代であると判断した。S I 01堅穴住居は壁際に礫が「コ」の字形に並べられている。このような特異な状況の類例はなく、どのような意図で礫が配されたのか不明である。しかし、床面にある柱穴のうち、礫がはいされている壁側の2本は礫を除去して初めて姿を現す。このことから堅

穴住居廃絶後（少なくとも上屋の無い状態）配されたものであることがわかった。したがって、現時点ではこの竪穴住居廃絶に伴う祭祀行為である可能性を提示しておきたい。周辺も含め奈良時代の遺物がみられないことから平安時代の遺構である可能性が高く、今後、平安時代の住居廃絶に伴う祭祀行為について同様の類例を探りたい。

また、平安時代の土師器を伴う焼土遺構を検出したが、その機能については明らかにできなかった。これら焼土は掘り込みを伴わないため、想定される遺構の種類としては、鍛冶関連遺構、土器焼成遺構などが挙げられるが、それを明確に根拠付ける鍛造剥片や焼成粘土塊（焼成不良土器を含む）などがみられない。したがって、今回の調査では何らかの焼成を伴う平安時代の遺構であること以上は言及できない。

（2）遺物

出土した古代の遺物はすべて焼土遺構に伴うものである。すべて土師器であり、ロクロが用いられている坏と甕があることから平安時代の土師器である。坏は底部から体部下端にかけて再調整が施され、器高も比較的安く丁寧な作りである。土師器甕はロクロが用いられているものと非ロクロのものがあり、ロクロのものは体部に丸みがある。これらのみで詳細な時期を特定できないが、おおむね9世紀代の中に収まるものと考えられる。

3 近世

（1）屋敷

検出した掘立柱建物は、比較的大きな建物であったと考えられるが、時期を特定し得る出土遺物がない。柱穴から出土する微細な陶磁器片はあったが、近世であることよりさらに時期を絞り込むことは難しい。また、建物周辺の表土などから出土した関連すると思われる遺物も微細な陶磁器片である。その中で時期がわかるものはいずれも18世紀代の陶磁器類であることから、現時点では建物もこの時期である可能性を考えている。掘立柱建物であることは礎石建物が隆盛する以前であると考えられるため、やはり陶磁器から得られる年代観と矛盾しない。また、遠野地方の近世民家では曲屋構造が多くみられ直屋は少ないが、今回検出したS B01掘立柱建物は曲屋ではなく直屋である可能性が高い。ここからは推測になるが、18世紀半ば頃に成立すると考えられている曲屋建築が誕生する以前の直家建築であるのかもしれない。また、一関市に保存されている鈴木家（18世紀前半）は桁行16m、梁行9mの規模であり、S B01掘立柱建物とほぼ等しい規模である。また、鈴木家は4間取りと当時の民家では大規模農民の建物とすることができる。S B01掘立柱建物も少なくとも3間取り、多ければ4間取りの建物が推定される。鈴木家とこのS B01掘立柱建物は非常に近い規模の掘立柱建物であったと考えられる。次に屋敷地では、S B01掘立柱建物の南側と北側を溝によって区画されているため、屋敷地内にはこの1棟の建物が建っていたものとみられる。ただし、礎石建物が存在し、なおかつその遺構が残存していない可能性もある。この建物は東正面の南北棟と推測されるが、入り口および玄関は、床東部分のない北端が考えられる。

では、建物の所有者（家主）はどのような人物であったのであろうか。これについても考古学的知見から推測することは、現段階では困難である。遠野地域の武士住宅について分析した佐藤巧は、家中・在郷も含め一般農民の民家と中～下級武士の居宅に大きな差がないことを指摘しており、住居の規模や間取り等に身分が表出しないようである。また、18世紀中頃に書かれた『遠野旧事記』による

と、近世初頭には下級武士の家が未だ掘立柱建物であったことが記されている。このことから、18世紀中頃までは大半の建物が掘立柱建物であったと推測される。さらに、溝で区画された屋敷に規模の比較的大きな掘立柱建物が存在することを考えると、農民身分としてもやや優位な立場にあった人の住まいであったのかもしれない。

(2) 近 世 墓

今回の調査では18基の近世墓を検出した。出土した寛永通寶から導き出すことができる時期区分は、古寛永のみで構成される墓、文銭～新寛永で構成される墓、古寛永～新寛永で構成される墓などがある。各種寛永通寶の組み合わせでは、銭文の不明なものが多く含まれているため正確な時期を捉えることは難しいが、おおまかに古寛永初鑄の1636年以降、鉄寛永が鑄造される1739年まで頃の墓とみられる。鉄寛永はたまたま含まれていないだけで、1739年以降の墓が含まれている可能性もあるが、およそ100～150年間の墓地であるとみられる。仮に1世代50年とした場合、2～3世代に渡る墓群であるものと想定される。調査区外にも続いている可能性があるため18基が墓群すべてではないと考えられる。

墓壇は規模からおおよそ2つに分類できる。2種は、それぞれ規模が大きいものと規模が小さいものである。規模の小さいものは5基と少なく、S Z 03・07・15・17・18墓壇が該当する。その他はすべて規模の大きいものである。これら規模の大小は埋葬される遺体そのものの大きさに関わるものであると推測される。大きいものは成人で、小さいものは子供である可能性も考えられるが、S Z 18墓壇など極端に小さい規模の墓壇やS Z 03墓壇など棺箱のサイズがわかるものであってもその長辺が1 m未満のものであるため、仮に幼児であっても埋葬するのは困難ではないかと考える。このことから、これら小規模の墓壇は、火葬骨を納めた墓壇であると考えたい。よって、ここでは大きいものは土葬墓、小さいものは火葬墓と仮定する。遠野における土葬と火葬の習俗について興味深い史料がある。

遠野南部藩綾織の代官で、遠野南部藩6代目信彦の祐筆役であった宇夫方広隆は18世紀中頃に『遠野旧事記』を著し、この中で遠野における死者の埋葬方法について触れている。

それによると、17世紀末までは火葬を主とし、18世紀以降は土葬となった様子が書かれている。要約すると、元禄中頃までは、霊山である早池峰山に火葬をおこなった煙が上るのを忌み嫌い、参詣人がある期間（主に夏期？）は火葬を実施せず、土葬にしたとされている。しかし、その後（18世紀以降？）は全期間、火葬を実施せず土葬をおこなったとされている。この風習は遠野城下のみならず領内の郷まで同じであったようである。なお、成人した広隆自身は土葬の風習が当たり前の時代を生き、火葬を知らない世代であったことも推察できる。このような近世遠野での葬法についてまとめると以下の通りである。

元禄中頃まで（17世紀末）……10月～2月（冬期）は火葬、3～9月（夏期）は土葬。

それ以降（18世紀以降？）……全期間、土葬。

このことから、17世紀末～18世紀にかけて遠野では葬法の変化があり、この時期に火葬・土葬混在期から土葬期へと移行したとみられる。先述した通り、今回調査した近世墓は、墓壇の規模や形態から火葬墓と土葬墓に分けられる可能性がある。これら2種は、それぞれ便宜上土葬墓壇と火葬墓壇と表現する。これらの中には切り合いが認められるものが存在する。葬墓壇S Z 08と土葬墓壇S Z 06は火葬墓壇S Z 07に切られており、土葬墓壇(古)→(新)火葬墓壇の関係である。次に土葬墓壇S Z 13は火葬墓壇S Z 17および火葬墓壇S Z 18を切っており、火葬墓壇(古)→(新)土葬墓壇の関係である。このように、土葬墓壇と火葬墓壇に新旧入り交じった状況がみられることから、土葬と火葬が混在す

る状況であると考えられる。先に挙げた文献を考慮すると、今回の墓壇群の一部は火葬・土葬混在期である17世紀代である可能性が高い。さらに、出土した銭貨からも、この時期で矛盾は生じない。

(3) 遺物

屋敷周辺より出土した陶磁器類は17～18世紀代のものが中心で、近世屋敷の時期を推定する材料の一つである。しかし、少量で遺構に伴うものが少ないため必ずしも掘立柱建物の時期ではないかもしれない。

近世墓からは副葬品として様々な遺物が出土した。銭貨類はその代表であり、寛永通寶を中心とする江戸時代の通貨が墓壇に入れられている。寛永通寶は古寛永が含まれる墓壇と含まれない墓壇があり、鉄寛永は含まれない。副葬された銭貨の枚数には規則性がないことから6枚にこだわらない習俗が考えられる。銭貨以外の副葬品では、煙管・火打ち金など嗜好品、磁器・鏡など化粧品、小柄など刀装具、その他刃物類・漆器碗などの日用品、堅果類など食料としての供物等に分類できる。これらが時代、性別、年齢、家柄等を指し示すものかどうかはわからないが、今後この地域での調査事例が増えれば分析できそうである。

4 最後 に

今回の調査では、縄文時代早期末～前期初頭の集落が近在することを想定した。これは、遺構がみられなかったものの遺物包含層の検出によるものである。また、少量であるが、縄文時代晩期の遺物もの出土したことから、この時期の集落も近在することが予想される。

古代においても遺構・遺物数が少なく、これらが調査区南端に偏在することから集落の縁辺部である可能性が高い。

近世はこの調査区に民家が存在したことがわかった。溝で区画された屋敷地に比較的大きな直家(掘立柱建物)がある。また、屋敷地の南の外れには墓域があり、沢を挟んだ西側には水田が広がる。この状況がすべて同時期とは断定できないが、少なくとも近世のある時期においてはこのような土地利用がなされていたことは確かである。もし、これらがすべて同じ家のものであれば、近世遠野藩綾織村における、ある家の一風景として興味深い資料となるのだが、今回の調査では力及ばすそこまで言及できるものを提示できなかった。今後周辺について書かれた古文書や伝世資料等があれば再検討したい。

全体を通して、調査によって明らかにできなかったことが多々あったが、今後資料の増加によって比較できれば、よりこの地域の歴史的具體像を結ぶことができると思われる。今回はそのための基礎資料と提示ということで最後の言葉としたい。

引用・参考文献

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

2004 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第435集『九重沢遺跡発掘調査報告書』

遠野市教育委員会 2002 遠野市埋蔵文化財調査報告書第13集『新田Ⅱ遺跡』

遠野市教育委員会 1998 遠野市埋蔵文化財調査報告書第11集『甲子遺跡』

遠野市教育委員会 1977 『遠野市史』

佐藤 巧 1978 『近世武士住宅』

小原 六郎 2005 『やさしい遠野旧事記』 岩手県学校生活協同組合

写 真 图 版



調査区遠景（南から）



調査区近景（東から）



調査区現況（東から）



基本層序①（西から）

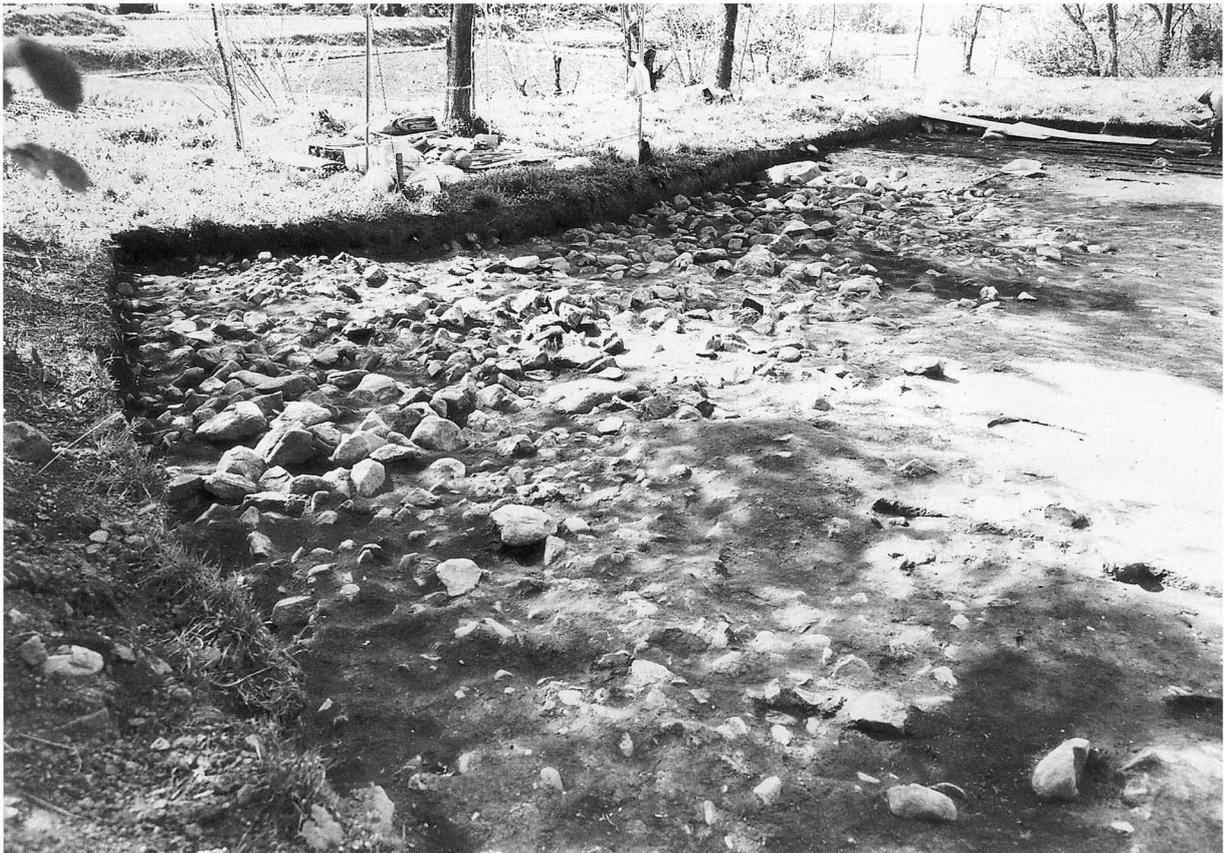


基本層序②（西から）

写真図版2 調査区現況、基本層序(1)



山林部基本層序（西から）



岩塊流（南から）



検出（南から）



断面（南から）

写真図版4 遺物包含層



全景（東から）



断面（東から）



断面（南から）



壁際礫検出（東から）



壁際礫除去後柱穴（南から）



柱穴1断面（南から）



柱穴2断面（東から）



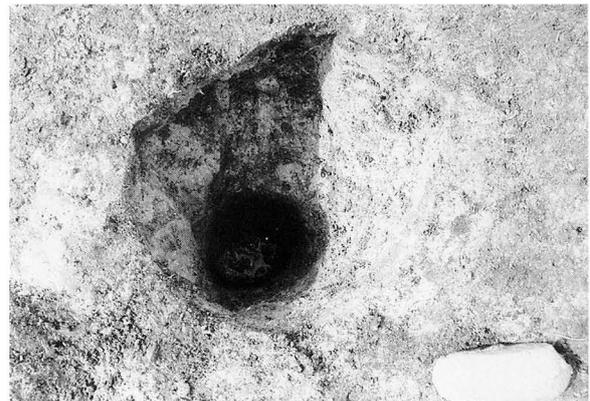
柱穴3断面（東から）



柱穴4断面（東から）



柱穴5断面（東から）



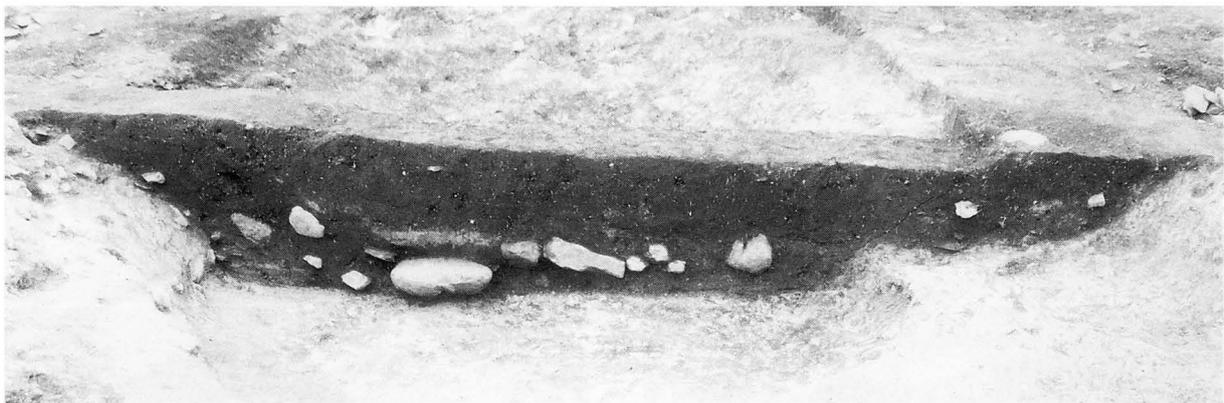
柱穴5（東から）



全景（南から）



SI 02 断面（東から）



SI 02・SX 04 断面（北から）



検出（北から）



SX 01 断面（東から）



SX 02 断面（南から）



SX 03 断面（南から）



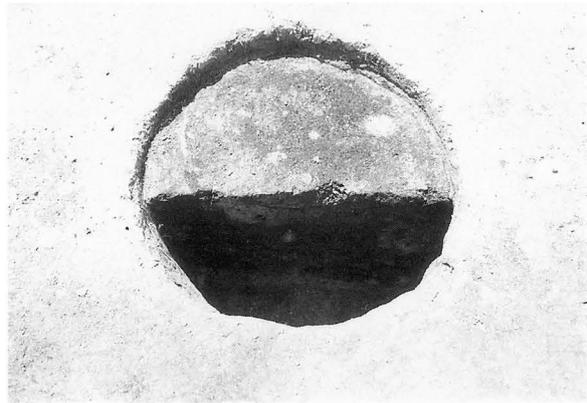
遺物検出作業風景



全景（南から）



P14 断面（南から）



P15 断面（東から）



P17 断面（東から）



P17 全景（南から）



P18 断面 (東から)



P20 断面 (南から)



P22 断面 (南から)



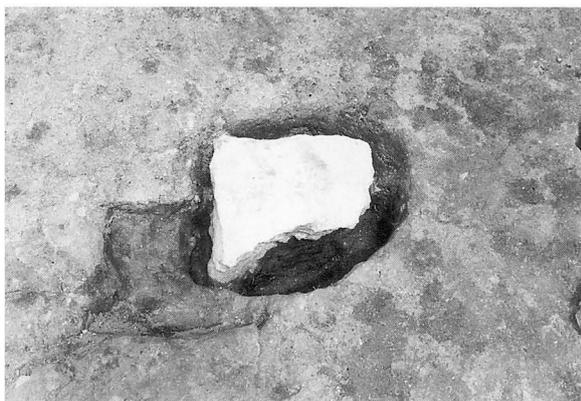
P36 全景 (南から)



SP37 断面 (西から)



P32 断面 (西から)



P37 全景 (南から)



P31 断面 (西から)



SK01 全景 (西から)



SK01 断面 (南から)



SK02 全景 (東から)



SK02 断面 (東から)



SK03・SK04 全景 (南から)



SK03・SK04 断面 (東から)



SK05 全景 (東から)



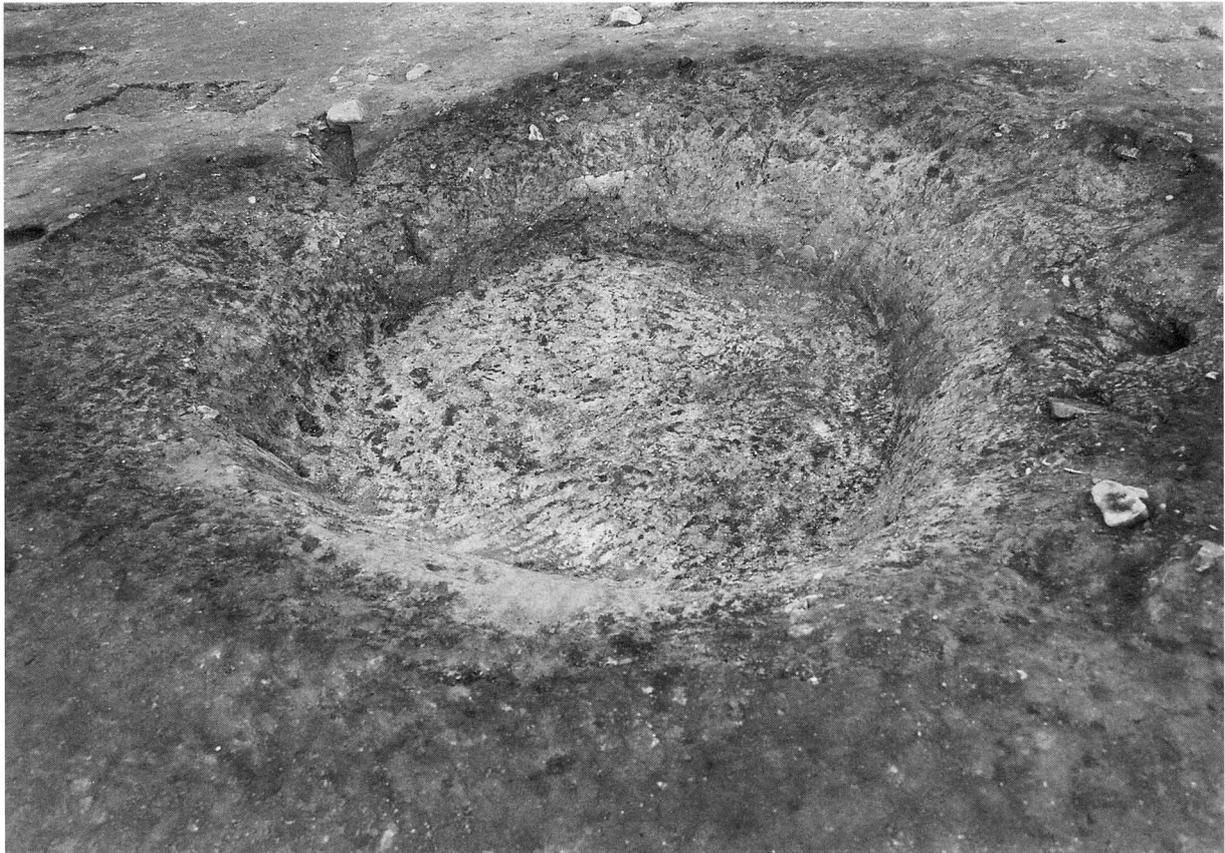
SK05 断面 (東から)



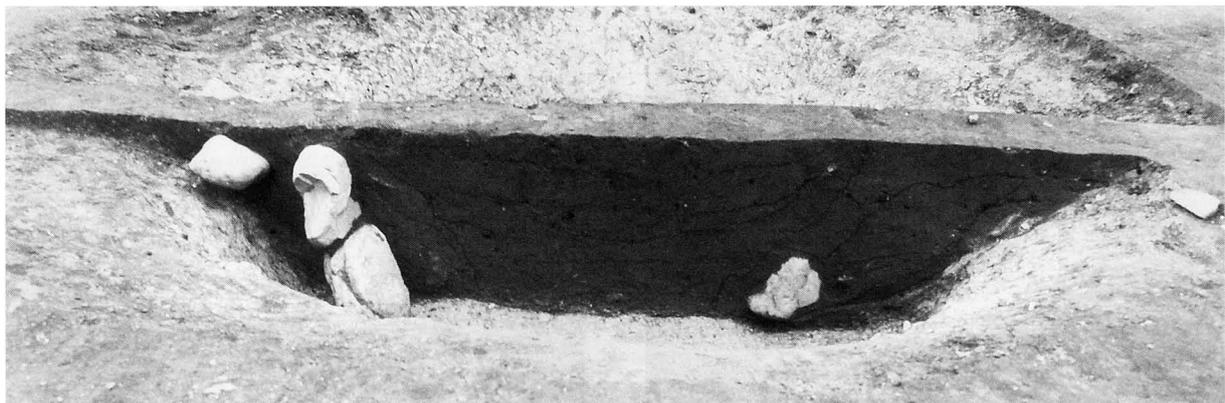
SK07 全景 (東から)



SK07 断面 (東から)



SE01 全景 (南から)



SE01 断面 (南から)



SD01～06 検出（西から）



SD01・02 断面①（東から）



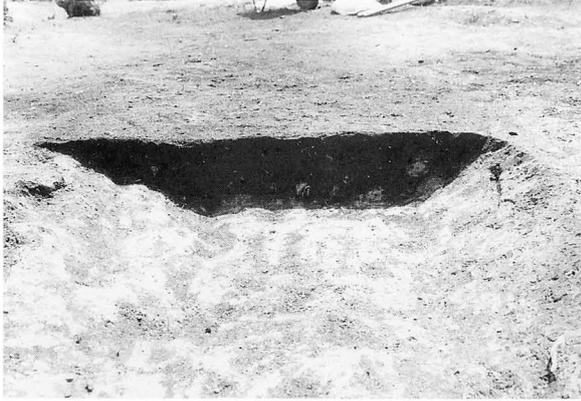
SD01・02 断面②（東から）



SD01・02 断面③（東から）



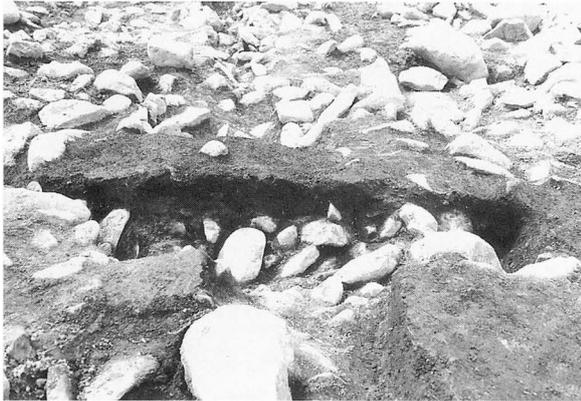
SD03・04 断面（東から）



SD07 断面① (西から)



SD07 断面② (西から)



SD07 断面③ (西から)



SD07 東端部集石 (西から)



SD08 断面 (南から)



SD09 断面 (南から)



SD10 断面 (東から)



作業風景



検出（南東から）



完掘作業（北から）



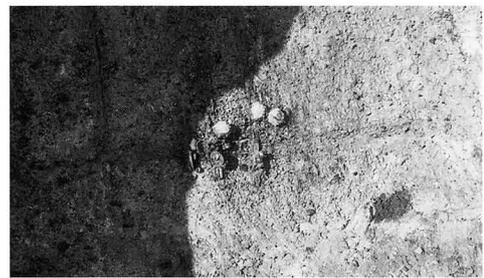
全景（南西から）



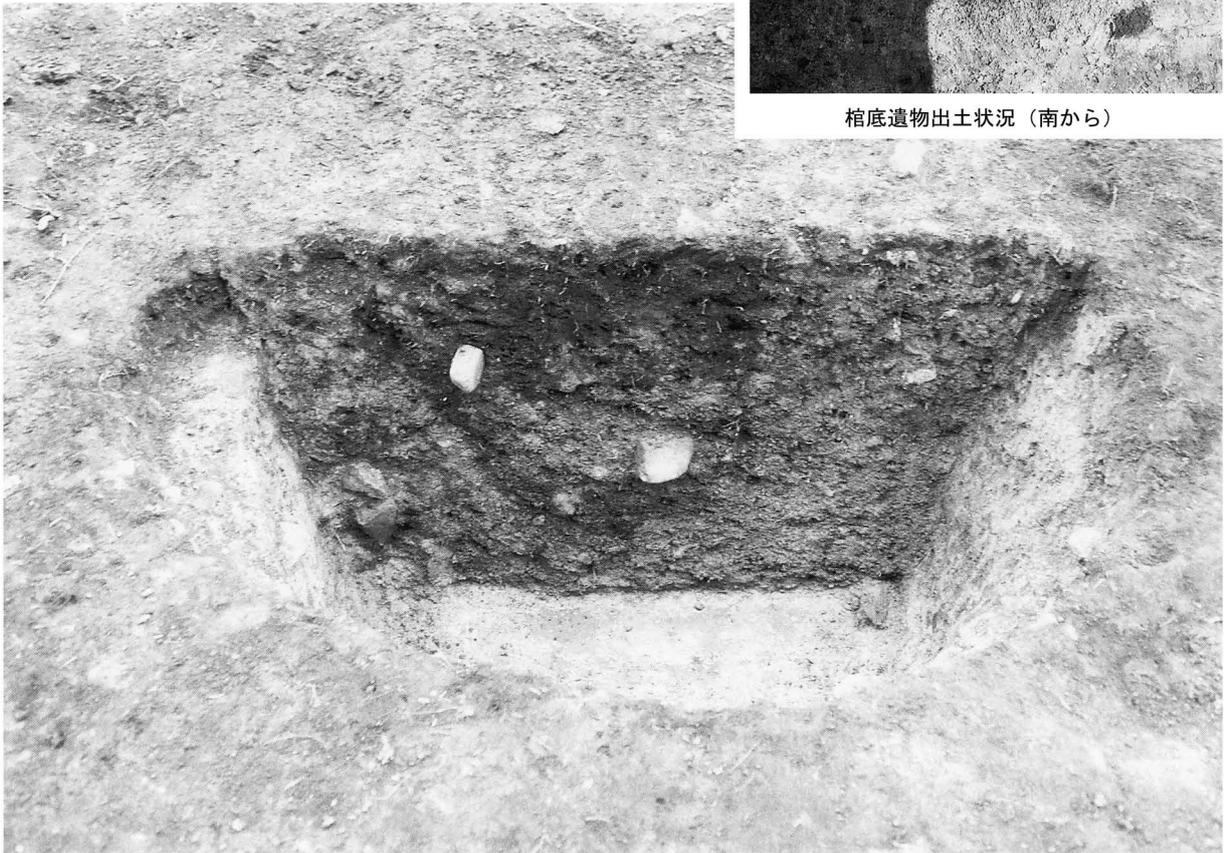
断面（南から）



全景（南から）



棺底遺物出土状況（南から）



断面（南から）



全景（南から）



断面（東から）



SK04 棺底遺物出土状況（南東から）

全景（南から）



断面（南から）



SZ06~08 断面（南から）



SZ06 埋土上層出土遺物（南から）



全景（南から）



断面（南から）



全景（西から）



棺底遺物出土状況（南西から）



断面（南から）



全景（南から）



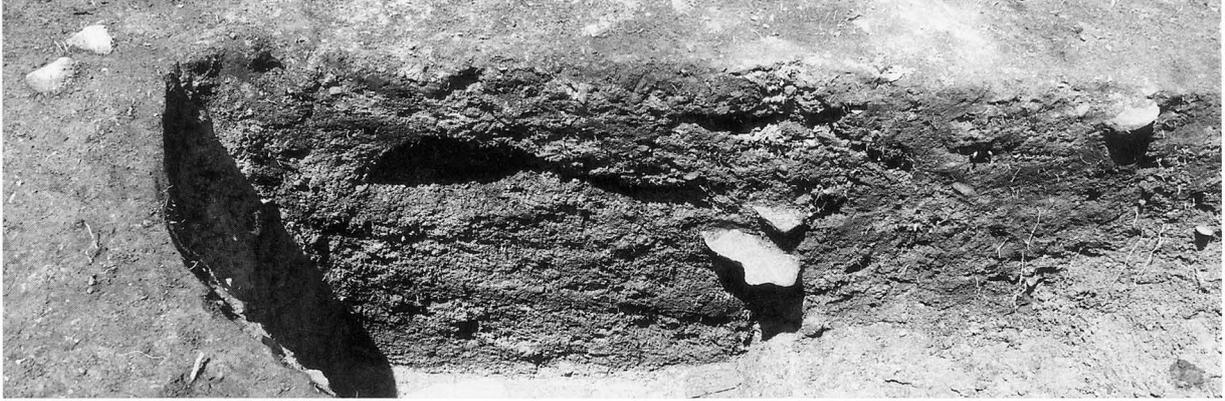
断面（西から）



全景（南から）



断面（南から）



SZ11 断面（東から）



SZ12 断面（東から）



SZ13 断面（東から）



全景（東から）



棺底遺物出土状況（東から）



断面（南から）



全景（東から）



断面（東から）



漆器碗・銭貨出土状況（東から）



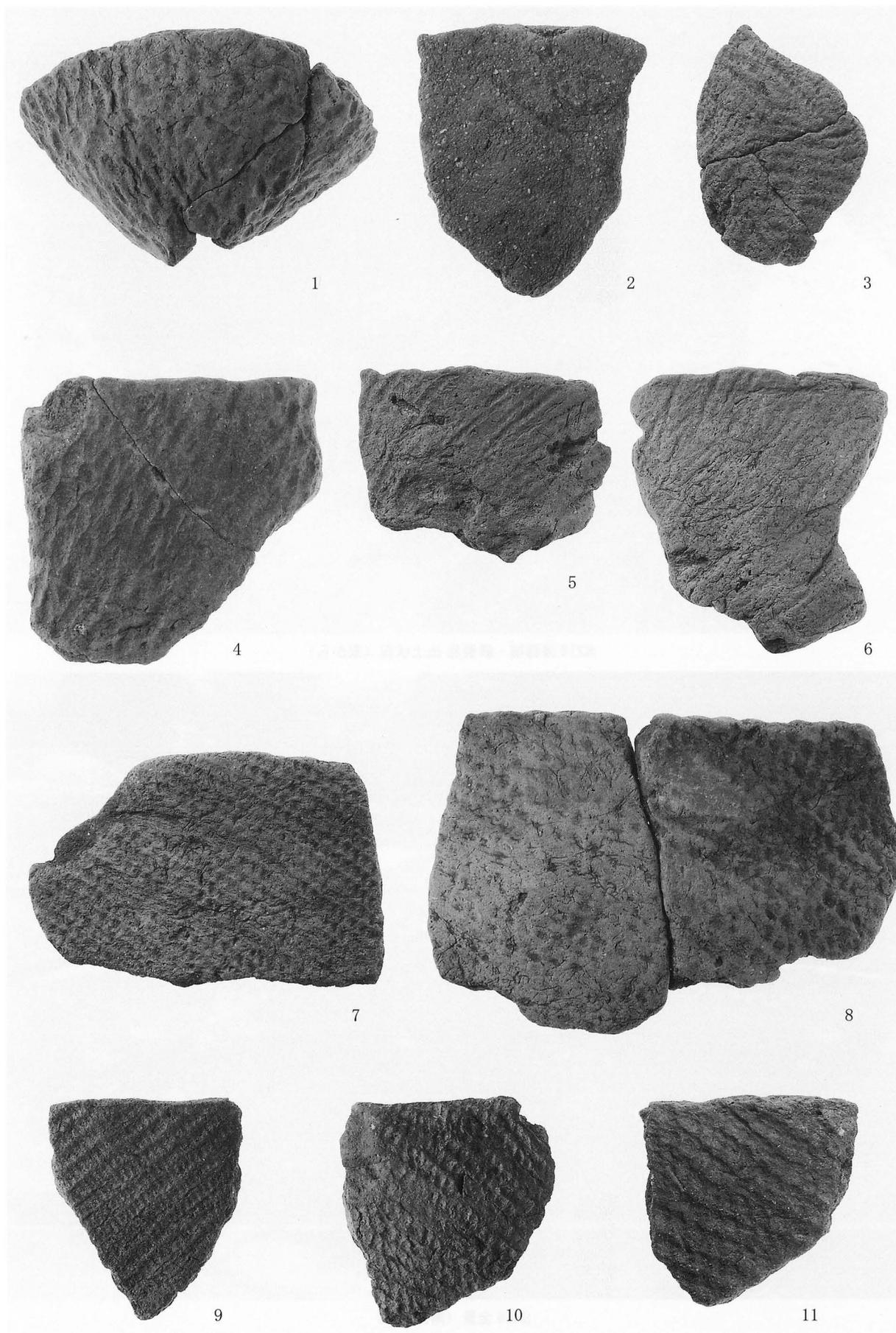
断面（西から）



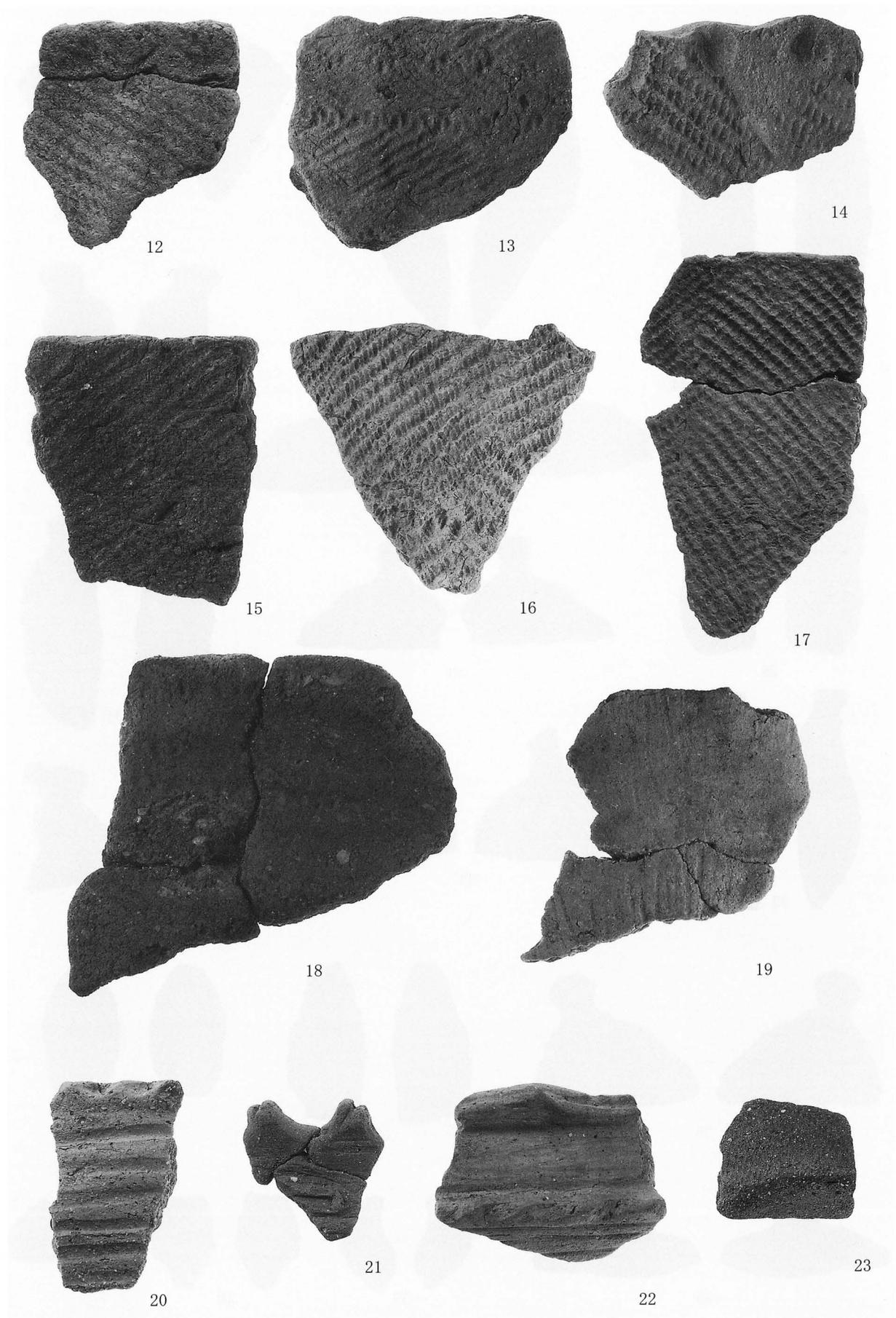
SZ18 漆器椀・鉄製品 出土状況（東から）



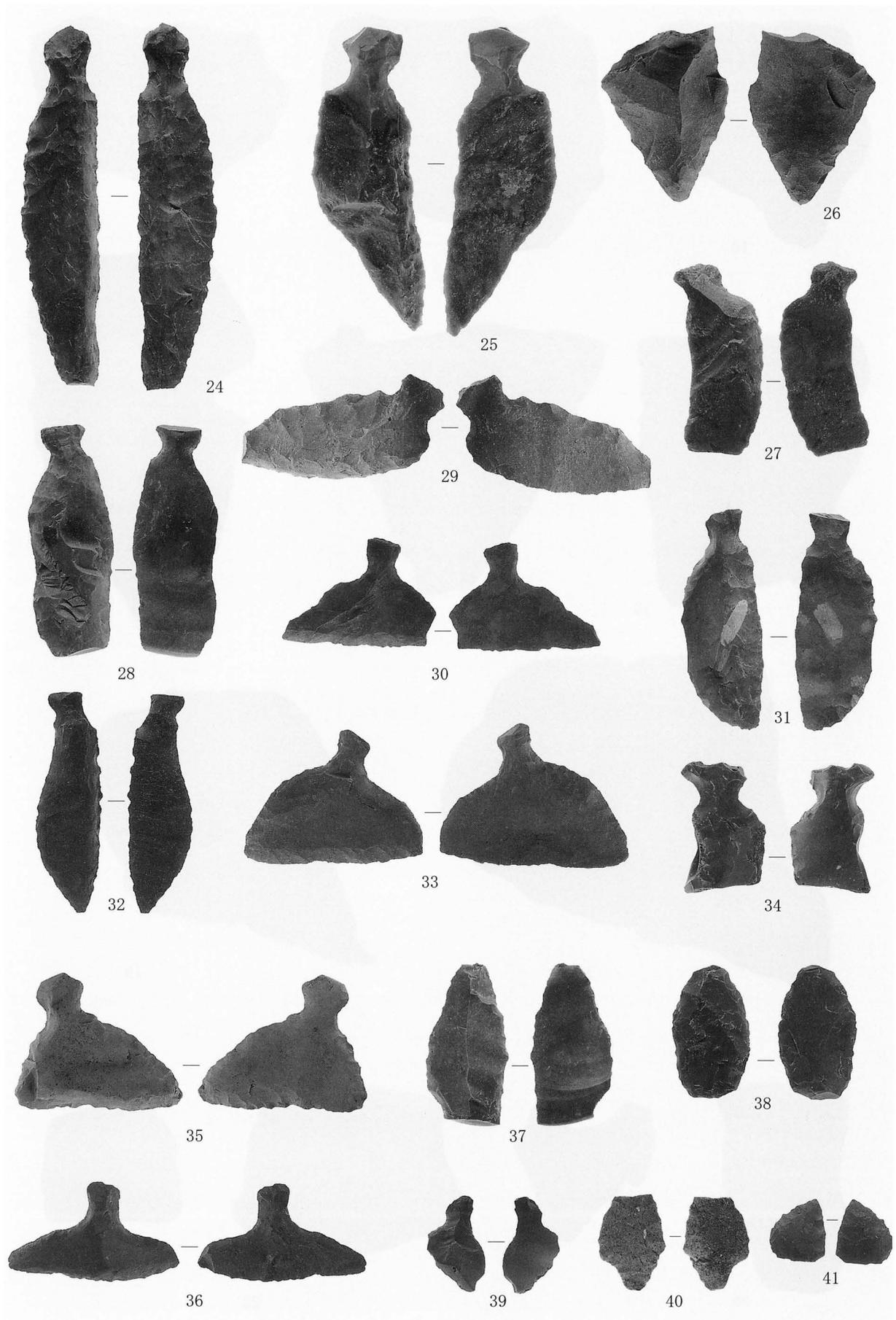
SX06 全景（南西から）



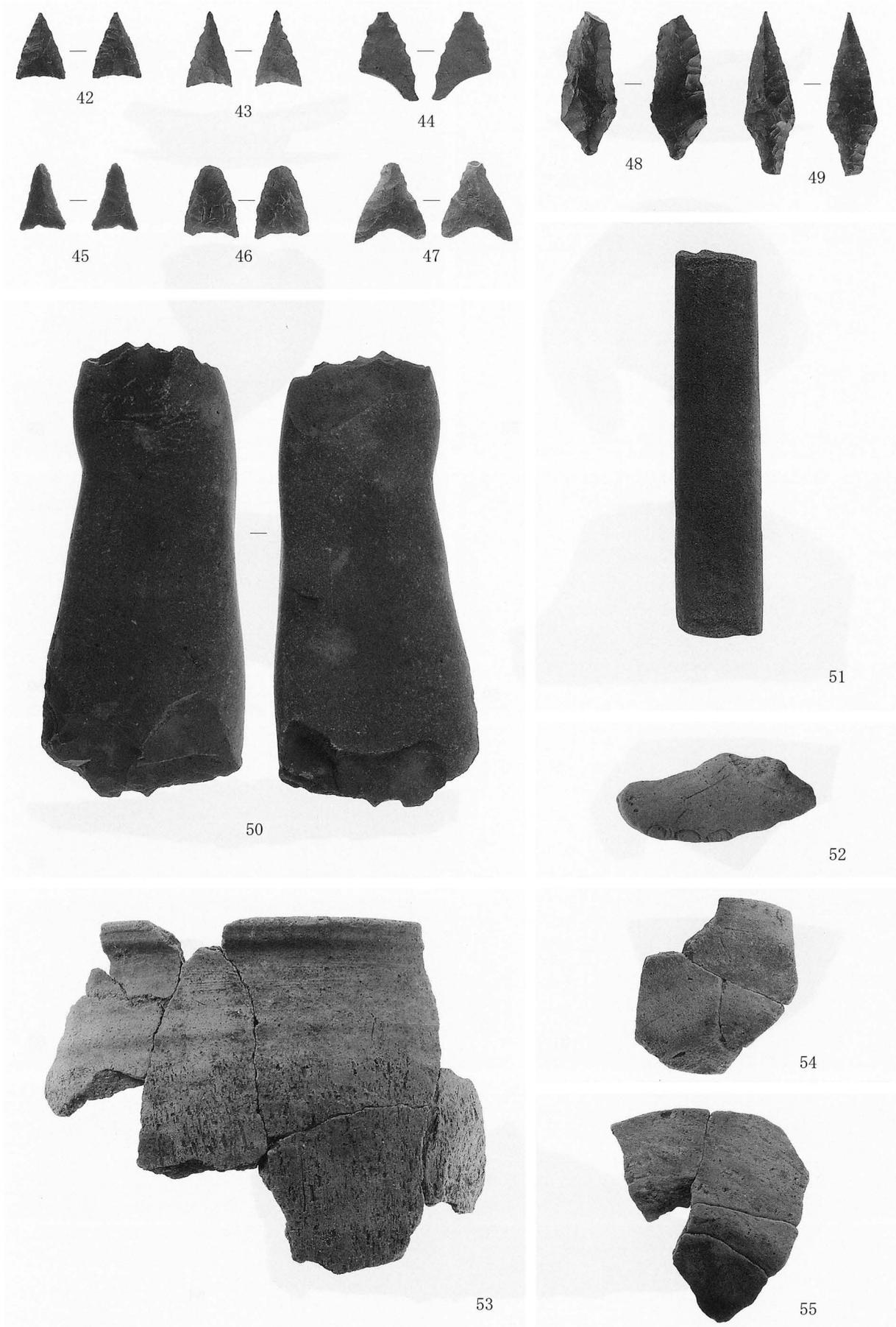
写真図版30 出土遺物(縄文土器 1)



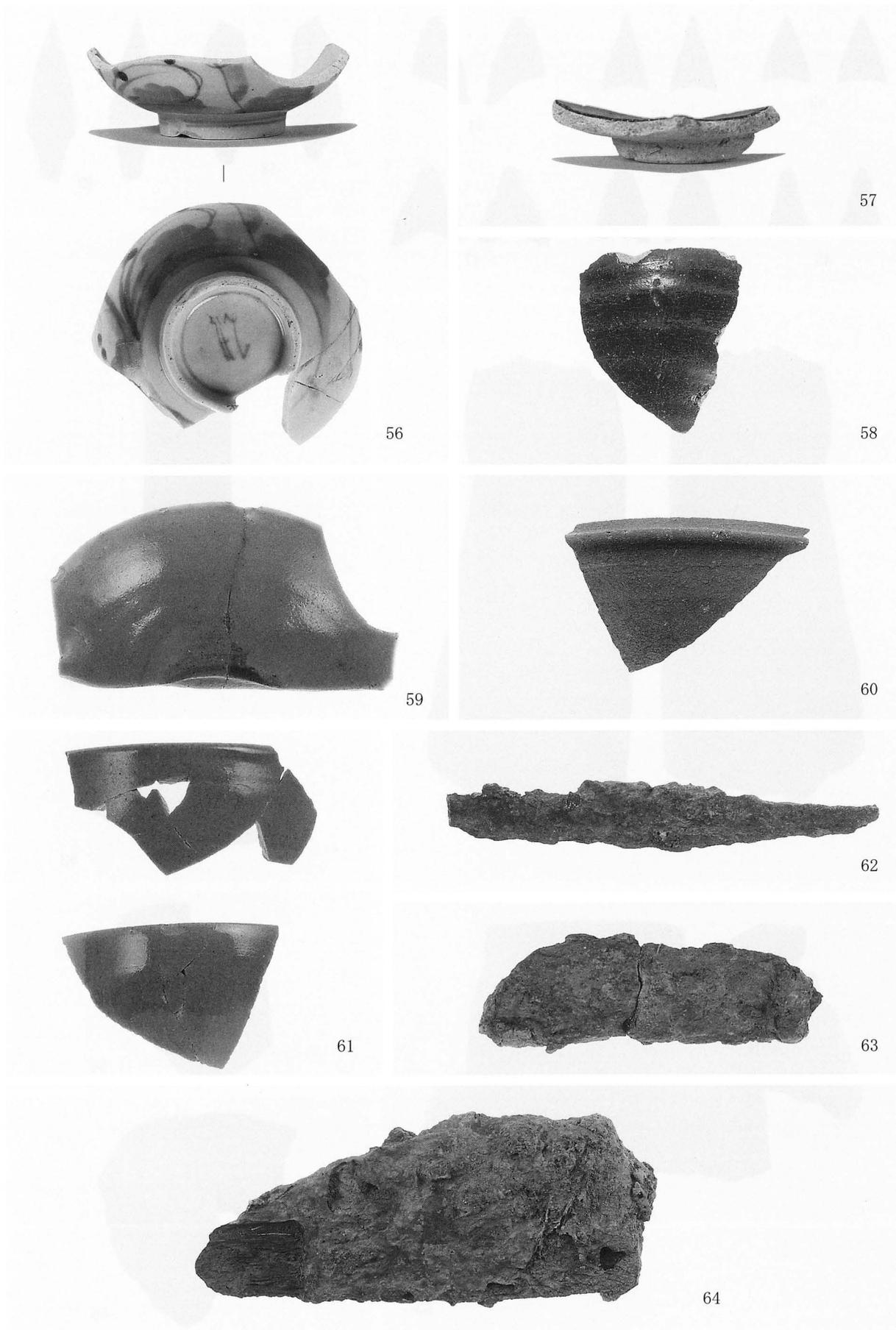
写真図版31 出土遺物(縄文土器2)



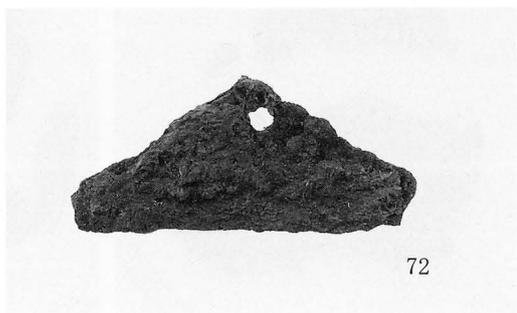
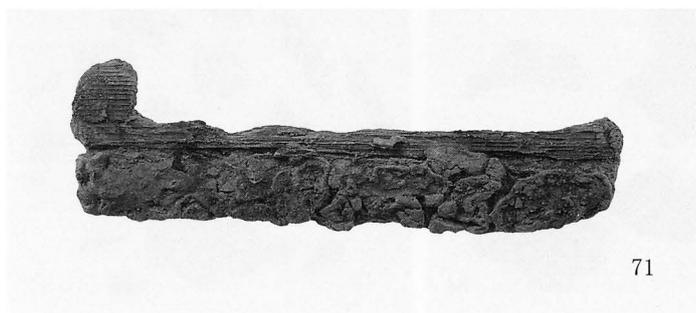
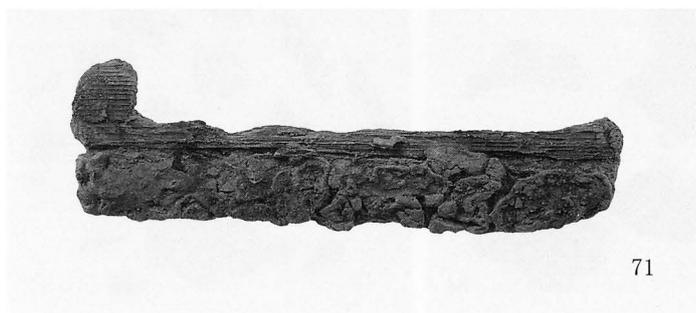
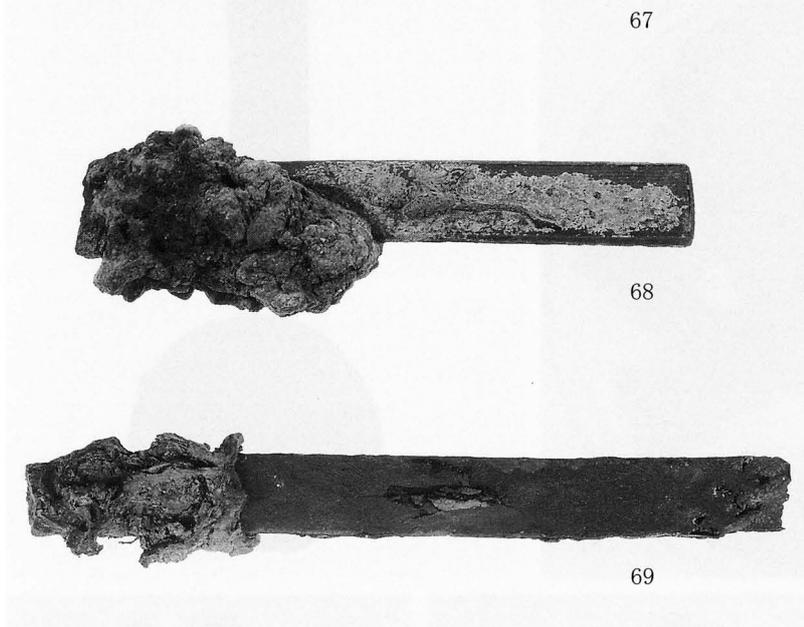
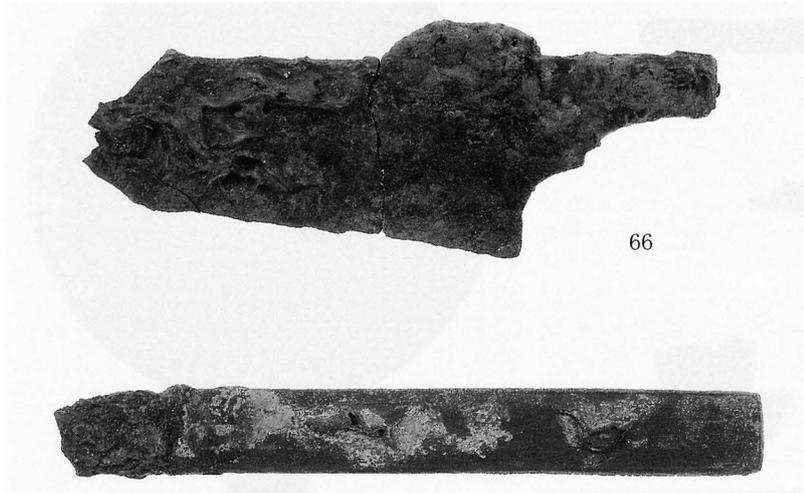
写真図版32 出土遺物(石器1)



写真図版33 出土遺物(石器2・石製品・土製品・土師器)



写真図版34 出土遺物(陶磁器1・金属製品1)



写真図版35 出土遺物(金属製品2)



73



74



75



76



77



78



79



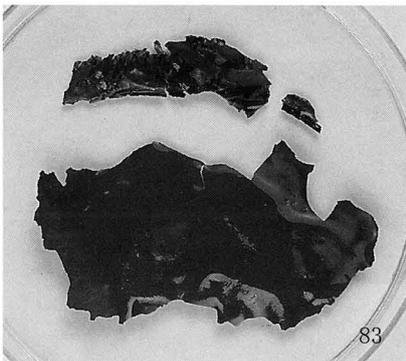
80



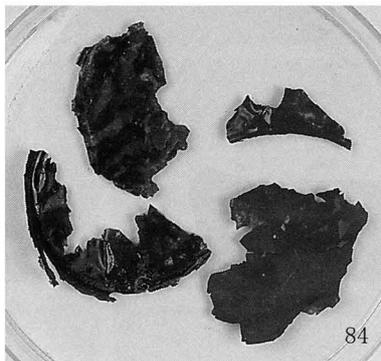
81



82



83

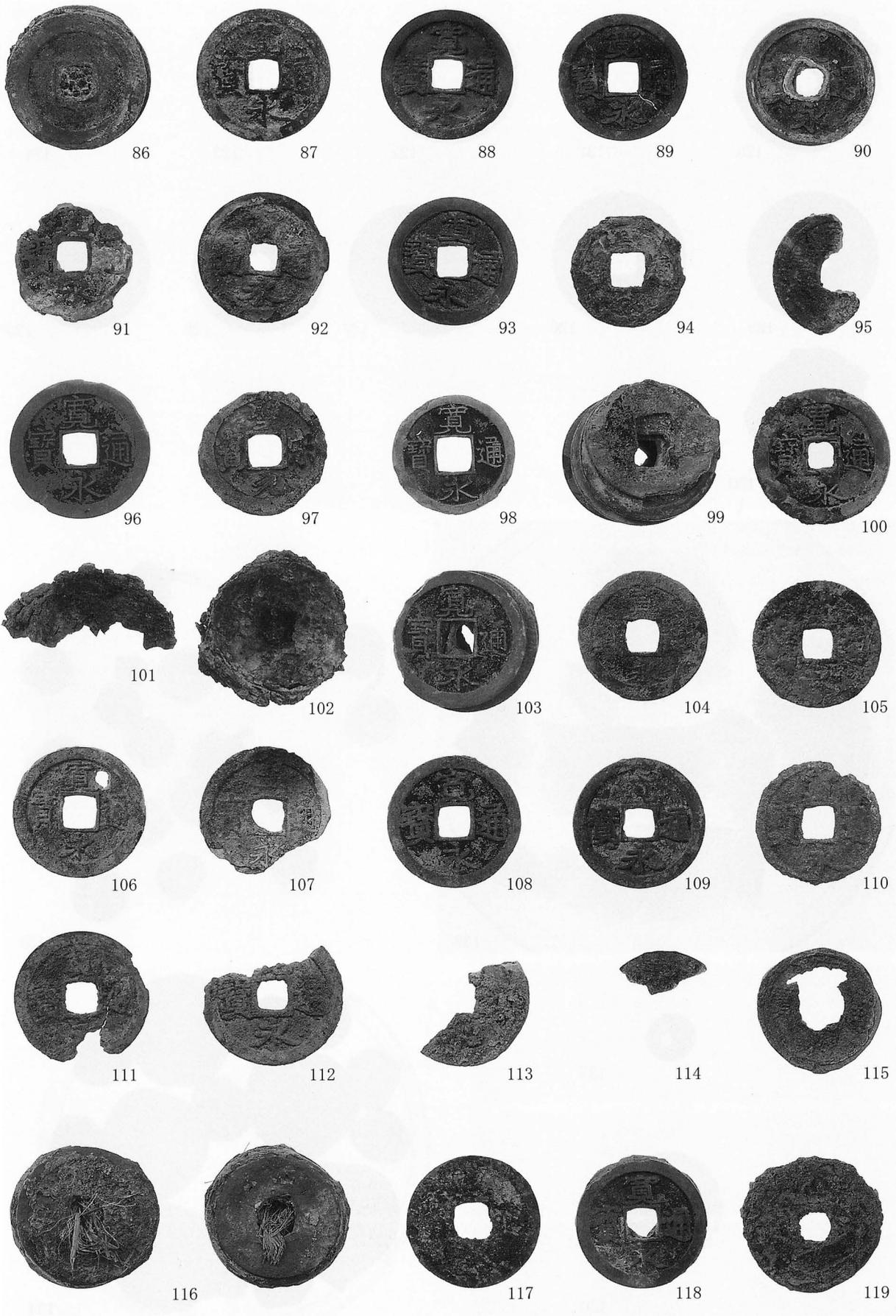


84

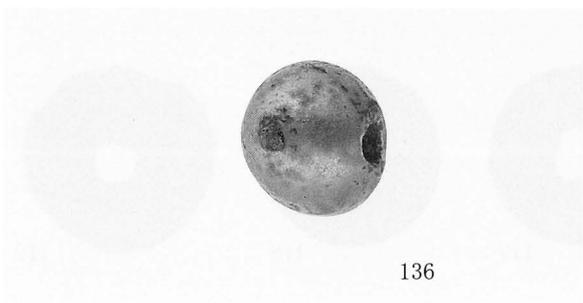
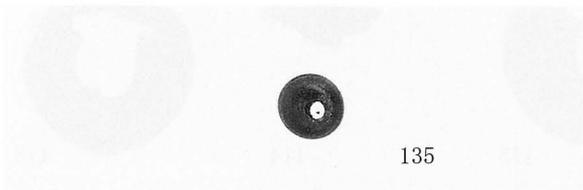
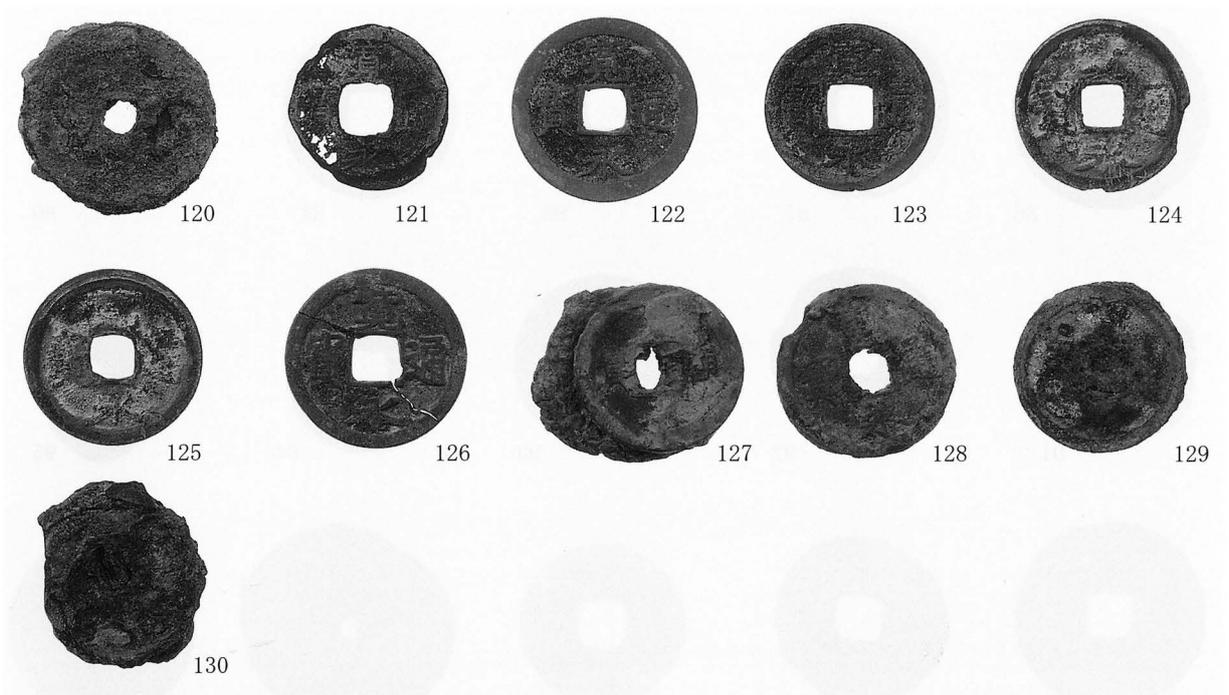


85

写真図版36 出土遺物(金属製品3・陶磁器2・漆器)



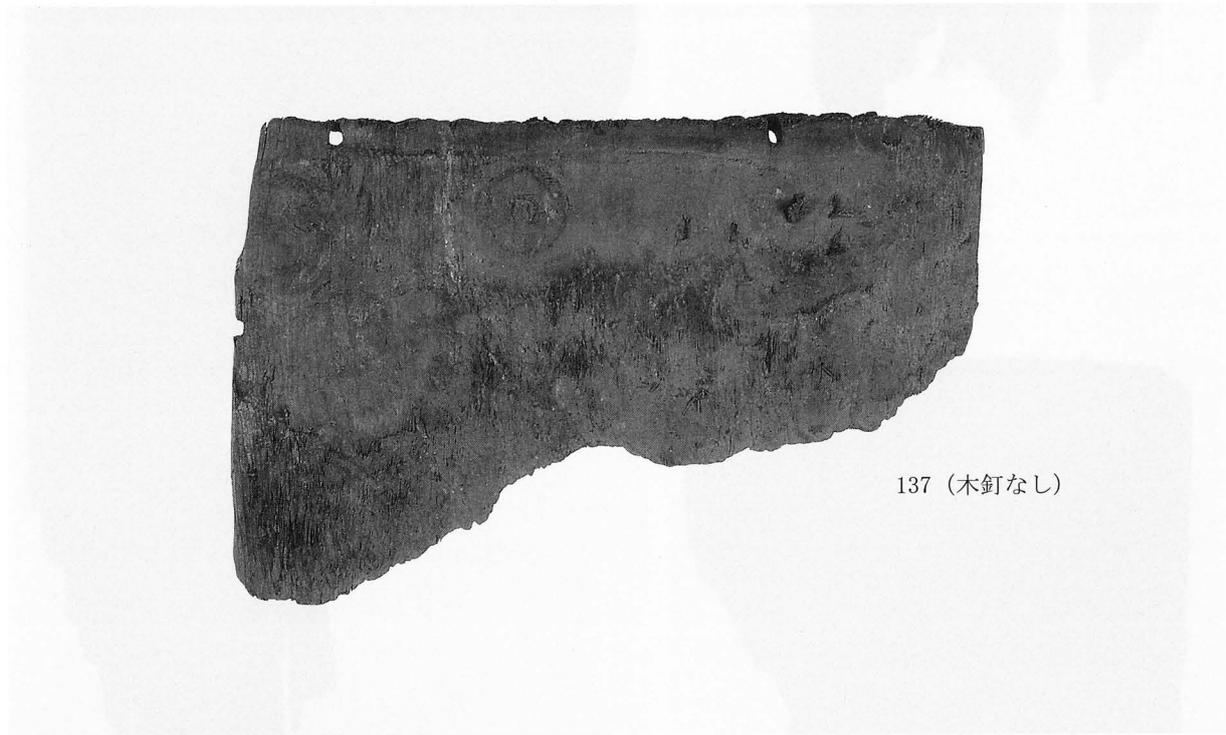
写真図版37 出土遺物(錢貨1)



写真図版38 出土遺物(錢貨2・その他)



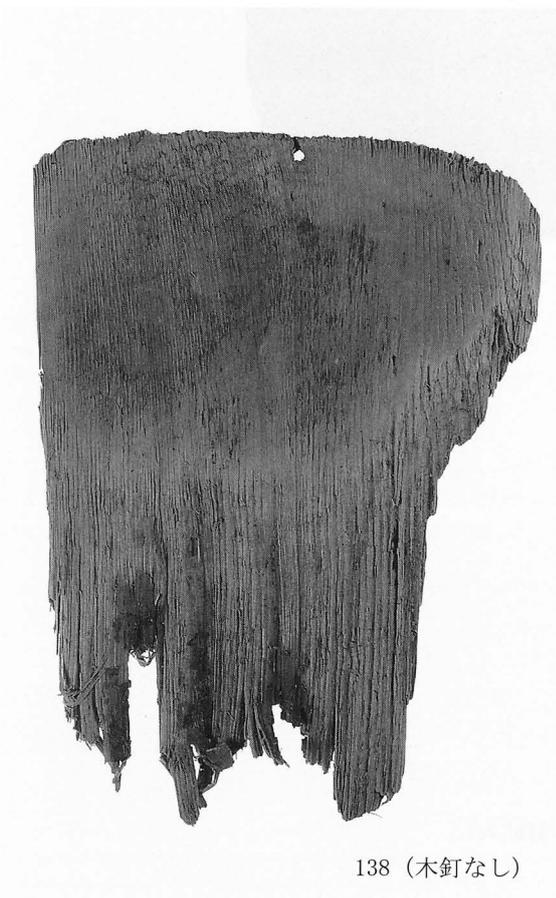
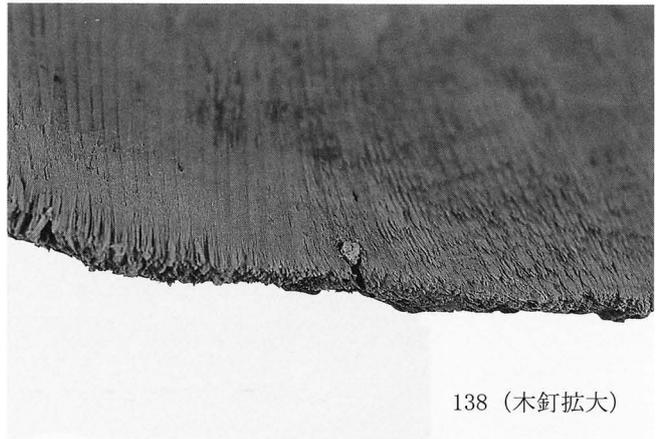
137 (木釘あり)



137 (木釘なし)



137 (木釘拡大)



報告書抄録

ふりがな	むかい2いせきはくつちようさほうこくしょ							
書名	向Ⅱ遺跡発掘調査報告書							
副書名	東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第549集							
編著者名	福島正和・高橋静歩							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2010年2月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むかい2いせき 向Ⅱ遺跡	いわてけんとおのし 岩手県遠野市 あやおりちようしあやおり 綾織町下綾織 だいちわり 第35地割123	03208	MF53-1203	39度 18分 59秒	141度 27分 29秒	2008.04.14 ～ 2008.07.31	8,000㎡	東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
向Ⅱ遺跡	集落遺跡	縄文時代	遺物含包層 1箇所	縄文土器 石器 土偶				
		古代	竪穴住居 2棟 焼土 3箇所	土師器				
		近世	掘立柱建物 1棟 墓壇 18基 溝 9条 柱穴状土坑 井戸 1基 土坑 7基	陶磁器 金属製品 柄鏡 銭貨 漆器 布片 数珠				
要約	<p>縄文時代早期～前期初頭の土器が出土し、当時の集落が近在すると考えられる。また、古代と考えられるカマドのない竪穴住居を2棟検出した。近くには平安時代の土器を伴う焼土がみられることから、この時期の集落縁辺部であったと考えられる。近世は屋敷、墓域、水田域がみられ、当時の風景を復元し得る事例である。</p>							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第549集

向Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成22年 2月15日

発 行 平成22年 2月19日

編 集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001

発 行 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
〒020-0066 岩手県盛岡市上田四丁目2番2号
電話 (019) 624-3195

(財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019) 654-2235

印 刷 (有)小松茂印刷所
〒020-0025 岩手県盛岡市大沢川原二丁目5-37
電話 (019) 623-6073

